(財)東大阪市文化財協会概報集

１９８９年度

1990．3

財団法人　東大阪市文化財協会

はしがき

東大阪市内には、100カ所以上の埋蔵文化財包蔵地が所在しています。本協会では、昭和57年の発足以来、東大阪市教育委員会の調査依頼を受け、市内の遺跡・古墳の発掘調査事業を実施しております。しかしながら、発掘調査件数はここ数年急増しており、一年中発掘調査に追われているのが現状であります。このため、整理作業が大幅に遅れ、日頃の要望の多い調査成果の公表にも十分に対応できない状態にありますが、少しでも早急に報告を行うよう職員一同努力しておるところであります。今回刊行いたします概報集も、これまでに発掘調査を実施いたしました4カ所の調査報告であり、いずれも貴重な成果を収録いたしております。

これらの成果が、少しでも文化財の普及啓発の一助となり、文化財保護、活用に役立てば幸いです。

最後、発掘調査、整理調査の実施にご協力をいただいた関係各位、機関にお礼申し上げます。

平成2年3月

財団法人　東大阪市文化財協会
常務理事　　塚田　氏秀

例　　言

1．本書は、財団法人東大阪市文化財協会が実施した西ノ辻遺跡・瓜生堂・巨摩廃寺遺跡・芝ケ丘遺跡・西の口遺跡の発掘調査概報集である。

2．調査並びに本報告書については以下の事務局体制で実施した。（平成２年３月31日現在）

事務局長　室田　和彦
事務局付　河本　　正
調査部長　原田　　修
調査副部長　勝田　邦夫
調査副部長　福永　信雄
調査部員　上野　節子
庶務部長　下村　晴文
庶務副部長　芋本　隆裕
庶務部員　安藤　紀子

3．調査の担当及び報告書執筆は以下のとおりである。

西ノ辻遺跡第26次発掘調査概報……才原金弘
瓜生堂遺跡第37次・巨摩廃寺遺跡第５次発掘調査概報……中西克宏
芝ケ丘遺跡第６次発掘調査概報……菅原章太
西の口遺跡第２次発掘調査概報……菅原章太

4．調査における土色名は、農林省農林水産技術会議事務所監修・財団法人日本色彩研究所監修の「新版標準土色帖」に準じた。

5．瓜生堂遺跡第37次・巨摩廃寺遺跡第５次発掘調査概報のⅣ章の花粉分析は、パリノサーヴェイ株式会社に委託して実施した。

本　文　目　次

西ノ辻遺跡第26次発掘調査概報
Ⅰ．調査に至る経過……1
Ⅱ．位置と環境……2
Ⅲ．調査の概要……4
1．調査の方法と地区割……4
2．層位……4
3．遺構……5
4．遺物……9
Ⅳ．まとめ……15
瓜生堂遺跡第37次・巨摩廃寺遺跡第５次発掘調査概報
Ⅰ．調査に至る経過……17
Ⅱ．位置と環境……18
Ⅲ．調査の概要……21
瓜生堂遺跡第37次発掘調査……23
1．Ａ地区……23
2．Ｂ地区……24
巨摩廃寺遺跡第５次発掘調査……28
1．Ａ地区……28
2．Ｂ地区……30
Ⅳ．瓜生堂遺跡第37次調査Ａ地区・巨摩廃寺遺跡第５次調査Ａ地区採取土壌の花粉分析…40
1．瓜生堂遺跡第37次調査Ａ地区採取土壌の花粉分析……40
2．巨摩廃寺遺跡第５次調査Ａ地区採取土壌の花粉分析……44
Ⅴ．まとめ……48
芝ケ丘遺跡第６次発掘調査概報
Ⅰ．調査に至る経過……49
Ⅱ．位置と環境……50
Ⅲ．調査の概要……51
1．層位……51
2．遺構……51
3．出土遺物……53
Ⅳ．まとめ……54

西の口遺跡第２次発掘調査概報

Ⅰ．調査に至る経過……55
Ⅱ．位置と環境……56
Ⅲ．調査の概要……57
　１．層位……58
　２．遺構……58
　３．出土遺物……60
Ⅳ．まとめ……64

図　版　目　次

西ノ辻遺跡第26次発掘調査概報

図版１　西ノ辻遺跡　遺構　１．東壁断面　２．溝１、落ち込み１

図版２　西ノ辻遺跡　遺構　１．中世遺構全景　２．弥生時代遺構全景

図版３　西ノ辻遺跡　遺構　１．溝２、３　２．溝２

図版４　西ノ辻遺跡　遺構　１．溝３　２．溝３内陸橋

図版５　西ノ辻遺跡　遺構　１．木棺墓　２．木棺墓

図版６　西ノ辻遺跡　遺構　１．溝２内遺物出土状況　２．溝２内遺物出土状況

図版７　西ノ辻遺跡　遺物　１．溝２、包含層出土遺物　弥生土器、蛸壺、石包丁、土錘、銭貨

図版８　西ノ辻遺跡　遺物　１．溝２出土土器　弥生土器
２．溝２・３、木棺墓出土土器　弥生土器

図版９　西ノ辻遺跡　遺物　１．溝２出土土器　弥生土器　２．溝２出土土器　弥生土器

図版10　西ノ辻遺跡　遺物　１．包含層出土土器　弥生土器
２．落ち込み１、溝１、包含層出土土器　須恵器、陶器、輸入磁器、土師器、瓦器

瓜生堂遺跡第37次・巨摩廃寺遺跡第５次発掘調査概報

図版11　瓜生堂遺跡　遺構　１．37次調査位置（西より）
２．Ａ地区ライナープレート設置風景

図版12　瓜生堂遺跡　遺構　１．Ａ地区作業風景　２．Ａ地区完掘状況

図版13　瓜生堂遺跡　遺構　１．Ｂ地区南北断面　２．Ｂ地区完掘状況

図版14　巨摩廃寺遺跡　遺構　１．第５次調査位置（南より）
２．Ａ地区遺構検出状況

図版15　巨摩廃寺遺跡　遺構　１．Ｂ地区作業風景　２．Ｂ地区南北断面

図版16　巨摩廃寺遺跡　遺構　１．Ｂ地区遺構検出状況（北より）
２．Ｂ地区井戸２立ち割り状況（北より）

図版17　瓜生堂遺跡　遺物　１．Ａ・Ｂ地区出土遺物　２．Ａ・Ｂ地区出土遺物

図版18　瓜生堂・巨摩廃寺遺跡　遺物　１．瓜生堂遺跡Ｂ地区出土遺物
２．巨摩廃寺遺跡Ａ地区出土遺物

図版19　巨摩廃寺遺跡　遺物　１．Ｂ地区出土遺物　２．Ｂ地区出土遺物

図版20　巨摩廃寺遺跡　１．遺構内出土遺物　２．井戸２井戸枠

図版21　瓜生堂遺跡　Ａ地区花粉化石

図版22　瓜生堂遺跡　Ａ地区花粉化石

図版23　巨摩廃寺遺跡　A地区花粉化石
図版24　巨摩廃寺遺跡　A地区花粉化石

芝ケ丘遺跡第6次発掘調査概報

図版25　芝ケ丘遺跡　遺構　1．調査前の状況　2．中世期の遺構検出状況
図版26　芝ケ丘遺跡　遺構　1．柱穴群掘削前の状況　2．柱穴群検出状況
図版27　芝ケ丘遺跡　遺構・遺物　1．ＳＤ９内遺出土状況
2．須恵器、土師器、弥生土器
図版28　芝ケ丘遺跡　遺物　1．黒色土器椀、土師器杯・高杯・甕
2．須恵器杯蓋・杯

西の口遺跡第2次発掘調査概報

図版29　西の口遺跡　遺構　1．ＳＤ78掘削前の状況（東より）
2．ＳＤ78検出状況（東より）
図版30　西の口遺跡　遺構　1．ＳＤ78内遺物出土状況
2．ＳＤ78内弥生土器甕出土状況
図版31　西の口遺跡　遺構　1．弥生時代遺構全景（南より）
2．ＳＤ78周辺土層断面
図版32　西の口遺跡　遺物　1．弥生土器　高杯・器台・甕
図版33　西の口遺跡　遺物　1．ＳＤ78内出土弥生土器甕口縁部
2．ＳＤ78内出土弥生土器甕底部
図版34　西の口遺跡　遺物　1．弥生土器（ＳＤ78内）壺・高杯、須恵器杯、白磁碗
2．立会調査出土土器

挿　図　目　次

西ノ辻遺跡第26次発掘調査概報

第1図　調査地点位置図……1
第2図　遺跡周辺図……3
第3図　断面実測図……5
第4図　中世遺構実測図……6
第5図　弥生時代遺構実測図……6
第6図　木棺墓実測図……7
第7図　方形周溝墓配置図……8
第8図　溝2出土土器実測図……10
第9図　溝2・3、木棺墓出土土器実測図……11

第10図　落ち込み１、溝１出土土器実測図……12
第11図　包含層出土土器実測図……13
第12図　土製品、石製品、銭貨実測図……14

瓜生堂遺跡第37次・巨摩廃寺遺跡第５次発掘調査概報

第13図　調査地点位置図……17
第14図　遺跡分布図……19
第15図　調査地点平板実測図……22
第16図　Ａ地区南北断面実測図……23
第17図　Ｂ地区南北断面実測図……25
第18図　Ａ・Ｂ地区出土遺物実測図……26
第19図　Ｂ地区出土遺物実測図……27
第20図　Ａ地区南北断面実測図……28
第21図　Ａ地区遺構検出状況実測図……29
第22図　Ａ地区出土遺物実測図……30
第23図　Ｂ地区南北断面実測図……31
第24図　Ｂ地区遺構検出状況実測図……32
第25図　井戸２実測図……33
第26図　Ｂ地区出土遺物実測図……37
第27図　Ｂ地区遺構内出土遺物実測図……38
第28図　Ｂ地区遺構内出土遺物実測図……39
第29図　瓜生堂遺跡第37次発掘調査Ａ地区南北断面における花粉化石群集の変遷図……42
第30図　巨摩廃寺遺跡第５次調査Ａ地区試料における花粉化石群集の変遷図……46

芝ケ丘遺跡第６次発掘調査概報

第31図　芝ケ丘遺跡と調査地点位置図……49
第32図　遺跡周辺図……50
第33図　土層断面図……51
第34図　検出遺構平面図……52
第35図　出土遺物実測図……54

西の口遺跡第２次発掘調査概報

第36図　調査風景……55
第37図　遺跡周辺図……56
第38図　第１次調査検出遺構と第２次調査地……57
第39図　ＳＤ78断面図……58
第40図　土層断面図……59
第41図　遺構配置図……59

第42図　ＳＤ78内出土土器実測図……61
第43図　立会調査出土土器実測図……62
第44図　古墳時代以降の土器実測図……63

表　目　次

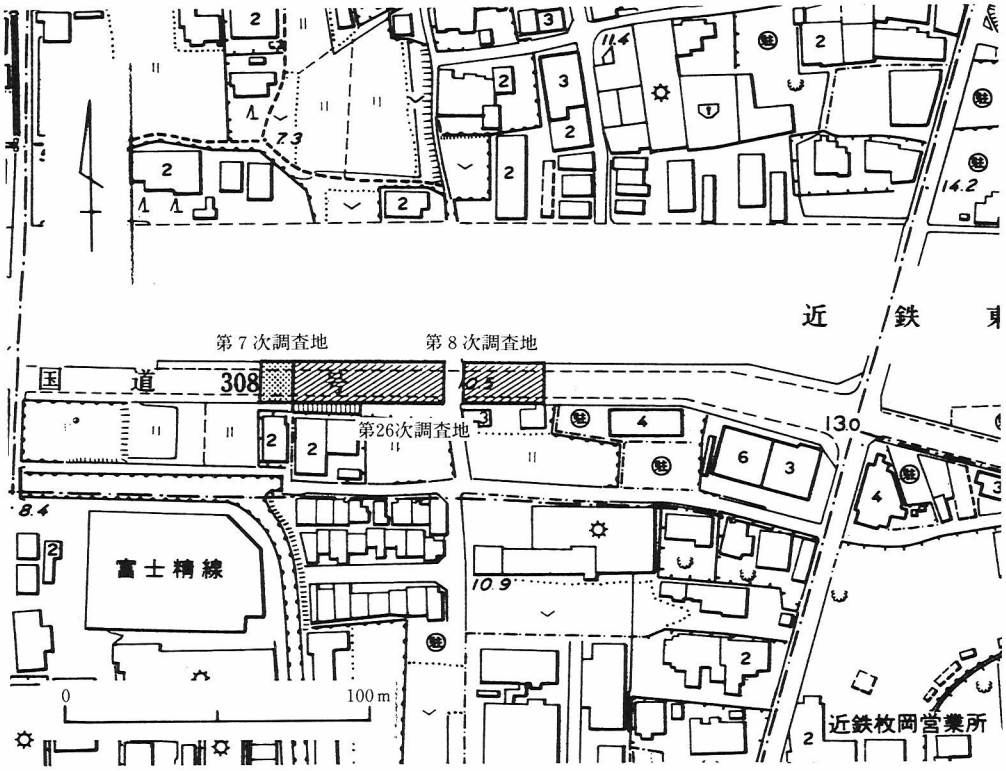
瓜生堂遺跡第37次・巨摩廃寺遺跡第５次発掘調査概報
第１表　巨摩廃寺遺跡検出遺構一覧表……34
第２表　瓜生堂遺跡第37次発掘調査Ａ地区南北断面試料の花粉分析結果……41
第３表　巨摩廃寺遺跡第５次発掘調査Ａ地区試料における花粉分析結果……45
芝ケ丘遺跡第６次発掘調査概報
第４表　ピット一覧表……53

西ノ辻遺跡第26次発掘調査概報

Ⅰ．調査に至る経過

西ノ辻遺跡は弥生～室町時代に至る複合遺跡である。現在の行政区分では東大阪市西石切町１丁目・３丁目、東山町、弥生町に相当する。西ノ辻遺跡は昭和16年より調査が実施され、弥生時代後期の標式遺跡として学史的にも著名な遺跡である。近年、大阪府、東大阪市教育委員会、(財)東大阪市文化財協会によって近鉄東大阪線建設工事に伴って大規模な調査が実施され、大きな成果が得られている。また、鉄道開通に伴って周辺開発が進みつつあり、マンション等の建設工事が増加している。

今回、西石切町３丁目155－1でビル建設工事が実施されることになった。工事予定地は西ノ辻遺跡内にあり、東大阪市教育委員会文化財課が試掘調査を実施した結果、遺構、遺物が存在することが確認され、事前の発掘調査が必要との見解が出された。原因者と東大阪市教育委員会で協議した結果、発掘調査を実施することになった。発掘調査は財団法人東大阪市文化財協会に委託しておこなった。調査面積は67m²であり、現場調査は平成元年７月４日～27日まで実施した。今回の調査は第26次調査になる。



第１図　調査地点位置図

II．位置と環境

西ノ辻遺跡は弥生時代～中世に至る複合遺跡である。当遺跡は生駒山西麓の扇状地上に立地し、標高７～20ｍを測る。現在の行制区分では東大阪市東山町、弥生町、西石切町３丁目に相当する。

生駒山西麓に人々が住み始めるのは旧石器時代からである。当時代の遺跡は標高100ｍ前後の地点で多くみられ、草香山、芝坊主山、正興寺山遺跡などが古くより知られている。近年、鬼虎川遺跡で発掘調査が実施され、縄文時代前期の海岸線が検出された[①]。海岸線に落ち込んだ状態でナイフブレードや翼状剝片が出土している。

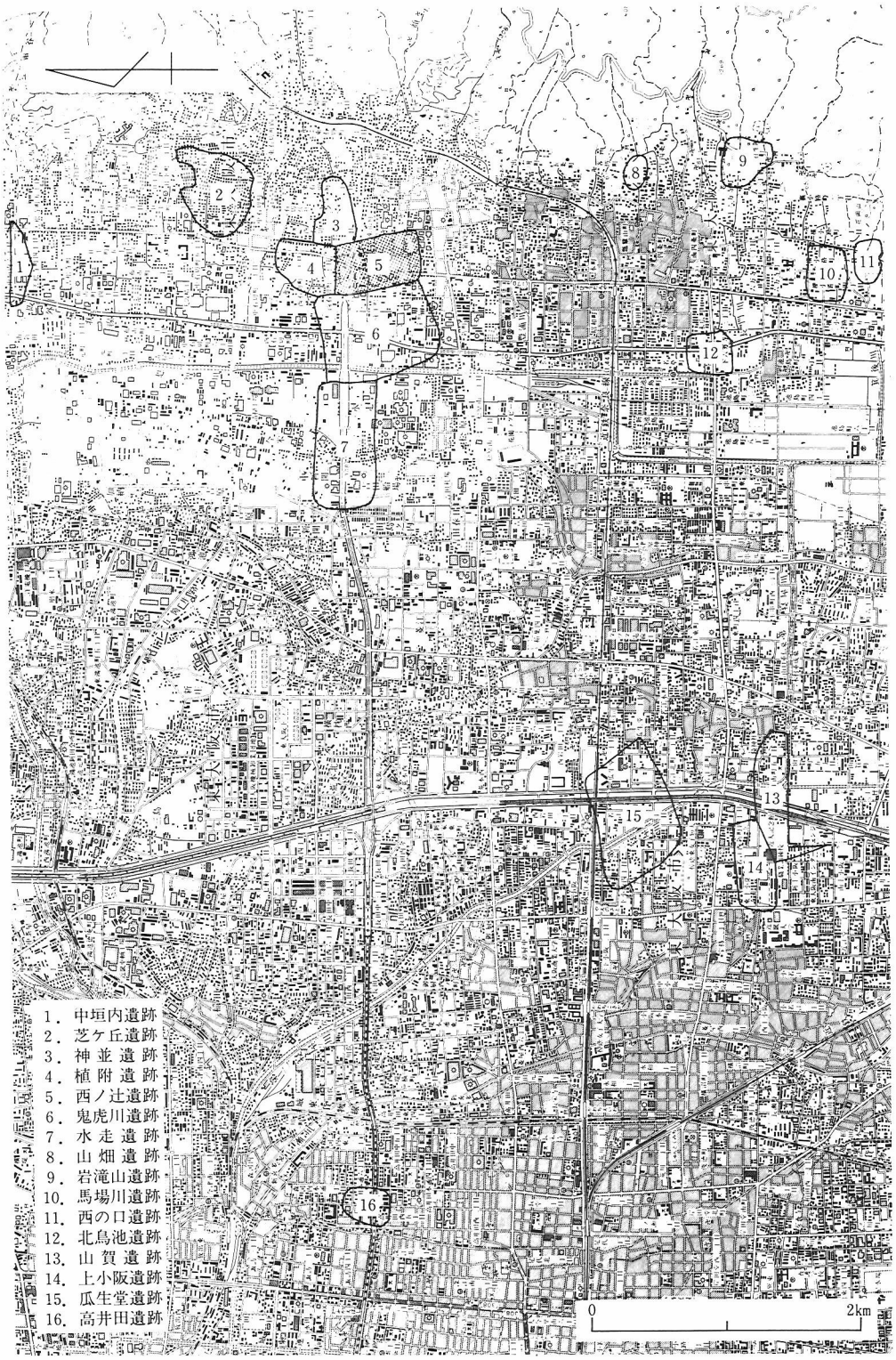
縄文時代になると当遺跡の東に神並遺跡が出現する。神並遺跡は早期の遺跡であり、多量の押型文土器と土偶、石鏃、石匙、有舌尖頭器などが出土している[②]。前・中期の遺跡は前述した鬼虎川遺跡があり、当遺跡の西に位置する。後・晩期になると日下、鬼塚、縄手、馬場川遺跡などが出現する。日下遺跡は府下でも数少ない貝塚として著名な遺跡である。近年の調査では環状列墓や室内に炉を有する竪穴住居も検出されている[③]。縄手遺跡では竪穴住居[④]や石組遺構[⑤]などが検出されている。

弥生時代になると当遺跡が出現する。当時代の遺跡は前代に引き続き扇状地上に立地するもの、標高100ｍ前後の高所に立地するものがある。また、平野部にも出現し、自然堤防上に集落を形成している。前期の遺跡は中垣内、鬼虎川、鬼塚、縄手、瓜生堂、山賀、高井田遺跡などがある。前期に出現した遺跡は中期にも継続し、大集落を形成するものが多い。中期になると新たに当遺跡や植附、山畑遺跡などが出現する。当遺跡では自然河川の谷や方形周溝墓、甕棺、溝などが検出されている[⑥]。当遺跡の西に位置する鬼虎川遺跡でも方形周溝墓や木棺墓などが検出されており、隣接して墓域があったことが明らかになってきた[⑦]。また、当遺跡は後期に継続するが、新たに北鳥池、岩滝山、馬場川、上小阪遺跡などが出現する。前・中期の遺跡は大集落を形成するものが多いが、後期の遺跡は小規模となる。

古墳時代の遺跡は芝ケ丘、神並、鬼塚、縄手、西岩田遺跡などがある。また、生駒山西麓の各尾根筋には古墳が数多く造られている。西ノ辻遺跡では自然河川の谷に木組暗渠や石組貯水施設などが造られている[⑧]。神並遺跡では掘立柱建物が検出されている[⑨]。古墳は中期の時期のものが東大阪市域では最も古く、塚山、えのき塚、大賀世古墳などがある。後期になると群集墳を形成しており、十基前後から数十基単位で構成されている。墓尾、神並、みかん山、出雲井、客坊山、山畑、花草山、五里山古墳群などがあげられる。

奈良時代以降になると当遺跡では掘立柱建物、井戸、土坑、土坑墓などが検出されている。当遺跡周辺には神並、水走遺跡などの集落がある。また、東には法通寺があり、建物基壇などの遺構が検出されている[⑩]。

当遺跡周辺は旧石器時代より今日に至るまで生活に適した場所であったらしく、各時代の遺構、遺物が存在する。


1．中垣内遺跡
2．芝ケ丘遺跡
3．神並遺跡
4．植附遺跡
5．西ノ辻遺跡
6．鬼虎川遺跡
7．水走遺跡
8．山畑遺跡
9．岩滝山遺跡
10．馬場川遺跡
11．西の口遺跡
12．北鳥池遺跡
13．山賀遺跡
14．上小阪遺跡
15．瓜生堂遺跡
16．高井田遺跡
0
2km

第2図　遺跡周辺図

Ⅲ．調査の概要

１．調査の方法と地区割

今回の調査地は国道308号線の南に隣接しており、同国道拡幅工事および鉄道建設工事がすでに北側で実施されている。同調査では水走、鬼虎川、西ノ辻、神並遺跡を覆う地区割が設定されている。今回の調査では西ノ辻遺跡の第７次調査地に隣接しており、遺構が関連すると考えられたので、地区割を踏襲する。地区割は建設省告示による第Ⅵ座標系を利用した。原点を東大阪市川中（Ｘ＝－146.200、Ｙ＝－34,600）に設定し、100ｍ方画を大地区とし、さらに、大地区を５ｍ方画に分割し小地区とした。地区名称は、各々の地区ラインに名称を与え、直交する２方向のラインの名称を組み合せて地区名称とした。大地区のラインの名称は、南北ラインが原点より東に向かって、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ……、東西ラインが南に向かってＡ、Ｂ、Ｃ、……である。小地区の名称は大地区と同様に、南北ラインが原点より東に向かって１、２、３……、東西ラインが南に向かってａ、ｂ、ｃ……である。したがって、各地区の名称は、南東隅交点のライン名称となり、原点を含む小地区「IA1a」と表わされる。今回の調査地区はXIXＦ12h～15hになる。

調査は地表下約１ｍが盛土であったので機械掘削をおこなった。下層の約40～80cmは遺物包含層であったので人力掘削によって精査した。

２．層位（第３図）

南壁、東壁の断面実測図を作成した。以下、各層ごとに特徴を記す。

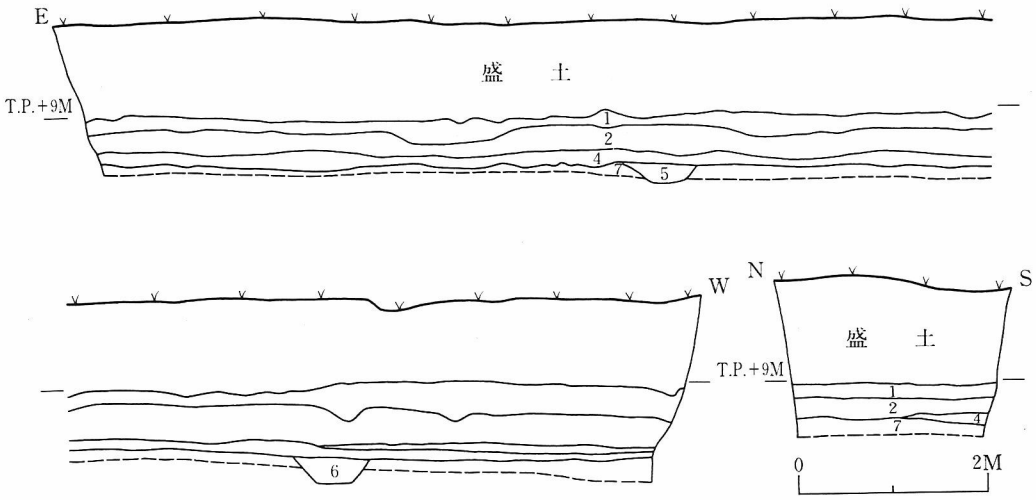
第１層　オリーブ黒色（5Y3/1）に褐色（7.5YR4/4）が斑点状に混じるシルト質粘土層。２～３cmの礫を極微量、３～５mmの礫を少量含む。層厚は約10～40cmを測り、西側で厚くなる。弥生時代～中世の遺物を含む。

第２層　黒褐色(2.5Y3/1)に暗褐色(10YR3/3)が斑点状に混じる粘土質シルト層。２～５mmの礫を少量、炭化物を微量含む。西にいくにしたがい褐色（7.5YR4/6）粘土質シルトが小ブロック（５～10cm）で混じる。層厚は約10～40cmを測り、西側で厚くなる。弥生時代～中世の遺物を含む。

第３層　灰色(7.5Y4/1)シルト層。１mm大の砂粒がレンズ状に堆積する。炭化物を微量に含む。調査地の西側約４ｍより西に広がる。溝１（中世）内の堆積層である。層厚は約10cmを測る。

第４層　オリーブ黒色（7.5Y3/1）に赤褐色（5YR4/6）が斑点状に混じる粘土質シルト層。１～２cmの礫を微量、２～５mmの礫を少量含む。溝１（中世）内の堆積層である。層厚は約10～20cmを測る。

第５層　黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土層。下部にいくにしたがいシルト質が強くなる。５



第３図　断面実測図

～10cmの礫を微量、１～２cmの礫を少量、５mm以下の礫を多量に含む。炭化物を少量含む。溝３（弥生時代）内の堆積層である。

第６層　黒褐色(10YR3/1)シルト質粘土層。５～20cmの礫を微量、１～２cmの礫を少量、５mm以下の礫を多量に含む。炭化物を微量に含む。溝２(弥生時代)内の堆積層である。

第７層　暗赤褐色（5YR3/4）と黒褐色（10YR3/2）が混じる粘土層。0.5～１mm大の砂粒を微量含む。弥生時代と中世の遺構面。

３．遺構

第７層上面で中世と弥生時代の遺構を検出した。中世の遺構は溝１条と落ち込み１ケ所を検出した。弥生時代の遺構は溝２条と木棺墓１基を検出した。本調査地は第７次調査地の南に隣接するので、第７次調査地と対照しながら遺構の説明を記す[11]。

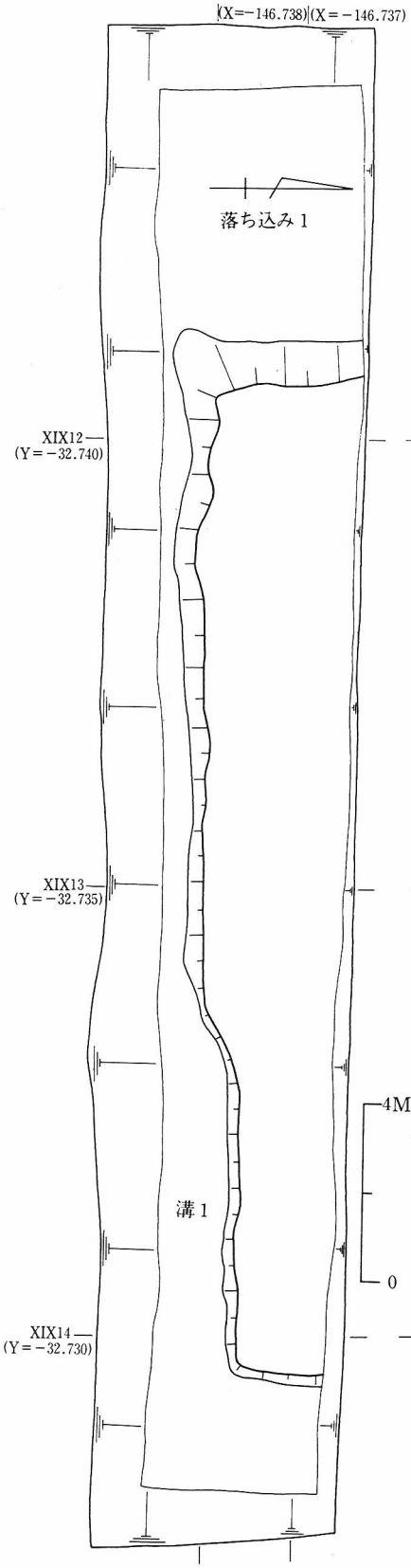
中世の遺構(第４図)

溝１

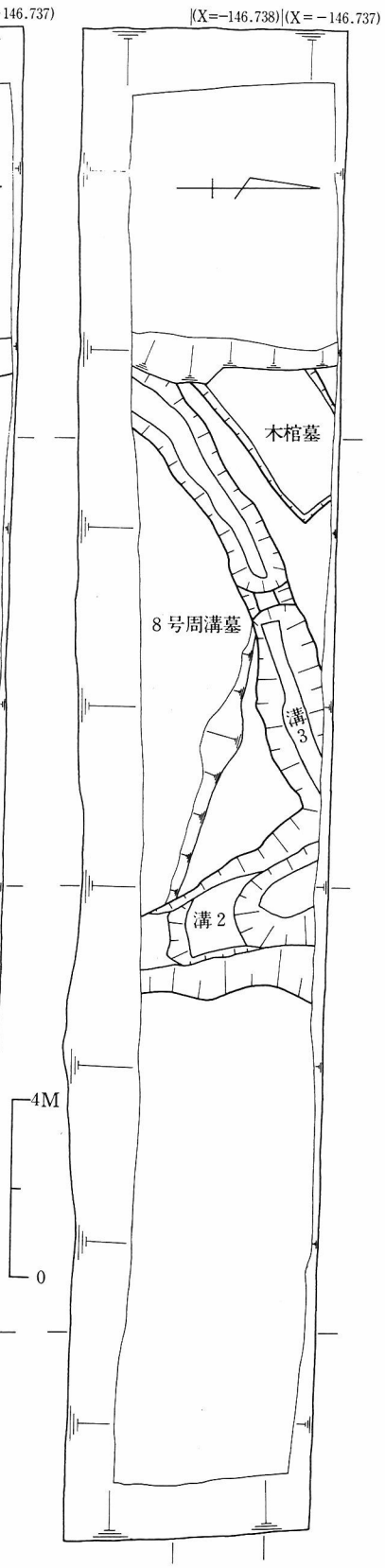
調査地東側で南北方向に伸び、南側でＬ字形に曲がって東西方向に伸びる溝である。東と南肩が調査地外にある。西側は落ち込み１と切り合っているが前後関係は不明である。溝底は西側に向かってやや深くなる。残存幅1.2ｍ、深さ0.2ｍを測る。東側では10～20cmの石が集石していた。溝内より瓦器、土師器、陶器などが出土した。出土遺物より溝の時期は13～14世紀と考えられる。東側部分は第７次調査地のＳＤ64に続くと思われる。

落ち込み１

調査地西側で検出した。溝１と切り合っているが前後関係は不明である。落ち込みとしたが第７次調査のＳＤ64に続くと思われる。残存幅3.4ｍ、深さ0.4ｍを測る。落ち込み内より輸入磁器、陶器、瓦器、土師器などが出土した。出土遺物より落ち込みの時期は14～15世紀と考えられる。



第4図　中世遺構実測図



第5図　弥生時代遺構実測図

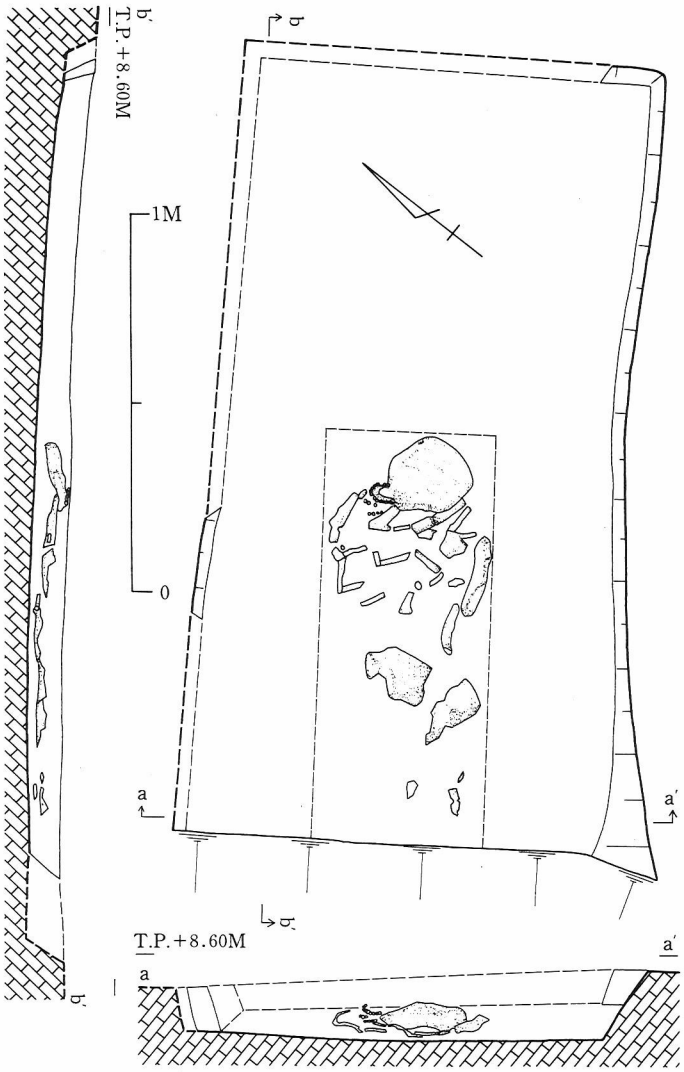
弥生時代の遺構(第５図)

溝２

調査地中央で検出した。北西から南東方向に伸びる溝である。溝幅は北で2.2ｍ、南で0.9ｍを測る。溝底は南より北に向かって３段に掘削されており、１段目が19cm、２段目が42cm、３段目が68cmを測る。溝内より壺、甕、鉢、高杯などの土器や石庖丁、蛸壺などが出土した。遺物は溝の上層から中層にかけて多く認められた。出土遺物より溝の時期は第Ⅱ～Ⅳ様式と考えられる。第７次調査のNo.３－Ｎに続くと思われる。

溝３

調査地西側で検出した。北東から南西方向に伸びる溝である。南西部の肩を落ち込み１に切られる。溝は幅0.5～0.7ｍ、深さ28～41cmを測る。溝中央部に陸橋を削り残しており、上部幅22cm、下部幅55cmを測る。溝内より壺、甕、蓋などが出土した。出土遺物より溝の時期は第Ⅱ～Ⅳ様式と考えられる。第７次調査のNo.３－Ｎに続くと思われる。

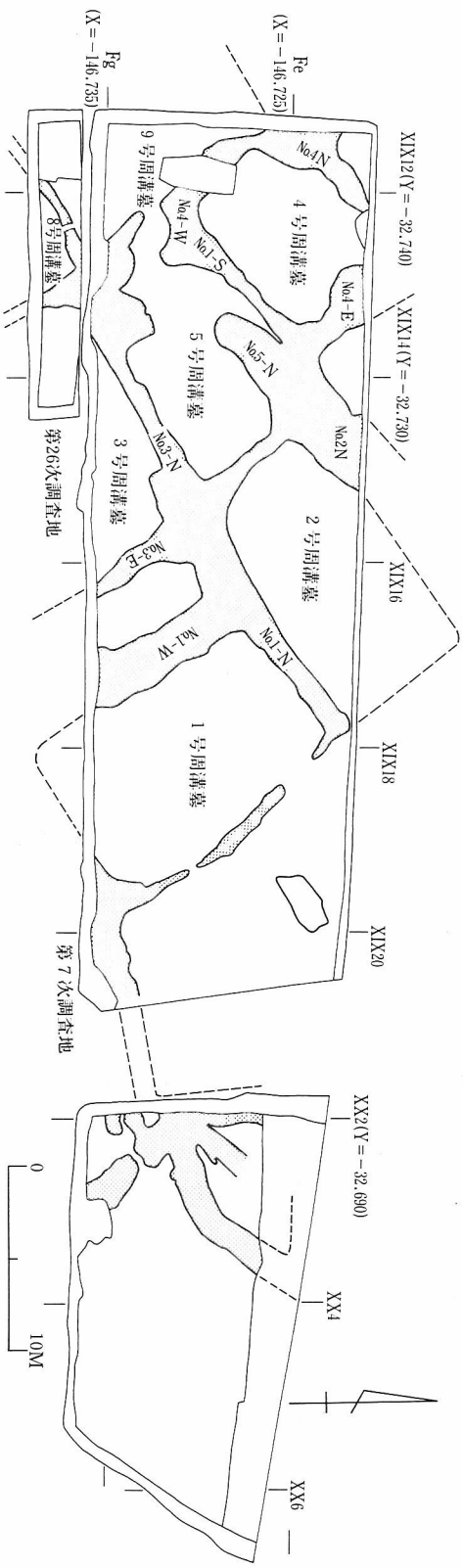


第６図　木棺墓実測図

木棺墓(第６図)

溝３の西側で検出した。西側部を落ち込み１によって切られており、北東隅が調査地外にある。主軸がＮ－52°－Ｅを向く。木棺墓の掘方は長方形を呈すると考えられ、長さ220cm以上、幅108cm、深さ10cmを測る。埋土は黒褐色(10YR3/1)シルト質粘土である。棺材は残っていなかったが、棺内に盛土が落ち込んでおり、明黄褐色(10YR7/6)粘土が埋っていた。木棺の規模(第６図の破線部分)は長さ110cm以上、幅43cmを測る。木棺内には人骨が残っているが、保存状態は悪い。頭位は北東を向いている。

掘方内より壺、甕の破片が出土した。木棺墓の時期は第Ⅱ～Ⅳ様式と考えられる。



第７図　方形周溝墓配置図

第７・26次調査の遺構(第７図)

第７次調査地と第26次調査地は隣接する。今回の調査で検出した遺構は第７次調査地の遺構と関連するものがあるのでまとめておきたい。弥生時代の遺構は溝２・３と木棺墓を１基検出した。詳細については前頃で記した。第７次調査地では弥生時代の方形周溝墓が７基検出されている。今回、検出した溝２・３は方形周溝墓の周溝である。第７・26次調査の図面を照合した結果、溝２・３は第７次調査地の３・５号周溝墓が共有する周溝No.３－Ｎに続くことが明らかになった。溝２・３の検出によって新たに２基の方形周溝墓が確認された。第７次調査で検出した方形周溝墓の番号を踏襲し、８号周溝墓、９号周溝墓とする。８号周溝墓は溝２・３によって区画されており、調査地の南側へ広がる。主体部は不明である。９号周溝墓は溝３と第７次調査地のNo.４－Ｗによって区画されている。第７次調査地では中世の削平を受けており、主体部が検出できなかった。今回、溝３の北側で木棺墓を１基検出した。木棺墓は９号周溝墓の主体部であることが確認できた。９号周溝墓の主体部は南側に位置することから、追葬時のものと考えられる。３号周溝墓は溝２と第７次調査地のNo.３－ＥとNo.３－Ｎによって区画されている。３号周溝墓は８号周溝墓と溝２の周溝を共有する。３号周溝墓の東西長は13.8ｍを測る。

4．遺物

弥生時代～中世に至る遺物が出土した。弥生時代の遺物は土器、土製品、石器がある。古墳時代～中世の遺物は須恵器、土師器、瓦器、輸入磁器、陶器、土製品、銭貨がある。遺物は遺構及び包含層から出土した。以下、各遺物について説明を記す。

1)．土器

溝2(第8・9図)

溝2より第II～IV様式の弥生土器が出土した。器種は壺、高杯、蓋、鉢、甕がある。

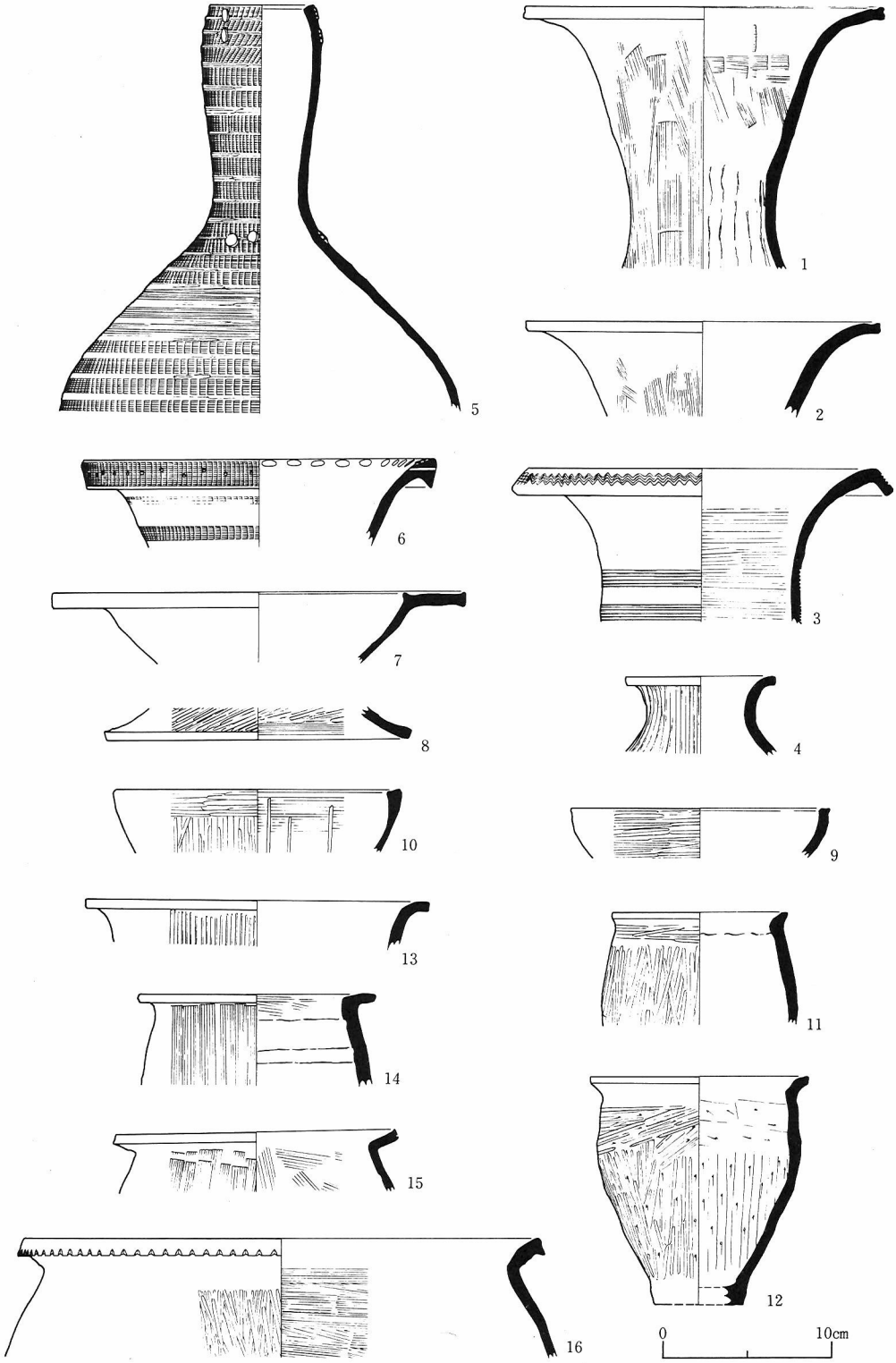
1～6は壺である。1・2は口頸部が大きく外反し、口縁端部が面をもつ。1は口縁部内外面を横ナデ調整する。頸部外面は縦方向のハケメ調整、内面は横及び斜め方向のハケメ調整を部分的に施す。内面にしぼり痕が残る。2は内面をナデ調整で終る。非河内産。第II様式。3は筒状を呈する頸部より、口縁部が大きく外反する。口縁端部は下方へ折れ曲る。口縁端部に櫛描波状文を1帯、頸部外面に櫛描直線文を2帯施す。口縁部内外面は横ナデ調整、頸部外面はナデ調整、内面は横方向のハケメ調整する。生駒西麓産⑫。第II様式。4は筒状を呈する頸部より、口縁部が短く外反する。口縁端部は面をもつ。口縁部内外面は横ナデ調整、頸部外面は縦方向のハケメ調整する。内面は風化が著しく調整法は不明。生駒西麓産。第II様式。5は細頸壺である。張りのある胴部より、頸部が長く上方へ伸びる。口縁部はゆるく内弯し、口縁端部が内傾して面をもつ。口頸部から胴部の外面に櫛描文様を施す。上部より15帯の簾状文、3帯の直線文、4帯の簾状文を施す。口縁部外面には縦方向に2個1対、頸部と胴部外面には横方向に2個1対の円形浮文を貼り付ける。口縁部から胴部の外面には縦方向に帯状を呈する赤色塗料を塗る。文様帯間は研磨する。内面はナデ調整する。生駒西麓産。第III様式。6は口頸部が漏斗状に伸び、口縁端部を下方へ拡張する。口縁端部に1帯、頸部外面に2帯の櫛描簾状文を施す。口縁端部には円形の刺突文を施す。口縁部内面には円形浮文を貼り付ける。風化が著しく調整法は不明。生駒西麓産。第II様式。

7は高杯の杯部である。杯部は大きく外上方へ伸び、口縁部が水平方向に折れ曲る。口縁端部は面をもつ。杯部と口縁部の境に断面三角形の凸帯がつく。風化が著しく調整法は不明。非河内産。第II様式。

8は甕の蓋である。ゆるく裾広がりに伸び、口縁端部が面をもつ。外面は横方向のヘラミガキ調整、内面はハケメ調整の後、横方向のヘラミガキ調整する。口縁部内面には帯状に煤が付着する。生駒西麓産。第II様式。

9・10は鉢である。体部が内弯しながら立ち上がる。口縁端部は面をもつ。9は体部外面を横方向のヘラミガキ調整、内面をナデ調整する。10は体部外面の上部を横方向、下部を縦方向のヘラミガキ調整する。体部内面は横方向のハケメ調整の後、粗い縦方向のヘラミガキ調整する。生駒西麓産。第III様式。

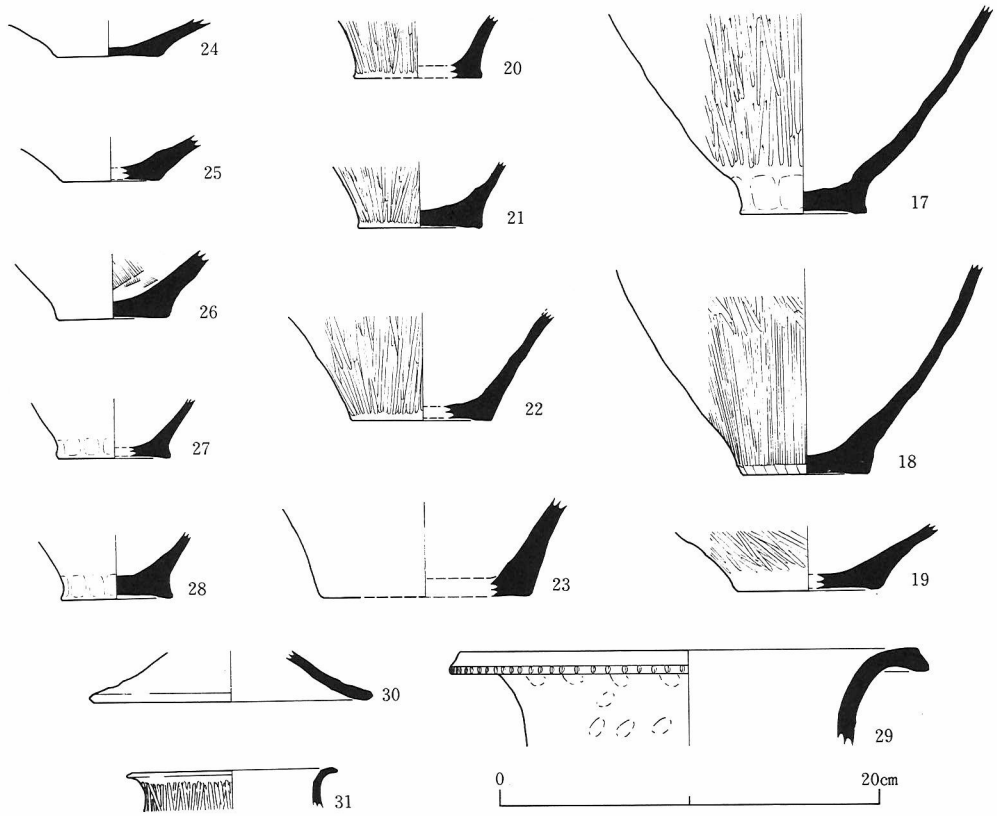
11～16は甕である。11・12は胴部の張りは少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は面



第8図　溝2出土土器実測図

をもつ。11は口縁部内外面を横ナデ調整する。体部外面は上部を横方向、下部を縦方向のヘラミガキ調整する。内面はナデ調整する。12は口縁部内外面を横ナデ調整する。体部外面はヘラケズリ調整の後、上部を横及び斜め方向、下部を縦方向のヘラミガキ調整する。内面はヘラケズリ調整するが粗雑である。13は口縁部が大きく外反し、口縁端部が面をもつ。口縁部外面は縦方向のハケメ調整、内面は横ナデ調整する。14は張りの少ない胴部より、口縁部が強く外反する。口縁端部はやや面をもつ。口縁部外面は横ナデ調整、内面は横方向のハケメ調整する。胴部外面は縦方向のハケメ調整、内面はナデ調整する。内面に接合痕が残る。15・16は張りのある体部より、口縁部がく字形に外反する。口縁端部は15が上方へ、16が下方へ拡張する。15は口縁部内外面を横ナデ調整、胴部内外面を縦及び斜め方向のハケメ調整する。16は口縁端部にキザミ目を施す。口縁部内外面は横ナデ調整する。胴部外面は縦方向のヘラミガキ調整、内面は横方向のハケメ調整する。14は非河内産。他は生駒西麓産。11～14は第Ⅱ様式。15・16は第Ⅲ様式。

17～28は底部である。底部は平底であり、胴の張りの少ない17や大きく張る19などがある。外面はヘラケズリ調整の後、縦方向のヘラミガキ調整する17、縦方向のハケメの後、縦方向のヘラミガキ調整する18、縦方向のヘラミガキ調整する19～22、ナデ調整する24～26がある。他は風化が著しく調整法は不明。内面はハケメ調整の後、ナデ調整かナデ調整だけで終る。17・



第９図　溝２・３、木棺墓出土土器実測図

21・23は非河内産。他は生駒西麓産。

溝２からは細片のため図化できなかったが凹線文を施す第Ⅳ様式の壺、鉢などが出土している。

木棺墓（第９図）

木棺墓より第Ⅱ様式の弥生土器が出土した。器種は壺である。

29は壺である。筒状を呈する頸部より、口縁部が大きく外反する。口縁端部は下方へ拡張する。口縁端部にはキザミ目を施す。口縁部内外面は横ナデ調整、胴部内外面はナデ調整する。生駒西麓産。

溝３（第９図）

溝３より第Ⅱ様式の弥生土器が出土した。器種は蓋と甕がある。

30は甕の蓋である。体部が裾広がりに伸び、口縁端部が丸く終る。口縁部内外面は横ナデ調整、体部内外面はナデ調整する。生駒西麓産。

31は甕である。張りの少ない胴部より、口縁部が大きく外反する。口縁端部は丸く終る。口縁部外面は縦方向のヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。生駒西麓産。

落ち込み１（第10図）

落ち込み１より中世の土器が出土した。土師器、陶器、瓦器、輸入磁器がある。

32は土師器の羽釜である。張りの少ない体部より、口縁部が強く外反する。口縁端部は面をもつ。口縁部内外面は横ナデ調整、体部内外面はナデ調整する。

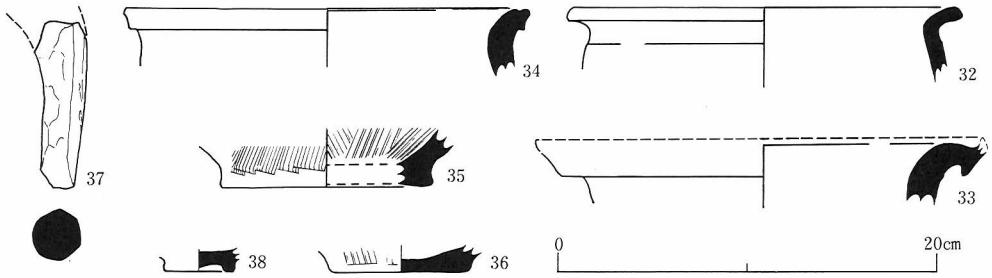
33・34は陶器の甕である。33は口縁部が外上方へ強く外反し、口縁端部は上下へ拡張する。内外面は横ナデ調整する。34は口頸部が上方へ伸び、口縁端部を上方へ拡張する。内外面は横ナデ調整する。

36は瓦器の摺鉢、37は羽釜である。36は平底の底部である。外面は縦方向のハケメ調整、内面はナデ調整する。37は羽釜の脚部である。やや弯曲し、下部に向かって細くなる。外面はナデ調整する。

38は輸入磁器である。白磁の皿である。高台は低く、断面形が逆台形を呈する。高台にアーチ状の抉りを入れる。内外面はロクロナデ調整し、全面に施釉する。

溝１（第11図）

溝１より中世の土器が出土した。瓦器がある。



第10図　落ち込み１、溝１出土土器実測図

35は瓦器の摺鉢である。平底の底部より、体部が外上方へ伸びる。体部内面には8条のおろし目を施す。体部外面は縦方向のハケメ調整、内面はナデ調整する。

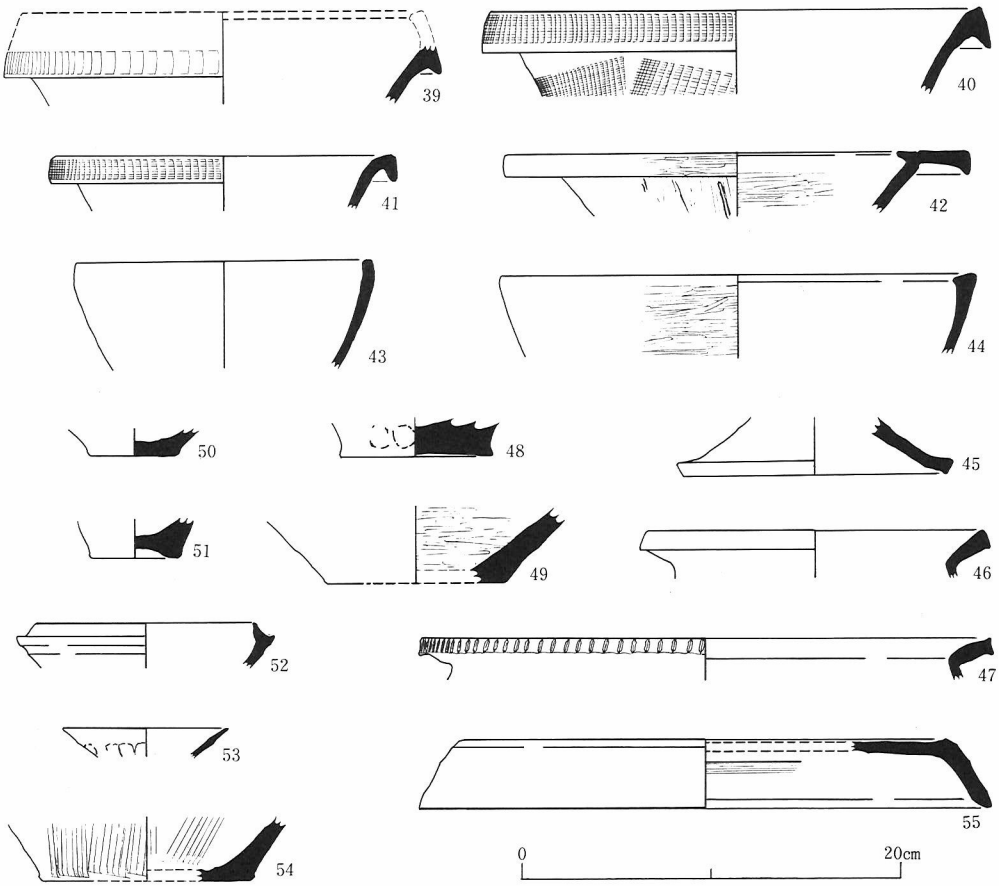
包含層出土土器(第11図)

第1～2層の遺物包含層より弥生時代～中世の土器が出土した。弥生土器、須恵器、土師器、瓦器がある。

39～51は弥生土器である。壺、高杯、鉢、甕の器種がある。

39は壺である。口頸部は漏斗状を呈し、口縁端部を上下へ幅広く拡張するが、上方は欠損する。口縁端部に櫛描簾状文を施す。風化が著しく調整法は不明。生駒西麓産。第Ⅲ様式。40・41は壺である。口頸部は漏斗状を呈し、口縁端部を下方へ拡張する。40は口縁端部と口頸部外面、41は口縁端部に櫛描簾状文を施す。生駒西麓産。第Ⅲ様式。

42は高杯である。杯部は大きく外上方へ伸び、口縁部が水平方向に折れ曲る。口縁端部はやや下方へ拡張する。杯部と口縁部の境に断面形が三角形を呈する凸帯がつく。口縁部内外面と杯部内面は横方向、杯部外面は縦方向のヘラミガキ調整する。生駒西麓産。第Ⅱ様式。45は高杯の脚部である。ゆるく裾広がりになり、端部が面をもつ。内外面は横ナデ調整する。生駒西



第11図　包含層出土土器実測図

麓産。第Ⅱ様式。

43は鉢である。体部が深い椀状を呈し、口縁部がやや内弯する。口縁端部は丸く終る。口縁部内外面は横ナデ調整、体部内外面はナデ調整する。生駒西麓産。第Ⅱ様式。44は鉢である。体部は外上方へ伸び、口縁端部が面をもつ。外面は横方向のヘラミガキ調整、内面は横ナデ調整する。生駒西麓産。第Ⅲ様式。

46・47は甕である。口縁部がく字形に外反し、口縁端部が面をもつ。47は口縁端部にキザミ目を施す。口縁部内外面は横ナデ調整する。生駒西麓産。第Ⅲ様式。

48～51は底部である。平底を呈する48～50と上げ底を呈する51がある。生駒西麓産。

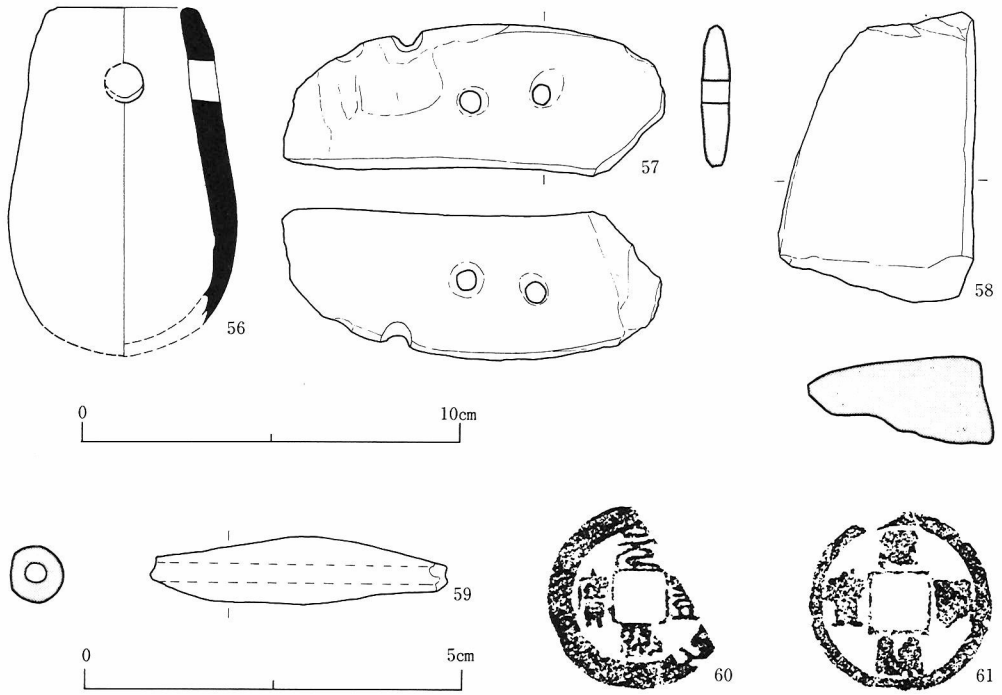
52は須恵器の杯である。浅い皿状を呈する体部より、受部が水平方向に伸びる。口縁部は短く外反し、口縁端部が丸く終る。内外面は回転ロクロナデ調整する。

53は土師器の皿である。体部が外上方へ伸び、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終る。口縁部内外面と体部内面は横ナデ調整、体部外面はナデ調整する。

54・55は瓦器である。54は摺鉢である。平底の底部より、体部が外上方へ伸びる。外面は縦方向のハケメ調整、内面はナデ調整する。体部内面に7条のおろし目を施す。55は蓋である。天井部が平担であり、口縁部がハ字形に伸びる。口縁端部はやや面をもつ。口縁部内外面は横ナデ調整、天井部内外面はナデ調整する。

2). 土製品(第12図)

土製品は蛸壺と土錘がある。56は蛸壺である。底部を欠損するが丸底と考えられる。体部が



第12図　土製品、石製品、銭貨実測図

内傾しながら口縁部に至る。口縁端部は丸く終る。口縁部に小円孔を1孔穿つ。口縁部内外面は横ナデ調整、体部内外面はナデ調整する。非河内産。溝2出土。第II～IV様式。59は土錘である。両端で径が小さく、中央部が最大径を有する。中央に孔を1孔穿つ。落ち込み1出土。14～15世紀。

3). 石器(第12図)

石器は石庖丁と用途不明の磨製石器がある。57は半月形を呈する石庖丁である。刃部は直刃であり、一面のみを斜めに磨く。背は丸く終る。身の中央に2孔1対の紐穴を穿つ。背部の1ケ所に孔を穿った痕跡が残る。溝2出土。第II～IV様式。58は用途不明の磨製石器である。1面に磨いた痕跡が残る。他は割れており不明。溝2出土。第II～IV様式。

4). 銭貨(第12図)

60・61は銭貨である。60は元豊通宝、61は元祐通宝であり、共に北宋銭である。第2層出土。

IV. まとめ

西ノ辻遺跡は昭和16年より調査が実施され、今回で第26次調査になる。第26次調査では弥生時代～中世の遺構、遺物を検出した。今回の調査は67m²と狭い範囲ではあったが、得られた知見を列記してまとめとしたい。

1. 遺構は弥生時代と中世の2時期がある。第7層の同一面で2時期のものが検出された。弥生時代の遺構は中世の時期に大規模な削平を受けていると考えられる。今回の調査地西側に位置する第8次調査地では、ほとんど弥生時代の遺構は認められず、深い溝などが残るのみである。
2. 西ノ辻遺跡の第7次調査では7基の方形周溝墓が確認されているが、今回、新たに2基を検出した。第7次調査ではマウンドが中世の削平を受けており、主体部は4号周溝墓で小児用の甕棺を検出したのみであった。そのため、厳密には墓と決定していないが、溝で区画されていることなどから方形周溝墓として取り扱っている。今回、9号周溝墓の主体部と考えられる木棺墓を1基検出したことから、第7次調査地のものも方形周溝墓として決定してよいと考えられる。
3. 方形周溝墓の溝2は陸橋をつくっている。また、溝3も3段で掘っており、南側に陸橋をつくっていると考えられる。第7次調査で検出された方形周溝墓にも陸橋をつくっている。また、大部分の方形周溝墓は周溝を共有している特徴があげられる。今回の調査でも8号周溝墓が3号周溝墓、9号周溝墓が8号周溝墓と周溝を共有していることが確認された。このことから、西ノ辻遺跡の方形周溝墓は計画的に築造していったと考えられる。
4. 方形周溝墓の周溝内より第II～IV様式の土器が出土した。第7次調査で検出されたものと同時期である。また、周溝内の上層から中層に多く遺物が認められた。穿孔を有する土器が第7次調査で多く認められている。周溝の上・中層に多く認められることから、築造時の供献土器とは考えがたい。また、今回の調査では石庖丁や蛸壺なども出土しており、今後の検

討が必要である。

5．弥生時代中期の蛸壺が出土した。蛸壺は弥生時代の海岸線に近い集落では多量に出土するが内陸部では数少ない。東大阪市では瓜生堂、鬼虎川遺跡などがある。当遺跡出土のものは胎土中に生駒西麓産にみられるような鉱物を含んでおらず、搬入品と考えられる。弥生時代の流通を考える上では貴重な資料である。

注

① 東大阪市教育委員会・(財)東大阪市文化財協会 「発掘20年のあゆみ」 1987年

② 東大阪市教育委員会・(財)東大阪市文化財協会 「神並遺跡II」 1987年

③ 東大阪市教育委員会 「日下遺跡第11次調査」『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要26』 1983年
東大阪市教育委員会 「日下遺跡第13次発掘調査」『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要27』 1986年

④ 東大阪市遺跡保護調査会 「縄手遺跡２」 1976年

⑤ 東大阪市教育委員会 「縄手遺跡第10次調査」『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要28』 1987年

⑥ 東大阪市教育委員会・(財)東大阪市文化財協会 「西ノ辻遺跡・鬼虎川遺跡」 1988年

⑦ (財)東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会 「鬼虎川遺跡第12次発掘調査報告」 1987年

⑧ (財)東大阪市文化財協会 「甦る河内の歴史」 1984年

⑨ 東大阪市教育委員会・(財)東大阪市文化財協会 「神並遺跡III」 1988年

⑩ (財)東大阪市文化財協会 「法通寺」 1985年

⑪ 注⑥と同様

⑫ 生駒西麓産としてあつかった土器は、胎土中に石英、長石、角閃石、雲母、クサリ礫を含むものであるが、特に角閃石の有無を基準にした。

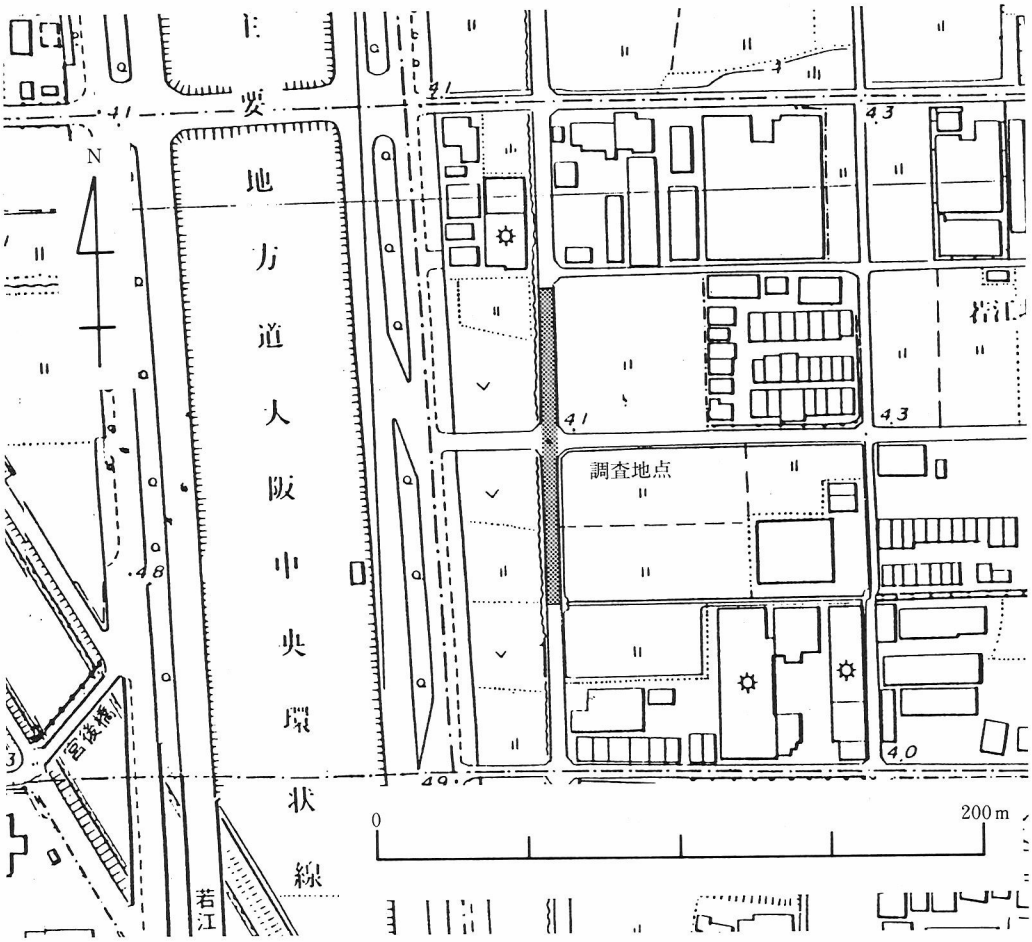
発掘調査にあたっては多くの人達のご協力をいただいている。記して感謝の意を表します。
島村和宏　別所秀高　本田けい子　三浦一己　高橋祐子

瓜生堂遺跡第37次，巨摩廃寺遺跡第５次調査概報

Ⅰ．調査に至る経過

瓜生堂遺跡・巨摩廃寺遺跡は、東大阪市若江北町を中心にひろがる弥生時代から中世にまたがる複合遺跡である。

昭和63年度、東大阪市下水道部は両遺跡の推定範囲内に管渠埋設に伴う土木工事を計画した。工事に先立って東大阪市教育委員会が予定地内の２か所で試掘調査を実施したところ地表下約0.5ｍに遺物包含層の存在することが確認された。試掘調査結果を受け両者で協議を重ねた結果、工事によって破壊される部分（104.5m²）を対象として発掘調査を実施することになった。調査は、東大阪市文化財協会が昭和63年８月18日より10月８日まで現場作業を行ない、以後平成２年３月31日まで整理作業を実施した。



第13図　調査地点位置図

II. 位置と環境

瓜生堂遺跡・巨摩廃寺遺跡は、東の生駒山地、西の上町台地、南の羽曳野丘陵に囲まれた河内平野の中央に位置する。河内平野は、旧大和川の分流である平野川・長瀬川・玉串川などが貫流し、これらの諸河川の形成した三角州性低地・自然堤防・潟湖性低地や扇状地から成り立っている。

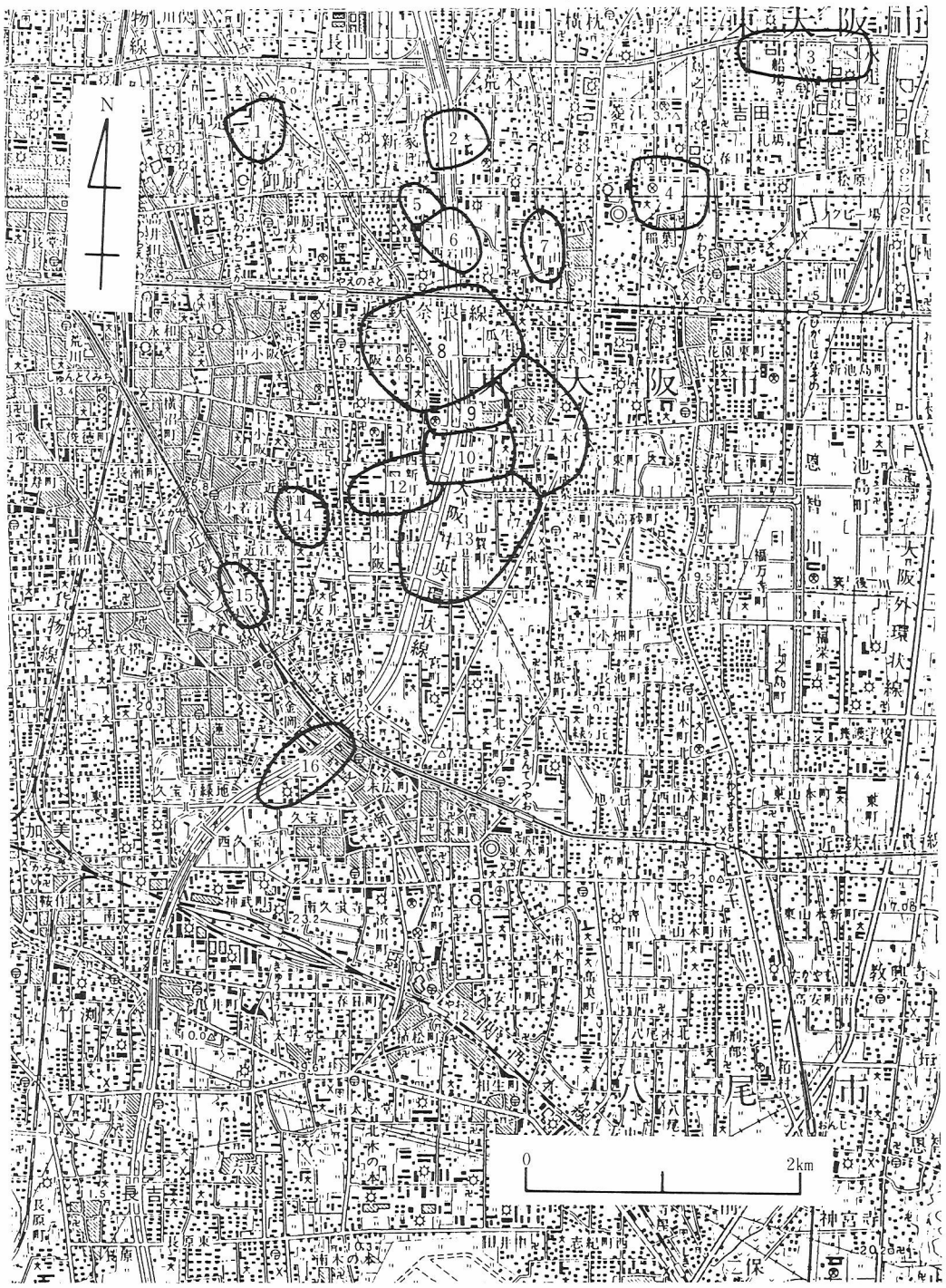
本遺跡は、長瀬川と平野川の形成した自然堤防に挟まれた三角州性低地上の標高6m前後に立地し、東大阪市若江北町を中心に南北約800m・東西約500mの範囲に拡がる弥生時代から中世におよぶ複合遺跡である。両遺跡周辺に所在する諸遺跡は、各時代の河内平野の地理的な環境変化とともに様々な変遷をたどる。以下、時代ごとに河内平野とその周辺に立地する遺跡の変遷を中心に記述する。

旧石器時代の遺物は、平野部の若江北遺跡や生駒西麓部の草香山遺跡・千手寺山遺跡・正興寺山遺跡などで出土しているのみである。近年、羽曳野丘陵から北に延びる低位段丘面上に立地するはさみ山遺跡で、竪穴住居と考えられる遺構が検出されている。

縄文時代早期から中期頃には、河内平野全域は海進現象に伴って海水が侵入し河内湾を形成する。早期では、生駒西麓に位置する柏原市大県遺跡・東大阪阪市神並遺跡から多量の土器をはじめ、土偶・有舌尖頭器・石鏃などが出土している。前・中期の遺跡としては、東大阪市縄手遺跡・八尾市恩智遺跡などがある。また、鬼虎川遺跡では、近年の調査で当時の海岸線の一部を確認している。

縄文時代後晩期には、海退現象や淀川の堆積作用によって上町台地の北側先端部が狭くなったため海水の侵入が妨げられ、河内湾は淡水の潟に変化する。後期の遺跡は、生駒山西麓部に四条畷市岡山遺跡・東大阪市日下遺跡・芝ケ丘遺跡・縄手遺跡・馬場川遺跡、八尾市恩智遺跡などが点在する。このうち、縄手遺跡では、11軒の竪穴住居や石組遺構などが検出されている。また、上町台地上では貝塚を伴う大阪市森の宮遺跡があげられる。晩期の遺跡は、平野部の新家遺跡・山賀遺跡・美園遺跡・長原遺跡などでも遺物を多量に含む良好な状態の包含層を検出している。生駒山西麓部には、山麓に発達した扇状地上に東大阪市日下遺跡・芝ケ丘遺跡・鬼塚遺跡・馬場川遺跡、柏原市大県遺跡などが存在する。これらの遺跡のなかには、晩期末頃の長原式土器と弥生時代前期の土器とを伴出し、河内における縄文時代から弥生時代への移行過程を考えるうえで重要な資料を提供しているものもある。

弥生時代前期には、縄文時代後晩期以来の海退現象や河川からの堆積作用がすすむ。このため河内潟は湖になる。河内湖周辺には、初期水稲耕作に適した低湿地がひろがり、多くの集落が営まれる。河内湖周辺では、掘立柱建物跡・井戸などを検出した山賀遺跡、14棟の竪穴住居址および掘立柱建物4棟を確認した美園遺跡、水田址を検出している若江北遺跡・友井東遺跡などがある。また、生駒山西麓部の中垣内遺跡・鬼虎川遺跡・鬼塚遺跡などでも新たな生活を開始したようである。



1．西提遺跡　2．新家遺跡　3．水走遺跡　4．稲葉遺跡
5．意岐部遺跡　6．西岩田遺跡　7．岩田遺跡　8．瓜生堂遺跡
9．巨摩廃寺遺跡　10．若江北遺跡　11．若江遺跡　12．上小阪遺跡
13．山賀遺跡　14．小若江遺跡　15．弥刀遺跡　16．佐堂遺跡

第14図　遺跡分布図

弥生時代中期になると諸河川の堆積作用がさらに進行するため、肥沃な土壌が形成される。このような条件を背景に中期には、前期の集落を基盤として大集落に発展する。両遺跡や山賀遺跡などでは、複数の組み合せ式木棺や土器棺を埋葬主体部とする方形周溝墓群・竪穴住居址・掘立柱建物跡・井戸・水田址などの遺構とともに、多量の土器・石器・木製品をはじめ、大阪湾型銅戈・石製鋳型などを出土している。また、両遺跡の南に立地する亀井遺跡・加美遺跡・久宝寺遺跡でも方形周溝墓などが検出されている。このうち、加美遺跡の方形周溝墓は、南北22m・東西11mの大規模なマウンドに13基以上の埋葬主体部をもつもので、瓜生堂遺跡の2号方形周溝墓の規模をはるかに上回るものである。一方、生駒山西麓部の東大阪市鬼虎川遺跡・西ノ辻遺跡・八尾市恩智遺跡などでは、方形周溝墓・掘立柱建物跡・大溝に平行する柵列が近年の調査で確認されており、前述した河内平野部の諸遺跡と同様に進展する。

弥生時代中期末から後期には、平野部の諸遺跡で幾度もの河川の氾濫を確認しており、不安定な自然環境となる。現在までのところ巨摩廃寺遺跡・若江北遺跡で方形周溝墓や水田址が認められる程度で、弥生時代中期に発達した諸遺跡は、小規模化したり他所に移動したものと考えられる。

古墳時代になると自然環境が安定化したため、再び多くの集落や古墳などが検出されている。前期には、加美遺跡・美園遺跡などで竪穴住居址や掘立柱建物が検出されている。水田址は巨摩廃寺遺跡・若江北遺跡・美園遺跡などで確認されている。墓址としては、加美遺跡で小型仿製鏡や舶載鏡片を伴う方形周溝墓を46基以上検出している。また、八尾南遺跡・美園遺跡では、従来河内平野部ではまったく確認されていなかった古墳も認められる。中期後半頃には、さらに遺跡数が増える。八尾南遺跡・長原遺跡・久宝寺遺跡などでは、掘立柱建物・井戸・土坑などの遺構群とともに韓式系土器などの新たな遺物も出土している。これらの集落の多くは、古墳時代後期以降に連続せず、一時断絶する。このようななかで、巨摩廃寺遺跡では、後期の埴輪を伴う一辺15mの方墳なども検出されており、今後古墳時代後期の集落の居住地の発見がまたれる。

律令制下の奈良時代には、河内国若江郡に所属し、郡衙や寺院の推定地が多数ある。また、中世には若江城が存在することも知られている。

Ⅲ．調査の概要

瓜生堂遺跡は、これまでの調査によって東西約１㎞・南北約800ｍにおよぶ弥生時代から中世の遺跡であることが明らかになっている。遺跡内では、地表下約５ｍで弥生時代中期の方形周溝墓や土坑墓・土器棺・竪穴住居などの遺構や弥生土器をはじめ各種の石器類、木器類、骨角器、青銅器などを検出している。さらに上層では、古墳時代の水田址や奈良～平安時代の掘立柱建物群なども確認されている。

瓜生堂遺跡に南接する巨摩廃寺遺跡は、既往の発掘調査で東西500ｍ・南北400ｍにおよぶ弥生時代から中世にいたる複合遺跡であることが判明している。当遺跡内では、地表下約５ｍで瓜生堂遺跡と同様に弥生時代中期の方形周溝墓が確認されている。また、弥生時代後期の方形周溝墓や水田址も検出されている。出土遺物には、同時期の多量の弥生土器のほか、木製品・貨泉・銅釧などがある。このほかに、上層で古墳時代の水田址・古墳なども確認されている。

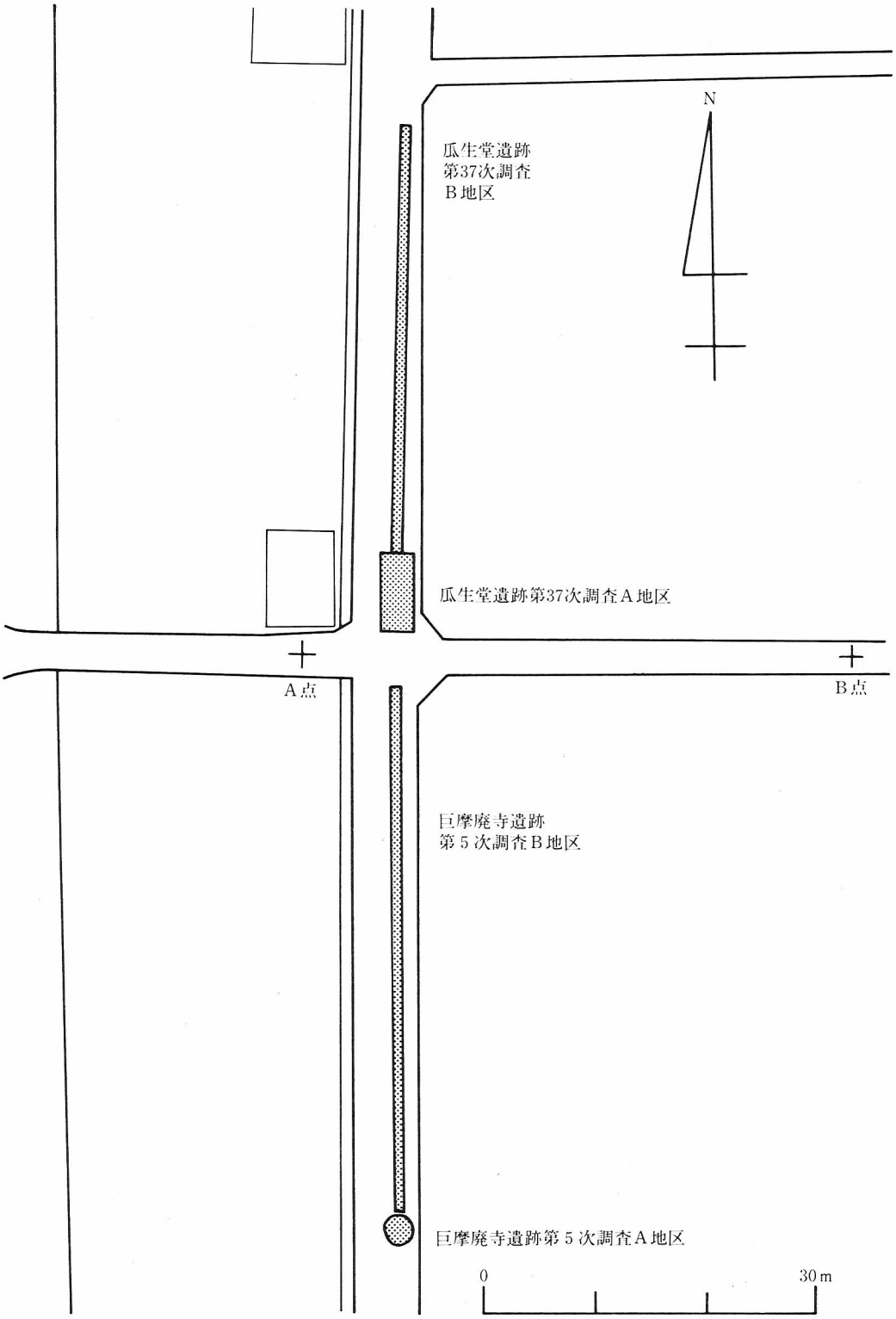
今回の発掘調査地区は、南北方向にほぼ100ｍあり、北半分が瓜生堂遺跡の東南端部分に、南半部分が巨摩廃寺遺跡の北東端部分にあたる。したがって、発掘調査次数は、北側を瓜生堂遺跡第37次調査、南側を巨摩廃寺遺跡第５次調査とした。瓜生堂遺跡第37次発掘調査区には、南端に5.8ｍ×2.5ｍの小判形を呈する下水管押し込み部分（Ａ地区）とＡ地区から北へ向かって延びる幅90㎝・全長42.1ｍの下水管埋設部分（Ｂ地区）がある。巨摩廃寺遺跡第５次発掘調査区には、南端に直径2.8ｍの下水管到達口部分（Ａ地区）とＡ地区から北へ向かって延び、瓜生堂遺跡のＡ地区までの全長53ｍ・幅90㎝の下水管埋設部分（Ｂ地区）がある。

発掘調査は、築造工事の関係から瓜生堂遺跡Ａ地区→巨摩廃寺遺跡Ａ地区→同Ｂ地区→瓜生堂遺跡Ｂ地区の順に実施した。調査前には、薬剤を多量に注入して出水の防止を図った。両遺跡のＡ地区は、深さ約５ｍまで築造工事がおよぶため、ライナープレートを順次設置することによって調査を進行してゆく計画であった。しかし、著しい出水のため、ライナープレートを６段分設置した時点でさらに軽量鋼矢板を打設し、十分な安全を確保して調査をおこなった。両遺跡のＢ地区については、深さ約２ｍまで築造工事が及ぶため軽量鋼矢板を90㎝間隔に打設して調査を実施した。

工事予定地は、前述したように南北約100ｍにおよぶため、調査地区のほぼ中央部分を東西方向に横断する道路面上に国家座標杭を２点設置し測量の基準点とした。西側の基準点（Ａ点）の座標値は、Ｘ＝－149.08000・Ｙ＝36.450000である。東側の基準点（Ｂ点）の座標値は、Ｘ－149.08000・Ｙ＝－36.400000である。現場での測量は、Ａ点を基準としている。

調査地は、現道部分にあたるため、アスファルトや盛土の攪乱層の除去には、機械を使用した。また、無遺物層の掘削にも一部機械を使用した。遺物包含層については、人力掘削で調査を実施した。

調査地は、既述したように瓜生堂遺跡と巨摩廃寺遺跡の２遺跡にまたがるため、以下では遺跡ごとに分けて記述をすすめる。



第15図　調査地点平板実測図

瓜生堂遺跡第37次発掘調査

前述したように調査区中央の下水管押し込み部分をＡ地区、その北側の下水管埋設部分をＢ地区とした。

１．Ａ地区

Ａ地区は、東西2.8ｍ・南北5.8ｍ・深さ5.1ｍを調査対象とした。面積では、約16㎡ある。

１）基本層序

第１層　攪乱層。現道路のアスファルトおよび盛土層。約40cmを測る。

第２層　暗緑灰色（7.5GY4/1）土。耕土。層厚約20cmを測る。

第３層　緑灰色（10G5/1）シルト。耕土直下の整地層。層厚約20cm。

第４層　暗灰色（10G3/1）粘土。炭を微量に含む。層厚約15cm。

第５層　暗緑灰色（10G3/1）シルト。層厚約15cm。

第６層　緑灰色（10GY5/1）細砂。層厚約32cm。

第７層　暗オリーブ灰色（5GY 3/1）粘土。層厚約20cm。炭・植物遺体を多量に含む。

第８層　暗オリーブ灰色(2.5GY 4/1)粗砂。層厚約20cm。

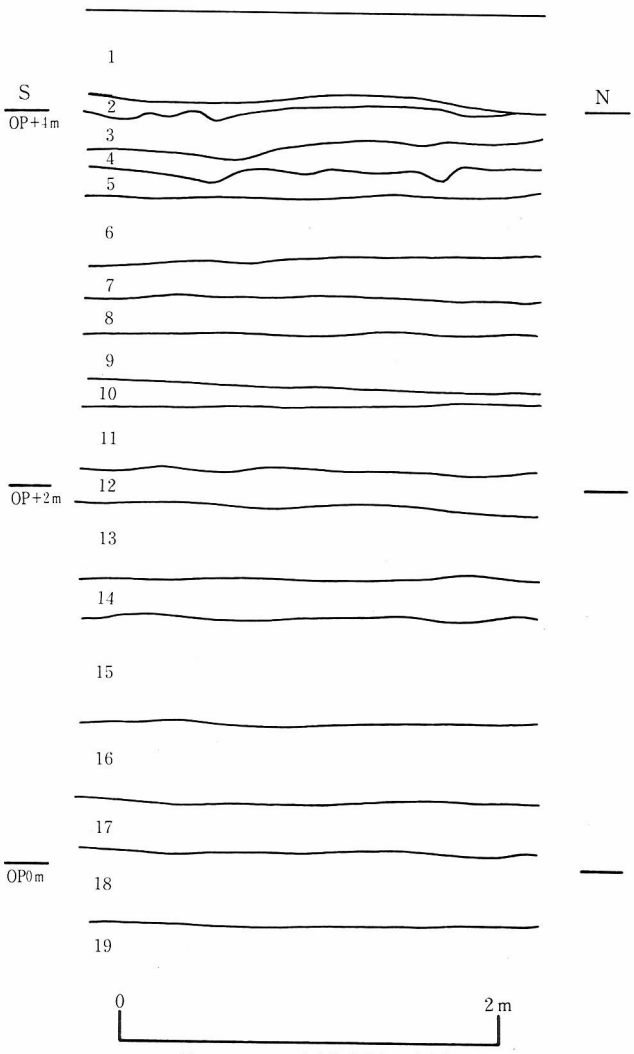
第９層　暗オリーブ灰色(2.5GY 4.5/1)シルト。層厚約28cm。

第10層　暗オリーブ灰色（5GY 3.5/1)粘土。層厚約19cm。植物遺体を多量に含む。

第11層　青灰色(5BG6/1)粗砂。植物遺体を微量に含む。層厚約32cm。

第12層　暗オリーブ灰色(2.5GY 3/1)粘土。層厚約20cm。炭・植物遺体を少量に含む。

第13層　緑灰色（10G6/1）砂質



第16図　Ａ地区南北断面実測図

シルト。層厚約36cm。植物遺体を微量含む。

第14層　緑灰色（10G6/1）極細砂。層厚約20cm。

第15層　暗緑灰色（10G4/1）粗砂。層厚約55cm。

第16層　オリーブ黒色（7.5Y3/2）シルト。層厚約40cm。植物遺体を多量に含む。

第17層　暗オリーブ灰色（2.5GY3.5/1）粘土。植物遺体を少量含む。

第18層　黒色（7.5Y3/1.5）粘土。層厚約40cm。植物遺体を多量に含む。

第19層　灰色（5Y4/1）粘土。植物遺体を多量に含む。

2）遺構

A地区では、遺構をまったく検出できなかった。

3）遺物

A地区では、2～5層でコンテナ1箱程度の近世から古墳時代の土師器・須恵器・瓦器などの土器類をはじめ陶磁器類・瓦などが出土している。以下の層位では、植物遺体や自然木などの自然遺物を微量検出できたものの、人工遺物はまったく確認できなかった。

出土遺物は、いずれも細片で図化できるものは第3層出土の（17）1点にすぎない。17は、陶器の擂り鉢である。外上方にひらく体部にほぼ直立する口縁部がつく。口縁部外面には、2帯の凹線を巡らす。口縁端部内面は、段をなす。体部内面には、10条1単位のスリ目がある。このほかに第1層から土師器皿（30）、第4層から黒色土器A椀（34）などが出土している。

2．B地区

B地区は、A地区の北側の下水管埋設部分で東西幅0.9m・南北長43.9m・深さ1.8mを調査対象とした。面積では、約39.5m²である。

1）基本層序

第1層　攪乱層。現道路のアスファルトおよび盛土層。約40cm。

第2層　暗緑灰色（7.5GY4/1）土。耕土。層厚約10cm。

第3層　緑灰色（10G5/1）シルト。耕土直下の整地層。層厚約20cm。

第4層　暗灰色(10G3/1)粘土。炭を微量に含む。層厚約15cm。調査区全域に水平堆積する。

第5層　暗緑灰色（10G3/1）シルト。層厚約15cm。調査区全域に分布する。

第6層　緑灰色（10GY5/1）細砂。調査区全体にほぼ水平に堆積する。

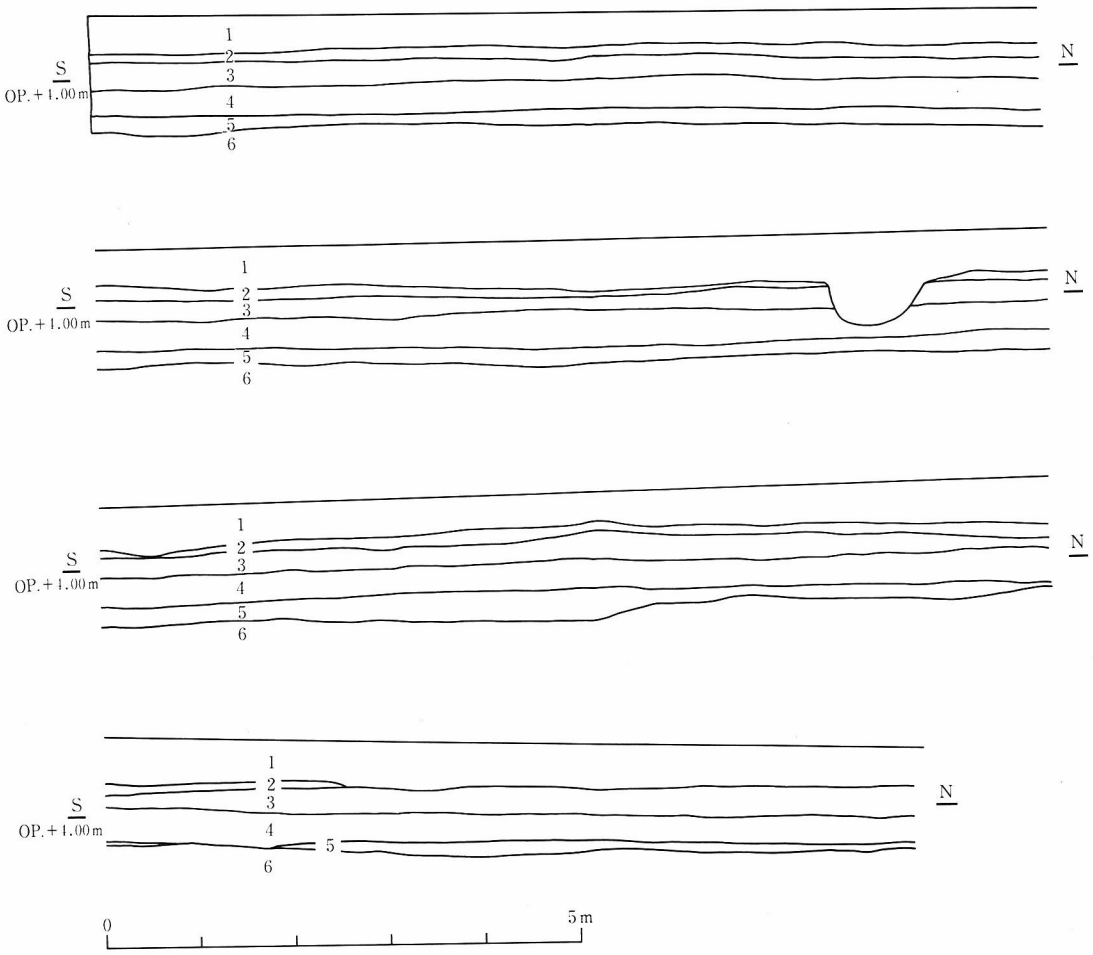
第6層以下の土層については、A地区で遺構・遺物をまったく含まなかったため機械で深さ1.8mまで掘削した。層序は、A地区とほぼ同様である。

2）遺構

遺構は、A地区と同様にB地区においてもまったく確認することができなかった。

3）遺物

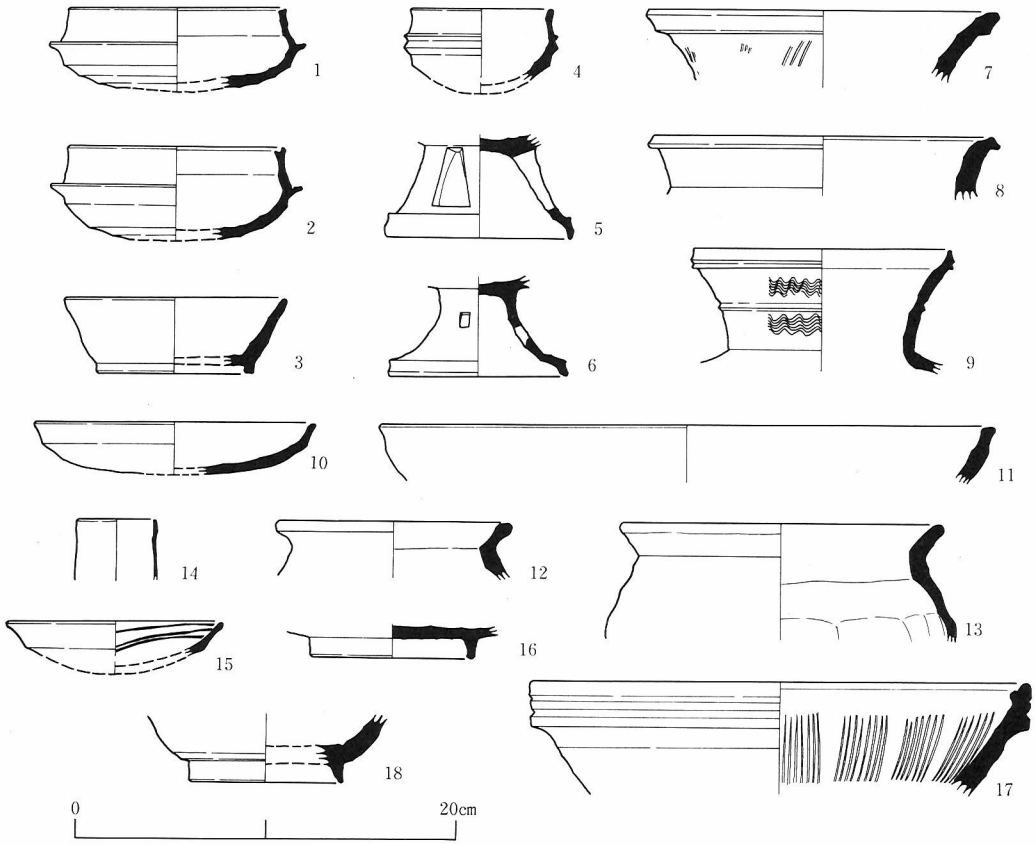
B地区では、1～5層でコンテナ3箱程度の近世から古墳時代の土師器・須恵器・黒色土器・瓦器などの土器類をはじめ陶磁器類・製塩土器・瓦・埴輪・鉄滓・鉄製品・石製品などが出土している。これらの出土遺物は、ほとんど小破片化しており図化できるものは少ない。



第17図　B地区南北断面実測図

土器類

須恵器には、坏・蓋・高坏・甕・横瓶・カップ形土器などがある。坏（1～3）には、やや丸みをもつ体部に内傾気味に高くのびるたちあがりのつくもの(1・2)と外上方へ直線的にのびる体部に断面方形を呈する高台を貼り付けるもの(3)がある。(1・2)の底部外面は、回転ヘラケズリによって調整する。(1・2)は第5層出土。(3)は第4層出土。カップ形土器(4)の口縁部は、直立し端部を丸くおさめる。口縁部と体部は、二帯の断面三角形を呈する凸帯によって区面する。体部は、手持ちヘラケズリ調整で仕上げる。第1層出土。(5・6)は、高坏脚部である。脚は、ハ字形にひらき、端部で面をなす。焼成前に3方向から三角形(5)・長方形(6)の透かしを穿つ。第5層出土。(7・9・26)は、甕の口縁部である。口縁部は外反し、端部をつまみあげておさめるもの(9)・外傾する面をなすもの(7)・内傾する面を構成するもの(26)がある。(9)は、口縁部を断面三角形の凸帯によって区分し、その上下に櫛描き波状文を巡らす。(7)は第4層、(9・26)は第5層出土。(8)は、横瓶の口縁部である。口縁部は、短く外反し



第18図　A・B地区出土遺物実測図

端部を四角くおさめる。(25)は蓋で、天井部中央に宝珠形のつまみを貼り付ける。

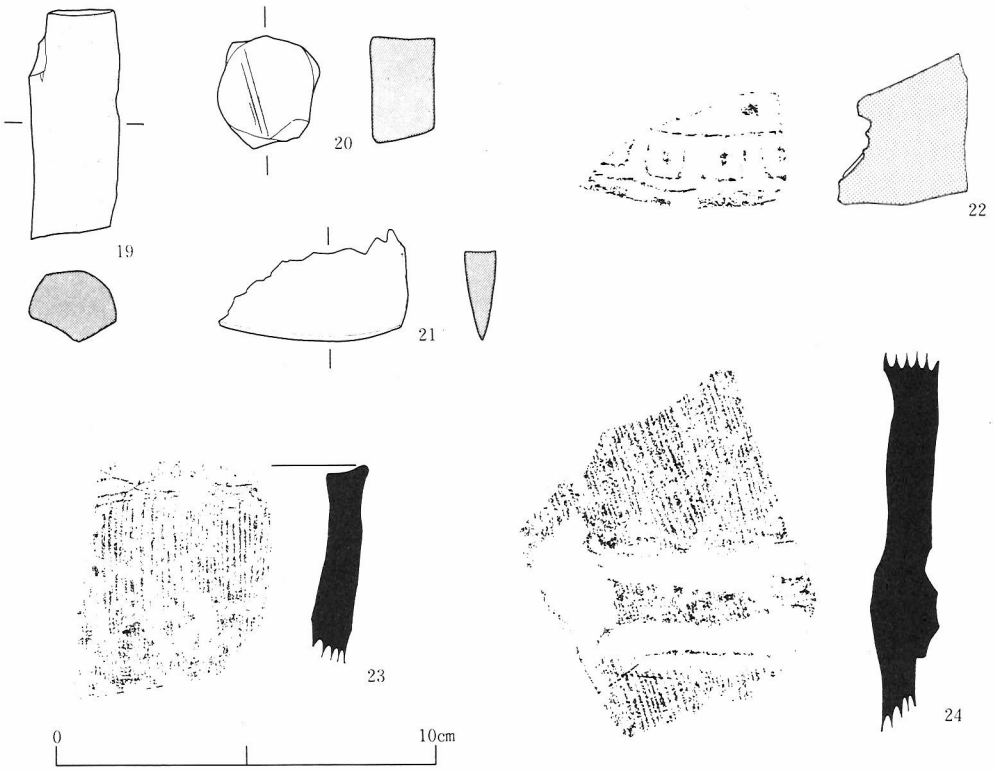
土師器（10～13・29～33）には、皿・鉢・甕・鍋がある。皿（10・29）は、丸みをもつ底部からやや外反する口縁部につづく。外面は、口縁部のみをヨコナデ調整する。色調は（10）が浅黄橙色(7.5YR8/4)、(29)が明赤褐色(7.5YR5/6)。第3層出土。鉢(11)は、大型のもので口縁端部を平坦な面で仕上げる。色調は、橙色（5YR7/6)。第3層出土。甕（12・13・31・32）には、口縁端部を丸くおさめるもの（13)・内傾する面をなすもの（12)・段をもつもの（31・32）がある。色調は、(12)が明赤褐色(2.5YR5/6)、(13)が橙色(5YR6/6)、(31)が橙色(7.5YR6/6)、(32)が橙色(7.5YR6/6)。(12・13)は第5層出土。(31・32)は、第4層出土。

黒色土器B（35）の底部には、断面三角形のやや高い高台を貼り付ける。第4層出土。

瓦器椀（15）は、口縁端部を丸く仕上げる。内面には、渦状のヘラミガキが認められる。

製塩土器（14）の体部は直立し、口縁端部を尖り気味におさめる。器壁は、約2㎜で薄いつくりである。体部内外面ともナデ調整。色調は、灰白色（10GY8/2)。第5層出土。

灰釉陶器（16・28）の底部には、断面台形ないし長方形を呈する低い高台を貼り付ける。第5層出土。



第19図　B地区出土遺物実測図

緑釉陶器（27）は、須恵質の生地に釉をかけたものである。釉は、内外面全体におよぶ。底部には、やや外方へ張り出す高台を付ける。第4層出土。

磁器椀（18）は底部に断面三角形のやや高い高台を削り出す。体部外面下半は、回転ヘラケズリ調整する。第4層出土。

埴輪

出土した埴輪は、すべて円筒埴輪である。(23)の口縁端部は、内傾する面をなす。内外面は、縦方向のハケメ調整を施す。色調は、橙色（5YR7/6）で黒斑はない。第1層出土。(24)は外面を縦方向のハケメ調整後、断面台形を呈する低いタガを巡らす。色調は青灰色（5PB5/1）で黒斑はない。第4層出土。

土製品

（20）は、平瓦の周囲を打欠いて円形に仕上げる。直径約2.6cm・厚さ1.7cm。第5層出土。

石製品

（19）は、残存長8cm・直径2.3cmを測り、円柱状を呈する。安山岩製。第4層出土。

鉄製品

（21）は、鉄斧の刃部片である。断面V字形を呈する。第4層出土。

瓦

（22）は、複弁蓮華文軒丸瓦の外区部分の小破片である。第5層出土。

巨摩廃寺遺跡第５次発掘調査

既述したように調査地区南端の下水管到達口部分をＡ地区、その北側で瓜生堂遺跡第37次調査地区（Ａ地区）までの下水管埋設部分をＢ地区とした。以下、地区別に記述をすすめてゆく。

１．Ａ地区

Ａ地区は、直径2.8ｍの約24.5㎡、深さ約５ｍを調査対象範囲とした。

１）基本層序

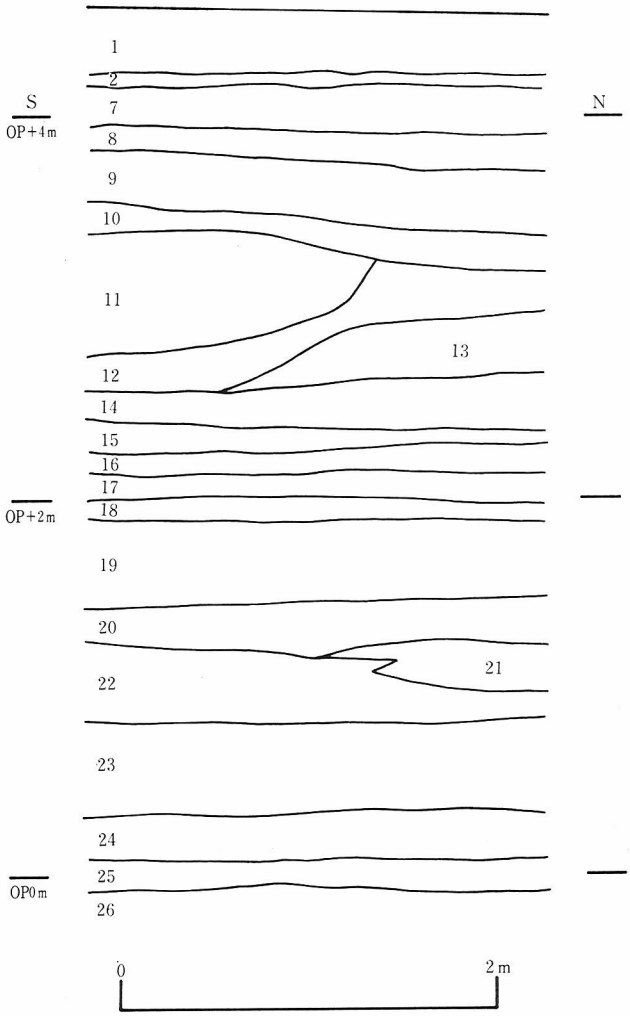
第１層　撹乱層。現道路のアスファルトおよび盛土層。約40cmを測る。

第２層　暗緑灰色（7.5GY4/1）土。耕土。層厚約10cm。

第７層　オリーブ黒色（5Y3.5/2）砂質シルト。層厚約25cm。

第８層　褐灰色（10YR6/1）砂質シルト。南側から北側に向かって層厚を増す。

第９層　浅黄色（5Y7/3）シルト。層厚約30cm。



第20図　Ａ地区南北断面実測図

第10層　暗緑灰色（7.5GY3.5/1）シルト。層厚約20cm。

第11層　明黄褐色（2.5Y6/6）粗砂。北側から南側に向かって層厚を増す。層厚約20cm。

第12層　暗オリーブ灰色（5GY4.5/1）シルト質粘土。植物遺体を少量含む。層厚20～25cm。

第13層　オリーブ灰色（5GY5/1）粘土。植物遺体・炭を少量含むほか、古墳時代初頭の庄内式甕が出土。北側から南側に向かって薄くなる。層厚約30cm。

第14層　暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）粘土。南側がやや厚く堆積する。層厚15～30cm。

第15層　緑灰色（7.5GY5.5/1）粗砂。層厚約10cm。

第16層　緑灰色（7.5GY5/1）極細砂。層厚約10cm。

第17層　緑灰色（7.5GY5/1）シルト。層厚約10cm。植物遺体を多量に含む。

第18層　暗オリーブ灰色（5GY4/1）粘土。植物遺体を多量含む。層厚約15cm。

第19層　緑灰色（10G5/1）シルト。層厚約45cm。

第20層　緑灰色（10GY6/1）細砂～極細砂。層厚約20cm。

第21層　暗緑灰色（7.5GY3.5/1）粗砂。層厚30cm。中央から北寄りに分布する。

第22層　暗オリーブ灰色（2.5GY3.5/1）粘土。層厚15～40cm。南側で層厚を増す。

第23層　オリーブ灰色（5GY5.5/1）細砂～極細砂。層厚約45cm。

第24層　緑灰色（10G6/1）極細砂～シルト。植物遺体を少量含む。層厚約25cm。

第25層　灰色（7.5G5/1）粘土。層厚15～20cm。

第26層　オリーブ黒色（7.5Y3/1）粘土。

2）遺構

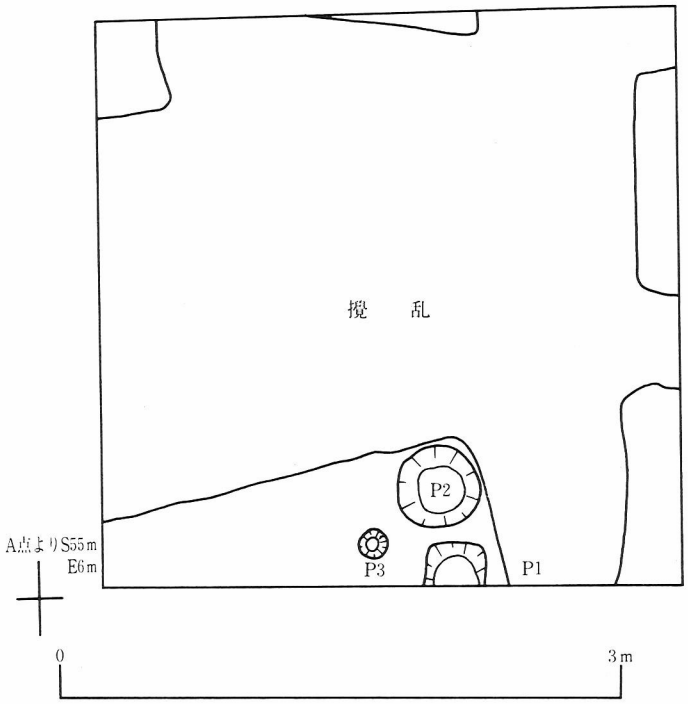
A地区では、8層上面においてpit 3基を検出している。3基のpitは、A地区の南端部分に位置し、直径30cm前後の小規模な円から楕円形を呈する。pit内の埋土は、いずれもオリーブ黒色(5Y3/2) 砂質シルトである。pit内からは、土師器の細片が微量出土している。

3）遺物

A地区では、1・2・7・8層から近世～古墳時代の土師器・須恵器・瓦器などの土器類や陶磁器類が出土している。また、13層からは、古墳時代初頭の庄内式甕を1点検出している。以下の層位からは、植物遺体を検出したものの、人工遺物はまったく確認できなかった。

土器類

（1～5）は土師器の皿である。口縁端部は、丸くおさめるもの(1・3～5)と尖り気味に仕上げるもの(2)がある。口縁部内外面は、すべてヨコナデによって調整する。色調は、(1～3・5)がにぶい橙色(5YR 6/4)、4が浅黄橙色(7.5YR 8/4) を呈する。(1) は、第1層出土。(2～5) は、第7層出土。(10・54) は、土師器釜である。口縁部は短く外反し、端部を丸くおさめる。口縁部と体部の境界は、鋭い稜をなす。(54)



第21図　A地区遺構検出状況実測図

の鍔は、やや下向きにのび端部を丸くおさめる。体部内外面は、ナデ調整する。色調は、(10)が橙色（5YR7/6)、(54)が浅黄橙色（7.5YR8/4）を呈する。(10)は第１層、(54)は第７層から出土。(52)は、鍋の把手部分である。把手は三角形を呈し、上方に大きく屈曲する。体部外面は縦方向のハケメ調整、内面はヘラケズリ調整で仕上げる。色調はにぶい橙色（7.5YR7/4）である。第８層出土。(53)は、甕口縁部片である。口縁部は外反し、端部で上方につまみ上がる。体部外面には、右上がりの細いタタキメがあり、さらに左上りのハケメ調整を施す。体部内面は、横方向のヘラケズリ調整を加えて仕上げる。外面には、全体に煤の付着が認められる。色調は灰褐色（5YR4/2）である。胎土内に多量の角閃石を含む。第13層出土。

（６～９・51）は瓦器である。（６)は、皿で平底の底部から外上方にひらく。口縁端部は丸くおさめる。見込み部分には、ジグザグ状の暗文を加えて仕上げる。（７～９・51)は、椀である。底部には、断面台形を呈する低い高台を貼り付ける。体部は、大きく斜め上方へひらき口縁端部を丸くおさめる。体部内面には、粗雑なヘラミガキを施す。また、見込み部分には、平行線状の暗文を加えるもの（７・９・51）もある。すべて第７層出土。

２．Ｂ地区

Ｂ地区は、Ａ地区の北側で、南北長45.9ｍ・東西幅0.9ｍ・深さ1.8ｍを調査対象とした。面積では、約41.3㎡ある。

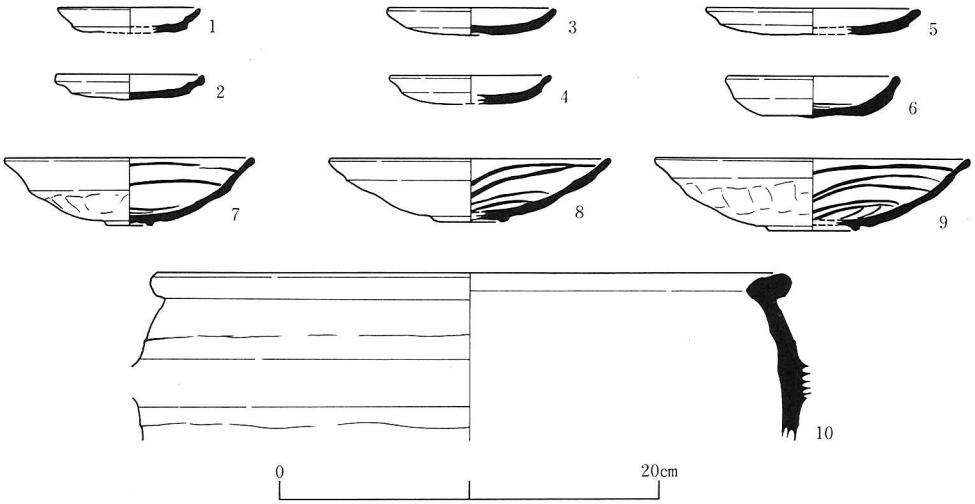
１）基本層序

第１層　攪乱層。現道路のアスファルトおよび盛土層。層厚約40cmを測る。

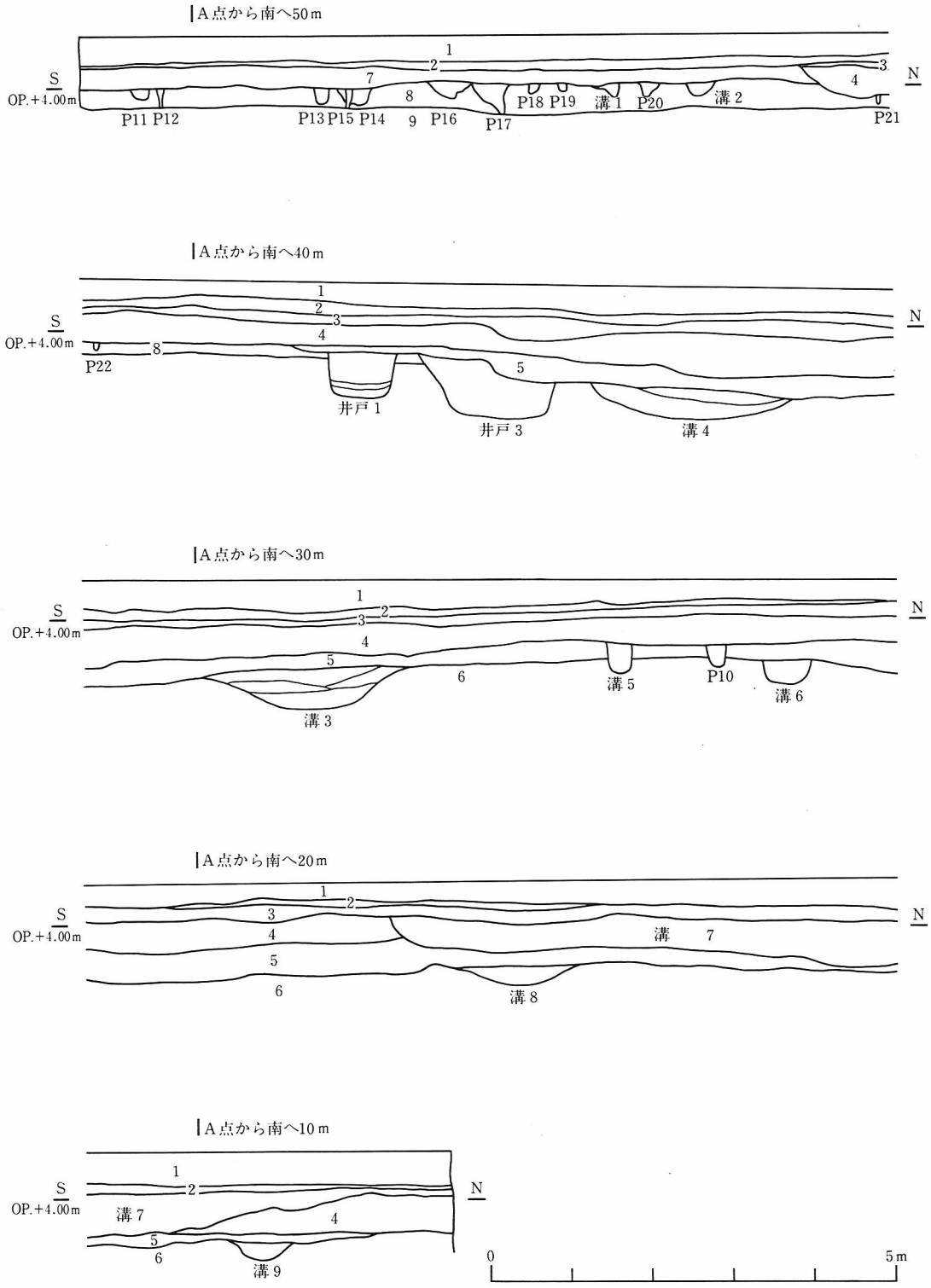
第２層　暗緑灰色（7.5GY4/1）土。耕土。層厚約５cm。

第３層　緑灰色（10G5/1）シルト。耕土直下の整地層。層厚約10cm。調査区中央から北側に分布する。

第４層　暗灰色（10G3/1）粘土。炭を微量に含む。調査区中央から北側に分布する。層厚約25cm。溝７が上面から切り込む。



第22図　Ａ地区出土遺物実測図



第23図　B地区南北断面実測図

第５層　暗緑灰色（10G3/1）シルト。３・４層と同様調査区中央から北寄りに分布する。３～５層は、調査区中央やや南寄りで後述する第７層から切り込んだ凹地に堆積したものである。層厚25～30cm。pit10・溝５が上面から切り込む。

第６層　緑灰色（10GY5/1）細砂。上面から溝３・４・８・９、井戸２を検出。

第７層　オリーブ黒色(5Y3.5/2)砂質シルト。層厚約25cm。調査地区中央から南寄りに分布する。

第８層　褐灰色（10YR6/1）砂質シルト。層厚約15cm。pit４～９・pit12～22、溝１・２、井戸１・３を検出。

第９層　浅黄色（5Y7/3）シルト。層厚約30cm。

２）遺構

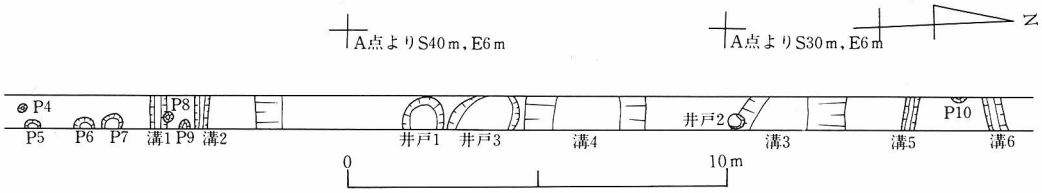
Ｂ地区では、pit19基・溝９条・井戸３基の遺構を確認している。検出できた遺構は、調査区の幅が狭いため、平面的に確認したものはごくわずかで、断面で確認している。

確認できた遺構の平面分布は、調査地区中央から南寄りの部分に多数存在し、中央から北寄りでは少数を検出したのみである。以下では、検出面ごとにわけて記述をすすめてゆく。

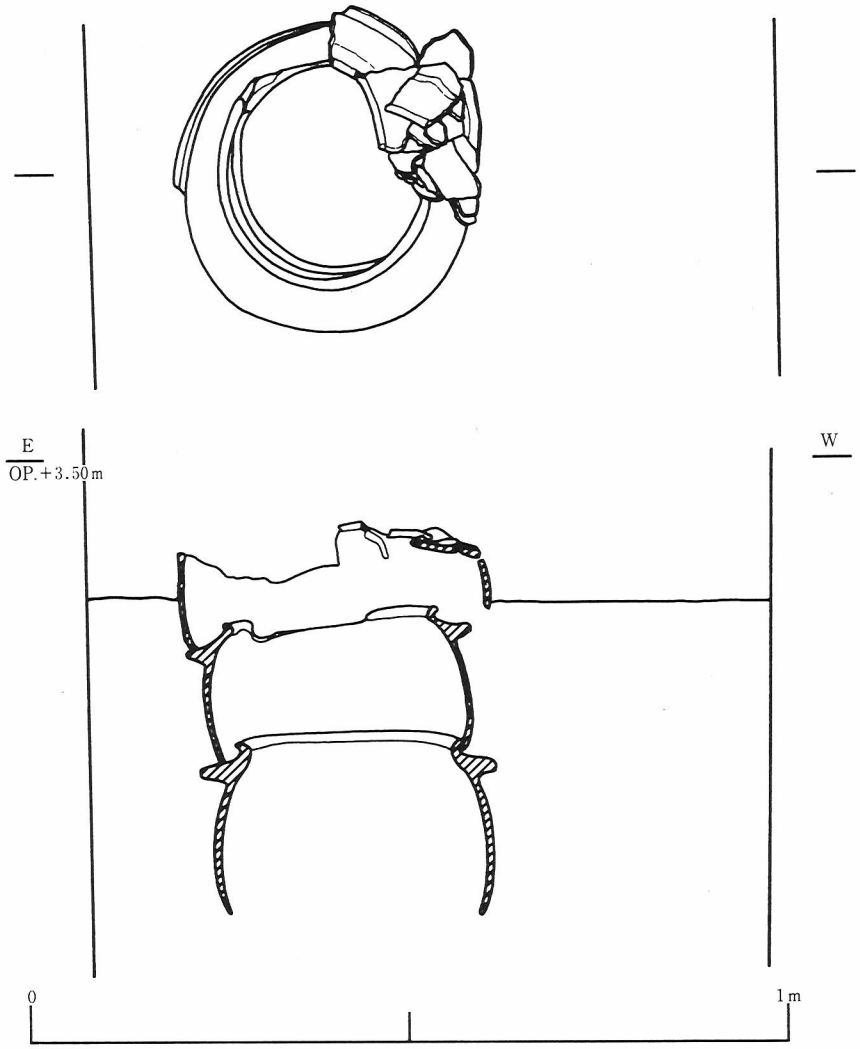
４層上面で検出した遺構には、溝７がある。溝７は、調査区北寄り部分に位置する。南北断面では、幅約10.8ｍ・深さ約56cmある。溝の方向については、調査区の東西幅が狭いため不明。埋土は、暗緑灰色（7.5GY4/1）砂質シルト層の単一層である。溝７は、層位関係からみて、室町時代以降のものである。

５層上面で検出した遺構には、pit10・溝５がある。いずれも調査地区のほぼ中央にある。pit10は、直径約40cm・深さ28cm、溝５は、南北幅約32cm・深さ36cmを測る小規模なものである。出土遺物や層位からみて、室町時代以降のものである。

６層上面で検出した遺構には、溝３・４・６・８・９、井戸２などがある。これらの遺構は、調査区中央から北寄りの位置で検出している。溝３は、南北幅約2.7ｍ・深さ約50cmを測る。埋土は、４層に分層できる。溝４は、溝３の南約2.5ｍに位置する。溝の規模は、南北幅約2.5ｍ・深さ36cmを測る。埋土は、上下２層に細分できる。溝６は、溝３の北約3.7ｍに位置する。南北幅は約90cm・深さ約30cmを測る。埋土は、暗オリーブ灰色（7.5GY4/1）粘土の単一層である。溝８は、溝６の北約5.5ｍに位置する。溝の規模は、南北幅約1.5ｍ・深さ約25cmを測る。埋土は、緑灰色（7.5GY4/1）粘土の単一層である。溝９は、溝８の北側約5.8ｍにある。南北幅は約80cm・深さ約20cmの規模である。埋土は溝６と同様に暗オリーブ灰色（7.5GY4/1）粘土の単一層である。井戸２は、土師器羽釜の底部を打ち欠いて井戸枠としたものである。羽釜は正立



第24図　Ｂ地区遺構検出状況実測図



第25図　井戸２実測図

状態で３段分残存しているが、上段のものは既に削平されている。井戸底面は、O.P.＋2.85ｍを測る。羽釜は、口径約32cmを測る大型のものである。外面には、煤が著しく付着し、煮沸用として使用後に転用したものである。調査範囲が狭いため、掘り方を確認できなかった。羽釜の形態や製作手法からみて、14世紀頃のものである。

これらの第６層上面で検出した遺構は、出土遺物や層位からみて、13～14世紀のものと考えることができる。

第８層上面で検出した遺構は、pit４～９・pit11～22・溝１・２、井戸１・３がある。これらの遺構は、調査地区の中央から南寄り部分に位置している。pitは、すべて直径30cm前後・深さ約15cmの小規模なものである。pit内の埋土は７種類ある。調査範囲が限定されているため、建物を復元することはできない。溝１は、南北幅約35cm・深さ約20cmを測る。埋土は、オリーブ

黒色（5Y3.5/1）砂質シルト層である。溝２は、溝１の北約0.7ｍに位置する。溝の規模は、南北幅40cm・深さ約14cmを測る。埋土は、溝１と同一である。井戸１は、直径約1.1ｍ・深さ約56cmを測り、平面円形を呈する。断面形は、U字形をなす。井戸底面は、O.P.3.1ｍである。井戸内の堆積層は３層に細分できる。井戸３は、井戸１の北約0.2ｍに位置する。井戸の規模は、直径約1.8ｍ・深さ約70cmを測る。平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈する。底面はO.P.2.8ｍである。埋土は、黒褐色（2.5Y3/1.5）シルトである。

これらの８層上面で検出した遺構は、出土遺物や層位からみて、第６層上面で検出した遺構と同様に13～14世紀頃のものと考えることができる。

遺構名	規模（東西×南北×深）	形態	検出面	埋土	出土遺物		備考
					種類	器種	
井戸１	110×90以上×56	楕円形	８層上面	①2.5Y3/5黒褐色シルト ②7.5Y4/1灰色シルト ③7.5Y5/1灰色シルト	土師器 瓦器 黒色土器	皿・釜・托 椀	
井戸２	40×40×42以上	円形	６層上面		須恵器 瓦器 磁器 瓦	鉢 椀 椀 平瓦・丸瓦	井戸枠に土師器の羽釜
井戸３	180×90以上×72	楕円形	８層上面	2.5Y3/1.5黒褐色シルト	土師器 須恵器 埴輪	皿	
溝１	90以上×40×20		８層上面	5Y3.5/1オリーブ黒色砂質シルト	土師器	皿・釜	
溝２	90以上×40×20		８層上面	5Y3.5/1オリーブ黒色砂質シルト	土師器	皿・甕	
溝３	40×110以上×48		６層上面	①2.5GY6/1オリーブ灰色細砂 ②2.5GY6/1オリーブ灰色シルト ③7.5Y5/1灰色シルト ④2.5GY5/オリーブ灰色粘土	土師器 須恵器 瓦器 瓦	皿・釜 甕・鉢 椀・三足釜 平瓦	
溝４	320×90以上×36		６層上面	①2.5GY6.5/1オリーブ灰色粘土 ②2.5Y4/1暗オリーブ灰色粘土			
溝５	30×90以上×36		５層上面	7.5Y6/2灰オリーブ色粘土	土師器 須恵器 瓦器	皿 椀・皿	
溝６	50×90以上×32		６層上面	2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土	土師器 須恵器	皿・釜 甕	

第１表　巨摩廃寺遺跡検出遺構一覧表

遺構名	規模 (東西×南北×深)	形態	検出面	埋土	出土遺物		備考
					種類	器種	
溝6					瓦器 瓦	椀・甕・三足釜 軒瓦・平瓦	
溝7	?×1084以上×56		4層上面	7.5GY4/1暗緑灰色砂質シルト			
溝8	?×148×28		6層上面	7.5GY4/1緑灰色粘土			
溝9	?×80×20		6層上面	2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土			
pit 1	32×24以上×4	楕円形	8層上面	5Y3/2オリーブ黒色砂質土	土師器 黒色土器	坏 杯・甕	
pit 2	44×44×17	円形	8層上面	5Y3/2オリーブ黒色砂質土	土師器 瓦器	皿・釜	
pit 3	16×16×15	円形	8層上面	5Y3/2オリーブ黒色砂質土	土師器		
pit 4	8×8×11	円形	8層上面	7.5Y5/1灰色砂質土	土師器	皿	
pit 5	20×12以上×11	楕円形	8層上面	7.5Y5/1灰色砂質土	土師器 黒色土器	椀	
pit 6	24×12以上×12	楕円形	8層上面	5Y6/4オリーブ黄色砂質土			
pit 7	24×16以上×9	楕円形	8層上面	7.5Y5/1灰色砂質土	土師器 須恵器	皿 壺	
pit8	18×16×29	円形	8層上面	7.5Y5/1灰色砂質土	土師器 須恵器 瓦	皿・甕 平瓦	
pit 9	12×12以上×4	楕円形	8層上面	5Y6/4オリーブ黄色砂質土	土師器	釜	
pit10	16×8以上×28	楕円形	5層上面	7.5Y6/2灰オリーブ色粘土	土師器 瓦器	釜 椀	
pit11	?×24×12		8層上面	5Y3.5/2オリーブ黒色砂質シルト	土師器 須恵器		
pit12	?×24×24		8層上面	5Y3.5/2オリーブ黒色砂質シルト	土師器		
pit13	?×20×20		8層上面	5Y4/1灰色砂質シルト	土師器 黒色土器 須恵器	釜 椀 甕	
pit14	?×24×24		8層上面	5Y4/1灰色砂質シルト	土師器		
pit15	?×12×24		8層上面	2.5Y3.5/1黒灰色砂質シルト			
pit16	?×53×20		8層上面	5Y4/1灰色砂質シルト	土師器		
pit17	?×40×44		8層上面	5Y4/1灰色砂質シルト	土師器 須恵器	 蓋	
pit18	?×12×12		8層上面	5Y3.5/1オリーブ黒色砂質シルト	土師器	皿	
pit19	?×12×8		8層上面	5Y3.5/1オリーブ黒色砂質シルト			
pit20	?×28×20		8層上面	5Y3.5/1オリーブ黒色砂質シルト	土師器		
pit21	?×6×12		8層上面	5Y3.5/1オリーブ黒色砂質シルト			
pit22	?×8×12		8層上面	5Y3.5/1オリーブ黒色砂質シルト			

第1表　巨摩廃寺遺跡検出遺構一覧表

3）遺物

B地区の包含層からは、土師器・須恵器・黒色土器・瓦器などの土器類をはじめ陶磁器類・瓦・埴輪などが出土している。また、検出した遺構内からも土師器・須恵器・瓦器・瓦が出土している。包含層および遺構内からの出土遺物は、いずれも小破片化しており図化できるものは少ない。ここでは、先ず各包含層出土の遺物について記述し、その後遺構内出土の遺物について記述する。

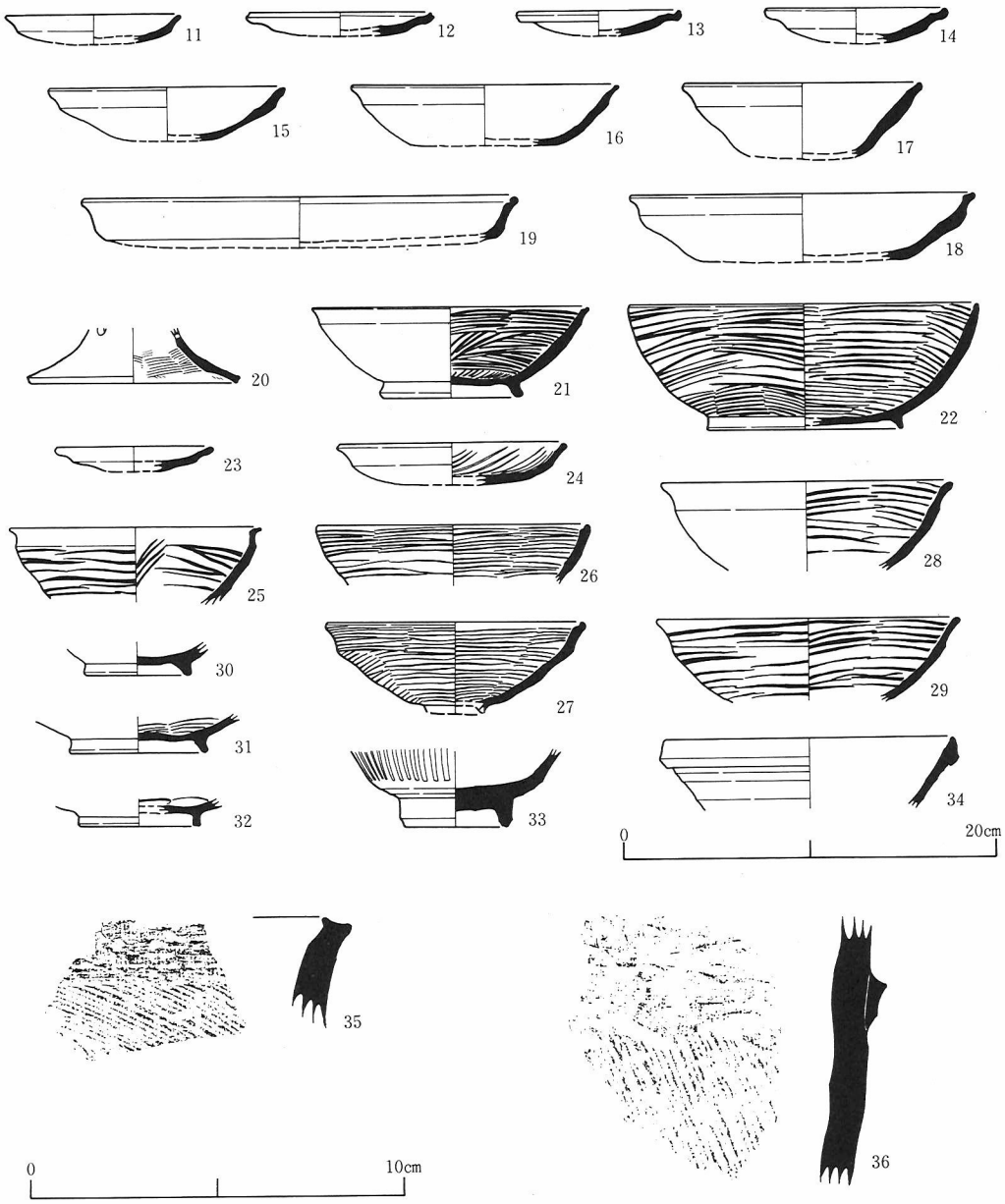
各包含層出土の土師器(11～20)の器種には、皿・坏・高坏がある。皿には、口径4.5cm前後・器高1.5cm前後のもの（11～14）と口径23cm・器高2.7cmを測る大型のもの（19）がある。前者には、口縁端部を丸くおさめるもの（11）や上方にややつまみ上がるもの（12～14）がある。口縁部内外面はすべてヨコナデ調整を施す。(19)の口縁端部は、内側に巻き込む。広い平坦な面をなす底部は、ヘラケズリ調整によって仕上げる。色調は(11・13)が浅黄橙色(7.5YR8/4)（12・14）が灰白色（7.5YR8/2)、(19)が橙色（2.5YR7/6）を呈する。(11・12）は第3層出土。(13・14）は第4層出土。(19）は第8層出土。坏（15～18）の口縁部は短く外反し端部を尖り気味におさめるもの（15)や丸くおさめるもの（16・17)、内傾する面をなすもの（18）がある。調整手法は、口縁部のみをヨコナデ調整している。色調は（15・17）が橙色(5YR7/6)、（16）が赤褐色（2.5YR4/6)、(18）が灰白色(10YR8/2)である。(15・16・18)は第4層出土。（17）は第7層出土。(20）は、高坏の脚部片である。脚部はハの字形にひらき、端部で面を構成する。脚部には円孔透かしを穿つ。内面は、横方向のハケメ調整によって仕上げる。色調は、橙色（2.5YR6/8）を呈する。第8層から出土。

(21・22）は黒色土器の椀である。(21）は、内面から口縁部外面が黒色化している。(22)の黒色化の範囲は、全面におよぶ。平底気味の底部には、断面三角形の低い高台を貼り付ける。口縁端部内面は、段をなす。(21）は、口縁部内面を横方向のヘラミガキ調整、見込み部分を一定方向にヘラミガキ調整して仕上げる。(22）の口縁部外面は、横方向のヘラミガキ調整、底部外面は、一定方向のヘラミガキ調整後高台との接合部分をさらに高台にそってヘラミガキ調整を加える。(21）の色調は、明赤褐色（5YR5/6）である。第4層出土。

(57）は、須恵器鉢である。口縁部は斜め上方に直線的にひらき、端部で下方にやや拡張する。内外画ともヨコナデによって調整する。第4層出土。

瓦器には、小皿（23・24）と椀（25～32・55）がある。小皿は、平底の底部に外反気味にのびる口縁部がつく。口縁端部は丸くおさめる。24の内面は、ヘラミガキ調整で仕上げる。椀には口縁端部内面に段を構成するもの（25～27）と丸くおさめるもの（28・29・55）がある。高台は、断面三角形を呈するもの（30・31）と長方形状のものがある。(23・25・26・30・31）は第3層出土。(24・28・32）は第4層出土。(27・29・32）は第5層出土。

(33・34）は、白磁椀である。(34）の体部は直線的に外上方へのび、口縁部につづく。口縁端部は、玉ぶち状を呈する。釉の範囲は、内面全体から口縁部外面におよぶ。(33）はほぼ直立する高い高台をもつ。高台はヘラケズリ調整によって削り出す。見込み部分には刻印がある。



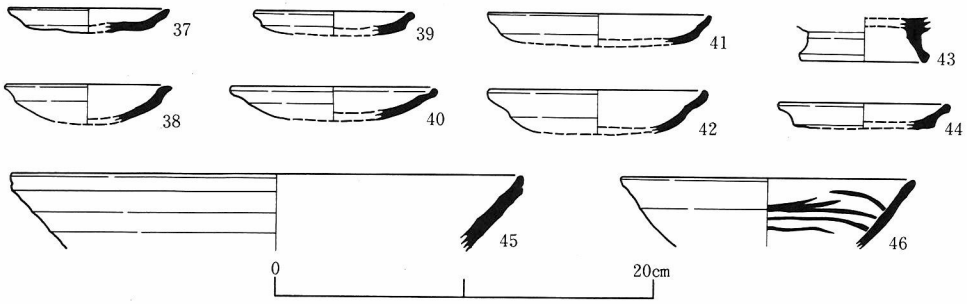
第26図　B地区出土遺物実測図

(33) は第2層出土。(34) は第3層出土。

(56) は、陶器擂り鉢である。口縁部は短く外反し、端部で平坦な面をなす。内面に細かいなすり目を施す。第5層出土。

(58) は軒丸瓦である。瓦当面には、巴文がある。比較的厚手のつくりである。第2層出土。

(35・36・59～61) は円筒埴輪である。体部外面は、左上りの斜方向のハケメ調整後断面台形を呈する低いタガを貼り付ける。体部内面には、横方向のハケメ調整を施すもの (36) もある。いずれも黒斑は認められず、須恵質である。色調は、橙色(5YR6/6)から明赤褐色(5YR5/6)



第27図　B地区遺構内出土遺物実測図

を呈する。(59・61)は第2層、(35・36)は第5層から出土している。(60)は出土層位不明である。

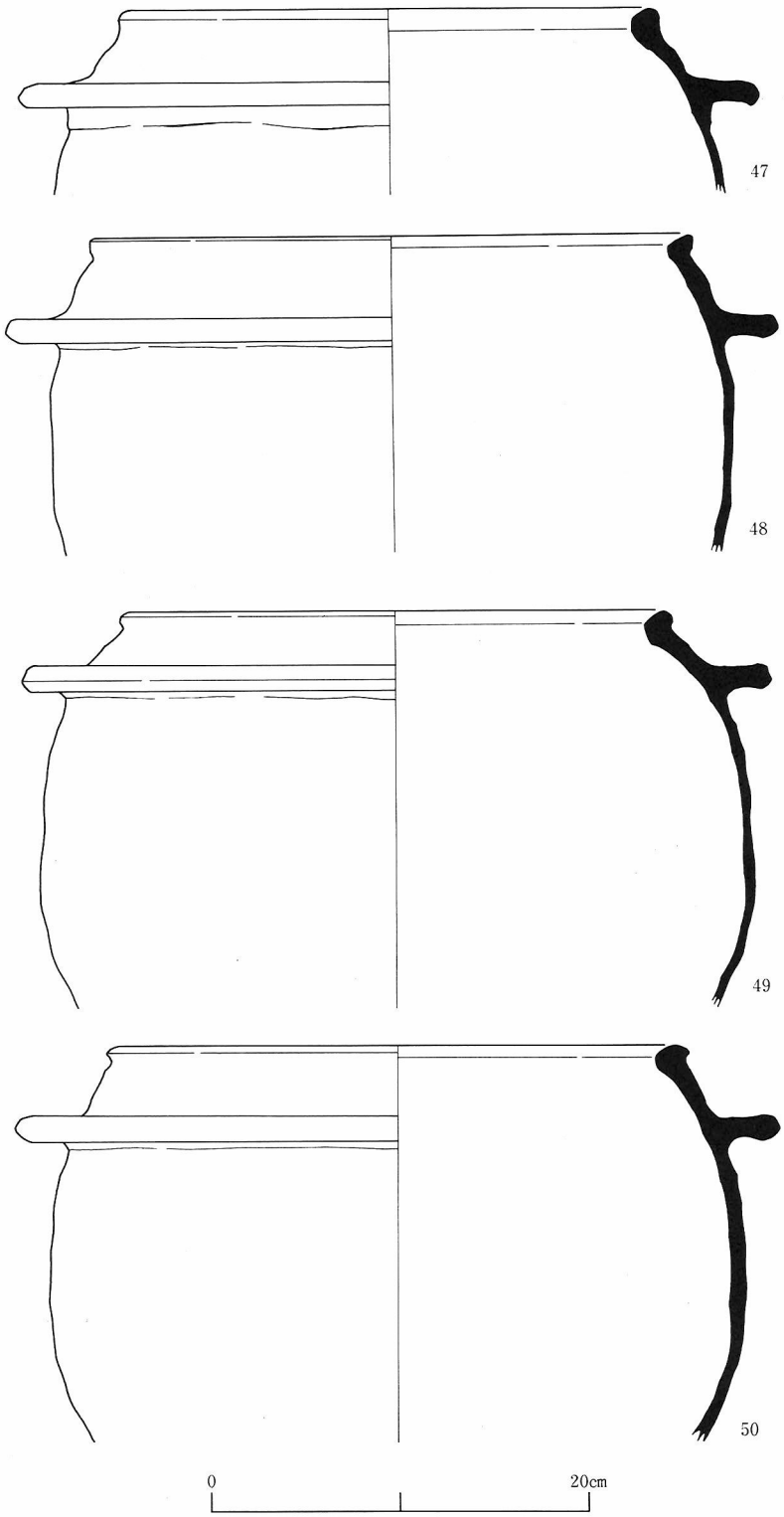
B地区で検出した各遺構からは、土師器・須恵器・瓦器などが出土している。各遺構ごとの出土遺物の内容については、第1表を参照して頂きたい。ここでは、図化できたものについてのみ記述する。

井戸1出土遺物のうち図化できたものには、土師器皿(39)・托(43)、瓦器椀（46）がある。(39)は平底気味の底部にやや外反する口縁部がつく。口縁端部は尖り気味におさめる。口縁部内外面はヨコナデ調整する。色調は、浅黄橙色（7.5YR8/6)。(43）の高台は強く外方へ張り出す。端部は尖り気味に仕上げる。色調は、浅黄橙色（7.5YR8/4)。（46)は口縁部がわずかに外反し、端部を丸くおさめる。内面には、粗雑なヘラミガキ調整を加える。

井戸2出土遺物のうち図化できたものには、土師器皿(42)・釜(47～50)がある。(42)は平底気味の底部から外反する口縁部につづく。口縁端部は上方につまみ上がる。口縁部内外面はヨコナデ調整で仕上げる。色調は浅黄橙色（7.5YR8/3）を呈する。(47～50)は内彎気味の体部から短く立ち上がる口縁部につづく。口縁端部は丸く肥厚する。鍔はやや下向きにのび、端部を丸くおさめる。器体内外面はナデて調整する。鍔下面以下の部位には、煤が付着する。色調は橙色（5YR6/6）である。

井戸3出土遺物のうち図化または写真撮影したものには、土師器皿(40)がある。(40)は丸底気味の底部からやや外反する口縁部へいたる。口縁端部は上方につまみ上がる。口縁部内外面ともヨコナデで仕上げる。色調は、灰白色（10YR8/2）である。

溝3出土遺物のうち図化または写真撮影したものには、土師器釜（64)・甕（63)、須恵器鉢(45・67)、甕(68)、円筒埴輪(70)がある。(64)は内彎する体部に短く外反する口縁部がつき、端部を尖り気味におさめる。鍔は欠損する。口縁部内外面は、ナデて仕上げる。色調は橙色(2.5YR6/6)。(63)の口縁部は鋭く外反し、端部を丸く仕上げる。口縁部内外面は、ナデ調整する。色調は橙色（5YR7/8）である。(45）の体部は直線的に上方にのび、口縁端部をやや上方へ拡張する。内外面ともヨコナデ調整する。(67)は底部片である。底面には糸切り痕が残る。内面は極めて平滑である。(68)の口縁部は、ゆるく外反し、端部に面を構成する。体部外面には、左上りの平行タタキ後横方向の平行タタキメがある。(70)の円筒埴輪の外面には、左上りのハケメ調整が認められる。ハケメ調整後断面台形を呈する低いタガが巡る。黒斑はなく、須恵質で



第28図　B地区遺構内出土遺物実測図

ある。色調は、淡赤橙色（2.7YR7/4）である。

溝５出土遺物のうち図化できたものには、土師器皿(41)、瓦器皿(44)がある。(41)は平底の底部からやや外反する口縁部につづく。口縁端部は丸くおさめる。口縁部内外面の調整法は、ヨコナデで仕上げる。色調は、橙色(7.5YR7/6)である。(44)は平底を呈する底部から外反する口縁部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。口縁部内外面はヨコナデ調整する。

溝６出土遺物のうち図化できたものは、土師器皿(37・38・62)と瓦(69)がある。皿は平底ないし丸底の底部に外反する口縁部がつく。口縁端部は丸くおさめる。口縁部内外面は、ヨコナデで調整する。(62）の底部外面には糸切り痕が残る。色調は(37）が浅黄橙色（7.5YR8/4)、(38)が赤橙色（10R6/6)、(62)が浅黄橙色（7.5YR8/3）を呈する。(69)は軒丸瓦の瓦当面の破片である。瓦当面には、巴文とその周囲にやや大型で断面半円形を呈する珠文を巡らす。

Pit10出土遺物には瓦器椀(65)がある。底部には断面逆台形を呈する低い高台を貼り付ける。

Ⅳ．瓜生堂遺跡第37次調査Ａ地区・巨摩廃寺遺跡第５次調査Ａ地区採取土壌の花粉分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

１．瓜生堂遺跡第37次調査Ａ地区採取土壌の花粉分析

１）試料

試料は、瓜生堂遺跡第37次Ａ地区の南北断面にあらわれた７層～19層間で採取された堆積物６点である。堆積層の年代学的な情報は乏しく、３層で近世の、８層以浅で中世の遺物がそれぞれ出土している。

２）分析方法

花粉・胞子化石の分離・濃集は、以下の方法で行った。

採取された試料のうち湿重約10ｇの試料について、フッ化水素酸処理→重液分離→篩別→アセトリシス処理→水酸化カリウム処理の順に物理・化学処理を行った。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下で観察しながら出現する全ての種類(Taxa)の同定・計数を行った。

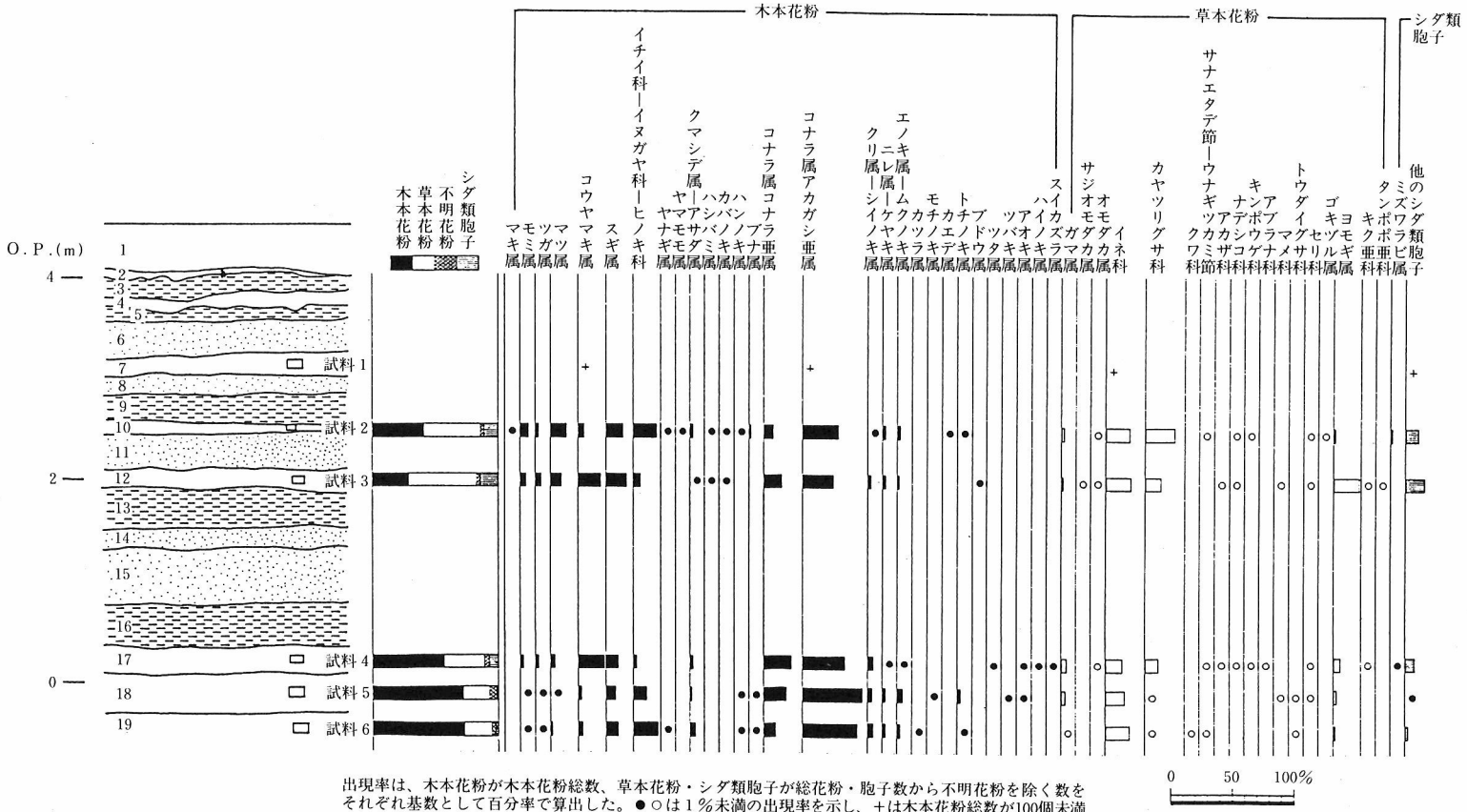
結果は、一覧表と花粉化石群集の変遷図として示した。(第29図)その際の出現率は、木本花粉が木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子が総花粉・胞子から不明花粉総数を除いた数をそれぞれを基数として、百分率で算出した。

３）結果

花粉・胞子化石の計数結果を第２表、花粉化石群集変遷図を第29図に示した。試料１では、産出化石数が少なく、その化石のほとんどが壊れており保存状態が悪かった。堆積後の変質作用（酸化分解、土壌微生物による分解など）の影響を強く受けていると判断されたため、統計的に扱うことは控えた。

第２表　瓜生堂遺跡第37次発掘調査Ａ地区南北断面試料の花粉分析結果

種　類(Taxa)	試料番号 1	2	3	4	5	6
木本花粉						
マキ属	-	1	-	-	-	-
モミ属	-	15	7	6	1	2
ツガ属	-	4	8	5	1	1
マツ属	-	31	15	9	1	3
コウヤマキ属	1	11	31	53	5	8
スギ属	-	34	30	23	15	22
イチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科	-	45	10	4	22	47
ヤナギ属	-	1	-	-	-	1
ヤマモモ属	-	1	-	-	-	-
クマシデ属―アサダ属	-	6	1	4	3	11
ハシバミ属	-	1	1	-	-	-
カバノキ属	-	1	1	-	-	-
ハンノキ属	-	1	-	-	1	2
ブナ属	-	3	-	-	2	2
コナラ属コナラ亜属	-	18	26	58	42	22
コナラ属アカガシ亜属	1	71	45	88	108	108
クリ属―シイノキ属	-	2	4	10	6	11
ニレ属―ケヤキ属	-	4	3	1	5	5
エノキ属―ムクノキ属	-	4	2	1	9	6
カツラ属	-	-	-	-	-	1
モチノキ属	-	-	-	-	1	-
カエデ属	-	1	-	-	-	-
トチノキ属	-	2	-	-	4	2
ブドウ属	-	-	1	-	-	-
ツタ属	-	-	-	1	-	-
ツバキ属	-	-	-	-	1	-
アオキ属	-	-	-	1	1	-
ハイノキ属	-	-	-	1	-	-
スイカズラ属	-	-	-	1	-	-
草本花粉						
ガマ属	-	15	9	16	9	2
サジオモダカ属	-	-	1	-	-	-
オモダカ属	-	-	1	1	-	-
イネ科	1	116	127	58	44	64
カヤツリグサ科	-	138	74	43	2	3
クワ科	-	-	-	-	-	1
サナエタデ節―ウナギツカミ節	-	2	-	2	-	1
アカザ科	-	-	1	1	-	-
ナデシコ科	-	2	1	1	-	-
キンポウゲ科	-	1	-	1	-	-
アブラナ科	-	-	-	1	-	-
マメ科	-	-	2	-	1	-
トウダイグサ科	-	-	-	-	1	1
セリ科	-	2	2	2	2	-
ゴキヅル属	-	2	-	-	-	-
ヨモギ属	-	7	123	22	7	5
キク亜科	-	-	5	1	-	-
タンポポ亜科	-	-	1	-	-	-
不明花粉	4	22	18	18	18	10
シダ類胞子						
ミズワラビ属	-	8	-	3	-	-
他のシダ類胞子	16	60	92	30	2	6
フウ属	-	-	4	-	-	-
合計						
木本花粉	2	257	185	266	228	254
草本花粉	1	286	347	149	66	77
不明花粉	4	22	18	18	18	10
シダ類胞子	16	68	92	33	2	6
総花粉・胞子	23	633	642	466	314	347



出現率は、木本花粉が木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子が総花粉・胞子数から不明花粉を除く数をそれぞれ基数として百分率で算出した。●○は1％未満の出現率を示し、＋は木本花粉総数が100個未満の試料において産出した種類を示す。

第29図　瓜生堂遺跡第37次発掘調査Ａ地区南北断面における花粉化石群集の変遷図

花粉化石群集は、19層から17層（試料６～４）までは常緑広葉樹のアカガシ亜属が高率に産出し、次いでコナラ亜属、スギ属、イチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科が多産する。このうちコナラ亜属は上位層にむけて増加傾向を示し、逆にイチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科が減少傾向を示す。また、17層（試料４）では低率であったコウヤマキ属が増加する。草本花粉では、イネ科が最も高率に産出し、カヤツリグサ科や水生植物のガマ属を伴う。また17層（試料４）では抽水植物のミズワラビ属・オモダカ属が僅かであるが産出する。12層（試料３）では、17層（試料４）と同様にアカガシ亜属が高率に産出するものの、その出現率は減少する。また、本層では針葉樹のマツ属・スギ属が漸増する。10層（試料２）でもほぼ同様な変遷を示す。

４）考察

本地点の19層から10層までの花粉化石群集は、出現頻度に若干の差はあるものの全てアカガシ亜属の高率出現により特徴づけられる。調査地点が沖積地に位置することから、堆積物中より検出された花粉・胞子化石の多くは河川などの流水により遠方から搬入されたものと考えられる。したがって、本地点で認められた花粉化石群集は、広域の植生を反映しているものと判断される。このことから、19層から10層の頃までは後背の山地などにはアカガシ亜属の卓越する森林、すなわち照葉樹林が成立していたことが推定される。本地点の花粉化石群集と同様な群集は、近接する巨摩廃寺遺跡Ａ地区（パリノ・サーヴェイ、後述）やその西方約100ｍの地点（安田，1982）における花粉化石群集中にも見いだされる。ただし、今回の分析地点とそれらの地点との堆積層の層位関係が不明であり、花粉化石群集の変遷を時間・空間的に比較することは難しい。今後の課題と言えよう。

また、巨摩廃寺遺跡Ａ地区では、クリ属―シイノキ属が増加する層位が認められたが、本地点では認められない。これについても両地点の時間層序学的な検討の後、再検討する必要がある。

さらに、今回得られた花粉化石群集では、スギ属、コウヤマキ属、イチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科といった温帯針葉樹林の構成要素を有する種類が比較的高率に産出する。大阪平野では約7,500年前から6,000年前にカシ類の卓越する森林へと変遷し（Maeda，1976）、その後、約3,000年前頃から気候が悪化（冷涼化・多雨化）したため、温帯針葉樹であるスギ、コウヤマキ、ヒノキ、モミ、ツガなどの針葉樹が増加するとされている（那須，1989）。今回の群集中で針葉樹が多産することが上記の変遷に対応するのか否かについても、堆積層の年代学的な検討を行うとともに、より下位の層位における花粉化石群集の変遷を明かにしたうえで再検討する必要がある。

一方、調査地点周辺の堆積域内は、堆積層中の数層準において砂の厚い堆積が認められていることから、洪水など河川の氾濫の影響を頻繁に受けていたことが伺われる。しかし、そのような砂層間には粘土の堆積も認められており、静穏な堆積期もあった可能性がある。このような粘土堆積期の集水域内にはガマ属などが生育する水湿地が存在したものと考えられ、また17層・12層の頃にはオモダカ属・サジオモダカ属、ミズワラビ属といった浅水域あるいは湿地に

生育する植物も見られるようになったことが考えられる。

引用文献

Maeda,y (1976) Palynological study of the forest history in the coastal area of Osaka Bay scince 14,000BP. Journ. Geosci. Osaka City Univ., 20, Art. 4

那須孝悌（1989）1．活動の舞台：概論．「弥生文化の研究，第1巻　弥生人とその環境」編集：永井昌文・那須孝悌・金関　恕・佐原　眞，雄山閣出版株式会社，p.119-130.

パリノ・サーヴェイ株式会社瓜生堂第37次・巨摩廃寺遺跡第5次発掘調査採取の土壌に含まれる花粉分析.

安田喜憲（1982）Ⅳ　瓜生堂・巨摩廃寺遺跡泥土の花粉分析．「巨摩・瓜生堂　近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書」，財団法人　大阪文化財センター，p. 321-360.

2．巨摩廃寺遺跡第5次調査A地区採取土壌の花粉分析

1）試料

試料は、A地区の南北断面から採取された土壌7点である。なお、13層は出土遺物から古墳時代前期の堆積層とされる。

2）分析方法

花粉・胞子化石の抽出は、採取された各試料から湿重10gの試料を秤量し、フッ化水素酸処理→重液分離→篩別→アセトリシス処理→水酸化カリウム処理の順に物理・化学処理を行った。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下で観察し、検出された全ての種類（Taxa）について同定・計数を行った。

結果は、一覧表と花粉化石群集の変遷図として示した。花粉化石群集の変遷図の出現率は、木本花粉が木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子が総花粉・胞子から不明花粉総数を除いた数をそれぞれ基数として百分率で算出したものである。

3）結果

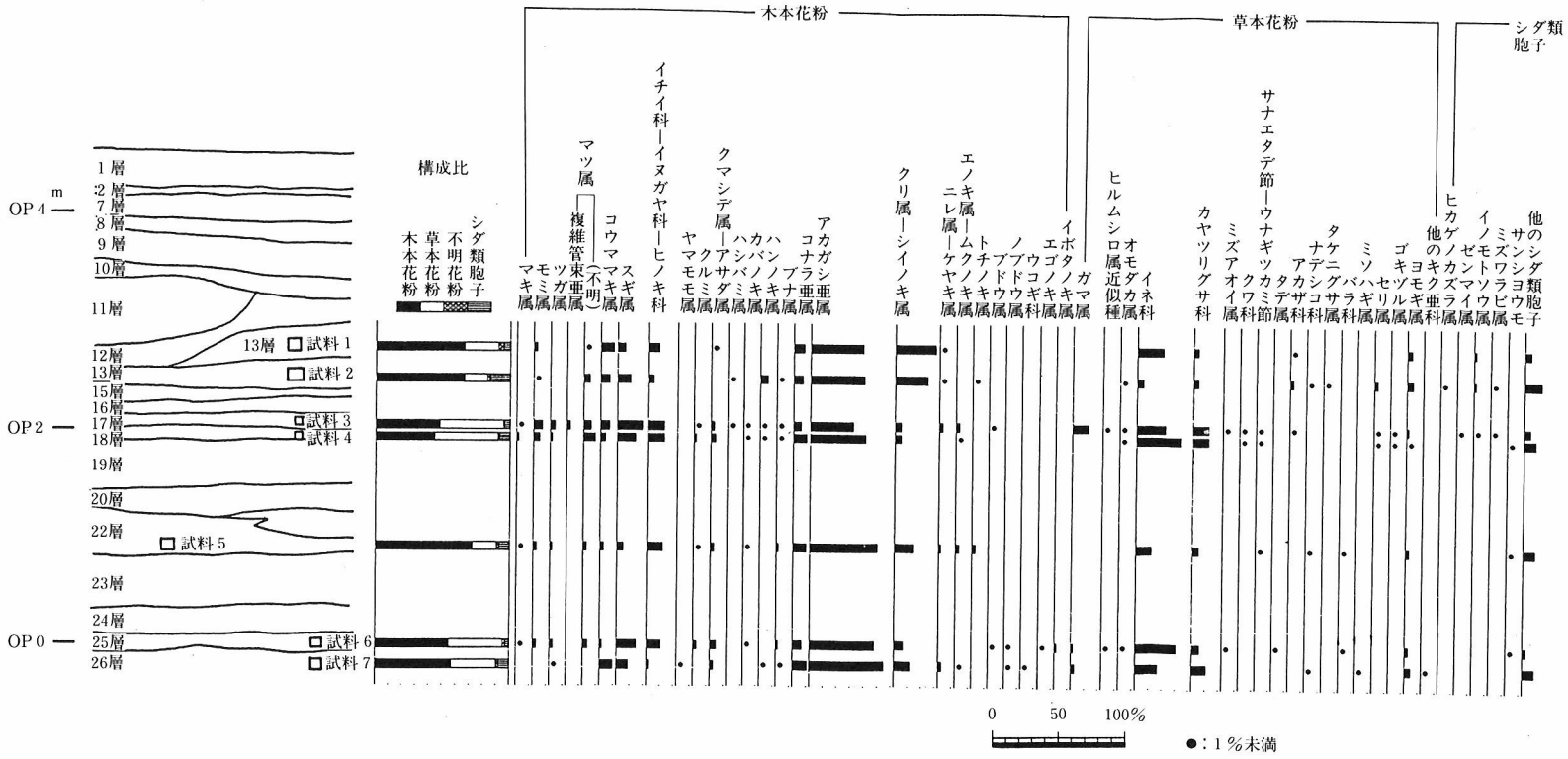
花粉・胞子化石の計数結果を第3表、花粉化石群集変遷図を第30図に示した。

花粉化石群集は、いずれの試料も常緑広葉樹のアカガシ亜属の高率出現により特徴づけられる。これに次いでクリ属―シイノキ属、コナラ亜属、スギ属・イチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科が10%前後の出現率を示し、試料2・1ではクリ属―シイノキ属が増加し、20%以上の出現率を示すようになる。草本花粉は、不安定な産状を示す。イネ科が試料1・3・4・6・7では高率に出現するが他の試料では低率である。また、試料番号1以外の試料からはガマ属・オモダカ属、ミズアオイ属・サンショウモなど水湿地性の種類が検出された。

なお、試料1・2から検出される花粉・胞子化石は、保存状態が良くなく、外膜が壊れているものが多く、他の層位の試料に比較して検出される個体数が極端に少なかった。

第３表　巨摩廃寺遺跡第５次発掘調査Ａ地区試料における花粉分析結果

種 類(Taxa)	試料番号	1	2	3	4	5	6	7
木 本 花 粉								
マキ属		-	-	1	2	1	1	-
モミ属		2	1	15	7	3	4	-
ツガ属		-	-	7	2	2	3	1
マツ属複維管束亜属		-	-	4	-	-	-	-
マツ属（不明）		1	4	14	15	4	5	-
コウヤマキ属		10	6	16	5	4	2	17
スギ属		5	10	47	26	7	26	15
イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科		8	4	32	24	22	19	2
ヤマモモ属		-	-	-	-	-	-	1
クルミ属		-	-	1	2	1	3	-
クマシデ属—アサダ属		1	-	5	6	3	7	3
ハシバミ属		-	1	1	-	-	-	-
カバノキ属		-	-	2	1	1	1	-
ハンノキ属		-	5	1	1	-	-	1
ブナ属		-	1	2	1	2	2	1
コナラ亜属		7	7	12	17	17	11	19
アカガシ亜属		40	43	83	78	97	88	104
クリ属—シイノキ属		31	25	11	8	25	11	21
ニレ属—ケヤキ属		1	1	4	-	2	-	3
エノキ属—ムクノキ属		-	-	4	1	3	-	1
トチノキ属		-	1	-	-	4	-	-
ブドウ属		-	-	2	-	-	1	-
ノブドウ属		-	-	-	-	-	1	1
ウコギ科		-	-	-	-	-	-	1
エゴノキ属		-	-	-	-	-	1	-
イボタノキ属		-	-	-	-	-	2	-
草 本 花 粉								
ガマ属		-	-	60	-	-	4	8
ヒルムシロ属近似種		-	-	2	-	-	1	-
オモダカ属		-	1	1	3	-	2	-
イネ科		29	6	112	145	31	101	52
カヤツリグサ科		5	5	61	47	10	16	34
ミズアオイ属		-	-	1	-	-	2	-
クワ科		-	-	2	3	-	-	-
サナエタデ節—ウナギツカミ節		-	-	3	1	1	-	-
タデ属		-	-	-	-	-	1	-
アカザ科		1	3	1	-	-	-	-
ナデシコ科		-	1	-	-	1	-	1
タケニグサ属		-	1	-	-	-	-	-
バラ科		-	-	-	-	1	2	-
ミソハギ属		-	-	-	-	-	-	1
セリ科		-	4	1	1	-	-	-
ゴキツル属		-	-	1	2	-	-	-
ヨモギ属		5	7	7	4	6	7	12
他のキク亜科		-	-	-	-	-	-	1
不明花粉		6	4	3	5	5	7	6
シ ダ 類 胞 子								
ヒカゲノカズラ属		-	1	-	-	-	-	-
ゼンマイ属		-	-	1	-	-	-	-
イノモトソウ属		2	2	1	-	-	-	-
ミズワラビ属		-	1	1	-	-	-	-
サンショウモ		-	-	-	1	1	2	-
他のシダ類胞子		6	20	19	33	21	8	25
Botryococcus近似種		-	1	-	-	-	-	-
フウ属		-	-	-	-	1	-	-
合 計								
木本　花 粉		106	109	264	196	198	188	191
草 本 花 粉		40	28	252	206	50	136	109
不 明 花 粉		6	4	3	5	5	7	6
シ ダ 類 胞 子		8	24	22	34	22	10	25
総 花 粉 ・ 胞 子		160	165	541	441	275	341	331



第30図　巨摩廃寺遺跡第５次調査Ａ地区試料における花粉化石群集の変遷図

4）考察

本調査地点の26層から13層にかけて花粉化石群集は全てアカガシ亜属の高率出現により特徴づけられた。このことは、26層から13層が堆積する頃までの間、堆積域内や周辺の山地・台地などの植生が、大きく変化することはなく、カシ類など照葉樹の種類が卓越する植生が継続して成立していたことを示している可能性が高い。また、14・13層の頃になると周辺でクリ属―シイノキ属が増加した可能性がある。ただ、ここでのクリ属―シイノキ属の増加は、クリ属―シイノキ属は虫媒植物であることから、その花粉の大半が樹冠内に落下する可能性が高く、局地的な植生の変化を反映した結果とも考えられ、どの程度の分布拡大であったかについては限定できない。また、両層は、試料２・１における花粉・胞子化石の保存状態が良くなかったこと、および検出される個数が少ないことから、堆積時に取り込まれた花粉・胞子がその後の続成作用（化学的な酸化分解や土壌微生物などによる分野）の影響を受けている可能性が考えられる。すなわち、試料中の花粉化石群集が、分解・消失に対して選択的に残った花粉・胞子化石で構成されているもので、当時の植生を反映していない歪曲された花粉化石群集になっている可能性もあるので一外には言えない。このことは、当時の堆積環境およびその後の環境変化などを明かにした上で再度検討することが必要であろう。

一方、調査地点周辺の堆積域内には、試料番号７～２の頃、オモダカ属・ミズアオイ属など水湿地性の植物が繁茂する場所が存在したものと考えられる。特に、試料３の頃は種類数が多く、ガマ属の花粉が多産することから調査区の近くが水湿地の様相を呈していた可能性がある。

今回の花粉化石群集の変遷は、本地点の西側100ｍの地点における花粉化石群集の変遷(安田, 1982）と類似した出現傾向を示している。ただし、ここでは両地点の堆積層の層位関係が不明であり、花粉化石群集の変遷を時間・空間的に比較し、周辺の植生を考察することは困難であり、今後の課題として残される。また、今回のような沖積地の堆積物では、その中に取り込まれている花粉化石群集がどのような過程を経て堆積しているのかが植生を考える上で重要になってくる。なぜならば、沖積地の堆積物中には、河川の運搬堆積作用によって搬入された遠方の花粉・胞子や異なった時期の化石を含んでいる可能性があるのである。したがって、今後、周辺地域の地形の発達過程などを充分検討した上で花粉化石群集の由来を考え、植生について考察することが大切になってくるであろう。

引用文献

安田喜憲（1982）Ⅳ　瓜生堂・巨摩廃寺遺跡泥土の花粉分析．「巨摩・瓜生堂　近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書」，財団法人　大阪文化財センター，p.321-360.

V．まとめ

今回の発掘調査地点は、瓜生堂遺跡の東南隅部分から巨摩廃寺遺跡の北東部分にあたる。

瓜生堂遺跡では、本遺跡の南側に位置する巨摩廃寺遺跡から続く中世以降の時期に形成された凹地内に堆積した遺物包含層を確認できた。この凹地は、巨摩廃寺遺跡で確認されている部分を含め、南北長80ｍ以上に拡がる。これによって中世以前の遺構が既に破壊されていることも十分考えられる。Ａ地区では、深さ約5.1ｍまで調査を実施したが本調査地の西側で大阪文化財センターによって確認されている弥生時代の遺構・遺物は、まったく確認できなかった。堆積土層からみて、本地点は、流路内の一角にあたるものと考えることができる。

巨摩廃寺遺跡では、Ｂ地区の中央から南側で第８層からきり込む中世の遺構を多数検出できた。確認できた遺構には、pit・溝・井戸がある。第８層は、調査地の南側一体に広く分布することが周辺の調査によって判明している。このことから、中世の遺構群がさらに南側へ拡がるものと推定でき、今後の調査によってその拡がりを追及する必要がある。Ａ地点では、深さ約５ｍまで調査を実施し、第13層から古墳時代前期の庄内式土器を検出した。しかし、さらに下層においては、遺構・遺物をまったく確認できなかった。瓜生堂遺跡と同様に流路の一角にあたるものと考えられる。

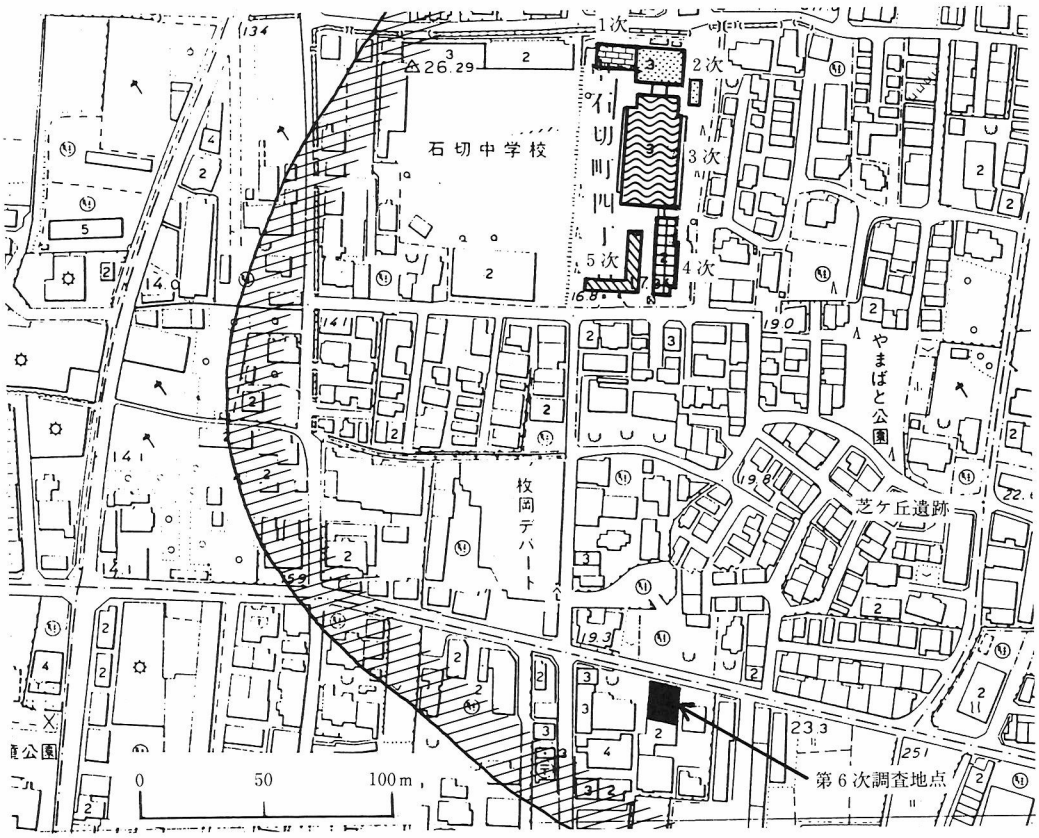
発掘調査にあたっては、有山淳司・細野恭一・山崎史郎が参加した。また、遺構図のトレースには、為井通子があたった。記して感謝いたします。

芝ケ丘遺跡第６次発掘調査概報

Ⅰ．調査に至る経過

芝ケ丘遺跡は市立石切中学校を中心に広がる縄文時代から平安時代に亘る複合遺跡である。昭和34年北石切町で住宅建設の造成工事が行われた際、弥生土器や土師器が発見され周知の遺跡となった。これまでに石切中学校の敷地内で５次の発掘調査が実施されている。その結果、弥生時代後期の溝、古墳時代中期後半の掘立柱建物・後期初頭の井戸などが検出される一方、出土遺物として当該期の土器のほかに、後期から晩期の縄文土器が発見されている。このことから中学校の東に縄文時代の集落が広がっていると推定されている。

今回報告する第６次調査の調査地は、石切中学校の南方150ｍの地点で中石切町２丁目2063番地の２にあたる。昭和63年当地に店舗付共同住宅の計画があり、試掘調査を行ったところ、古墳時代の遺物包含層が検出された。そこで発掘調査を行うことになり、原因者の委託を受けて当協会が昭和63年５月16日から同５月28日まで現地調査を実施したものである。



第31図　芝ケ丘遺跡と調査地点位置図（Ｓ＝1/3000）

II．位置と環境

芝ケ丘遺跡は、東大阪市中石切町２丁目、同４丁目、北石切町に所在する。生駒山地の西麓部では、発達した段丘面が見られるが、本遺跡も低位段丘の台地上、標高30ｍ前後に立地している。過去の調査成果によって遺跡の範囲は、東西600ｍ・南北500ｍに及ぶものと推定されており、やや北東に張り出す形となっている。今回の調査地は、遺跡の南西端に位置し、国家座標系で、Ｘ＝－145.945～960、Ｙ＝－32.195～210の間にあたる。

本遺跡の周辺には各時代の遺跡が数多く分布している。旧石器時代の遺物が千手寺山遺跡、正興寺山遺跡から出土している。縄文時代にはいると、神並遺跡、鬼虎川遺跡、善根寺遺跡、日下遺跡から早期～晩期の土器が確認されている。弥生時代の中期には鬼虎川遺跡や西ノ辻遺跡などの拠点集落が現われている。古墳時代の集落跡の検出例は近年漸増の傾向にある。即ち北より、日下・馬場・辻子谷・植附・神並・西ノ辻・鬼虎川の各遺跡である。一方山麓部には後期の群集墳が点在している。また法通寺跡や石凝院跡の寺院址、石切劔箭神社など歴史時代の遺跡や文化財の多い地域である。

1．芝ケ丘遺跡　5．馬場遺跡　9．植附遺跡　13．千手寺山遺跡　17．若宮古墳群
2．善根寺遺跡　6．辻子谷遺跡　10．鬼虎川遺跡　14．辻子谷古墳群　18．額田山古墳群
3．草香山遺跡　7．法通寺跡　11．西ノ辻遺跡　15．神並古墳群　19．みかん山古墳群
4．日下遺跡　8．神並遺跡　12．額田寺跡　16．正興寺山遺跡

第32図　遺跡周辺図

Ⅲ．調査の概要

今回の芝ケ丘遺跡第６次発掘調査は、店舗付き共同住宅建設に伴う基礎工事によって、埋蔵文化財に影響が及ぶ箇所129㎡を調査対象とした。盛土層、耕土層を機械で掘削し、以下の層位を人力掘削によって精査した。その結果近代以降に棚田が造られたため、調査地の北側の大半は地山層まで攪乱されていたことが判明した。そこで土器の取り上げは「段の上(下)」とし、遺構実測は国家座標杭に基づいて行った。

１．層位

調査地南側での基本層位は以下の通りである。

第１層　オリーブ黄色シルト質細砂。耕土層。北側は層厚を増す。層厚10～18cm。

第２層　黄褐色細砂。床土層。層厚５～13cm。

第３層　黄灰色極細砂～シルト。層厚10～21cm。

第４層　黒褐色シルト質粘土。奈良・平安時代遺物包含層。層厚７～12cm。

第５層　褐色粘質シルト。古墳時代の遺物を少量含み、平安時代の遺構面。層厚30cm。

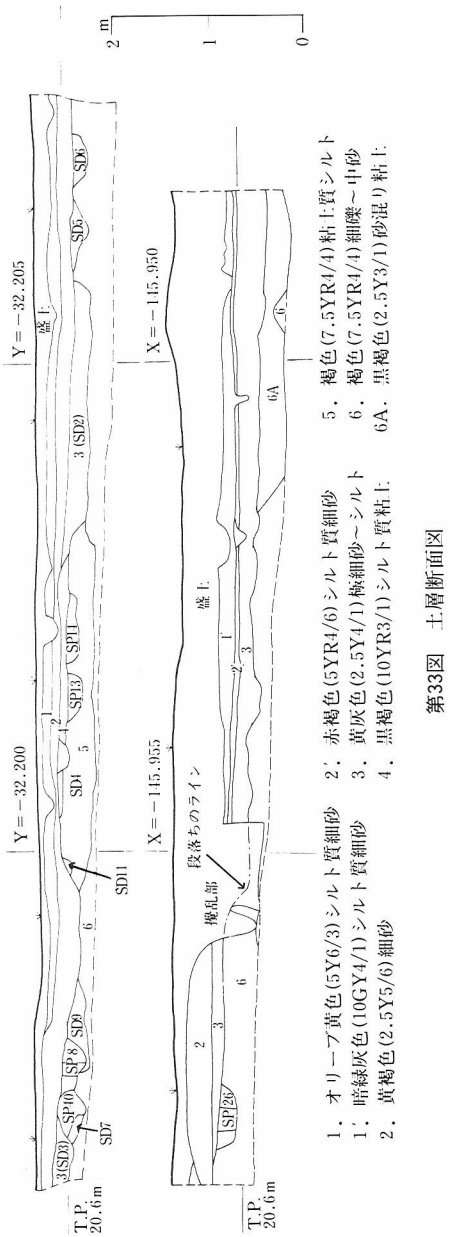
第６層　褐色中砂～細礫。地山層。古墳時代中期末～後期初頭の遺構面。

以上のうち、第４層は、後世の攪乱や削平を受けて調査地南側の中央部にのみ遺存。第６層(地山層)は南から北への緩な傾斜が認められた。１～５次調査区（石切中学校）とくらべると、約－４ｍの比高差があることになる。

２．遺構

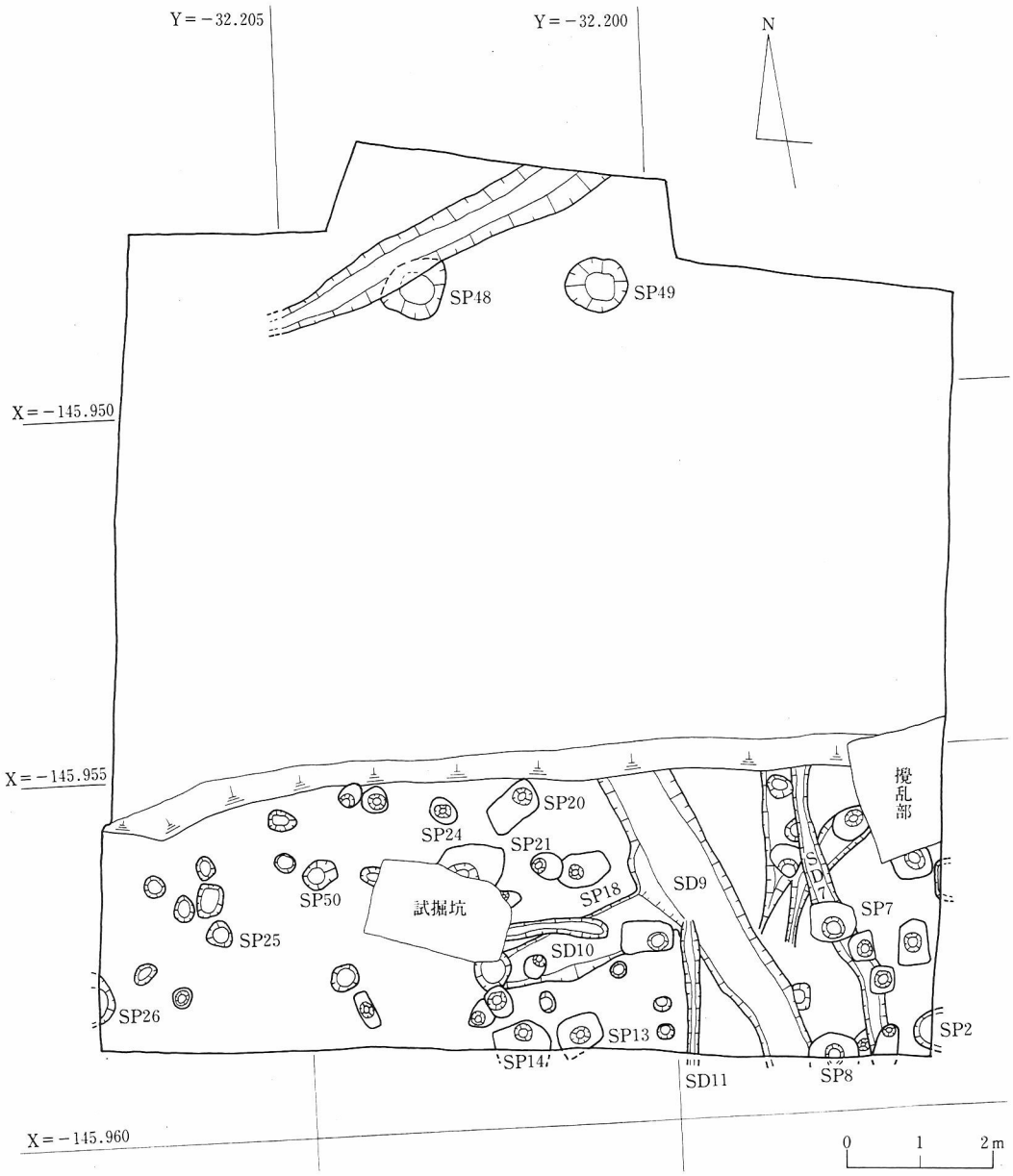
第４・５・６層の各上面で遺構を検出した。第４層上面では、中世期以降の溝を６条検出している。溝はほぼ南北に走っており、埋土は第３層である。幅0.4～0.6ｍのものと、1.7～3.5ｍに及ぶものとがある。前者は畝状遺構で、後者は耕作に伴う遺構と考えられる。

第５～６層上面では、ピット50個、溝８条が検出された。これらは第５層の広がりに規制されて、同一面上で確認したものである。第１表によると、ピットの埋土は褐灰色系とオリーブ黒色系の２種に分



第33図　土層断面図

けることができる。切合関係では後者が前者を切ること、また埋土中の黒色土器の有無を総合して考えると、褐灰色系ピット＝古墳時代中期末～後期初頭、オリーブ黒色系ピット＝平安時代と推定することができる。前者が西側に広く分布するのに対し、後者は中央より東側に多く、方形の掘形を持つものが目立っている。調査地の制約上、柱通りは明らかにしがたいが、SP24—SP50—SP25—SP26は約1.7ｍのピッチで一直線上にあり、掘立柱建物の存在を予想させる。溝では、SD９が規模のもっとも大きいもので、幅0.8～1.0ｍ、深さ15～20㎝を測る。溝中央部には拳大の礫が集積していたが、焼化等の痕跡は認められなかった。



第34図　検出遺構平面図

第4表　ピット一覧表

ピット番号	規模(cm) 長径	規模(cm) 短径	規模(cm) 深さ	形態	埋土 掘形	埋土 柱痕	出土遺物	遺物番号	ピット番号	規模(cm) 長径	規模(cm) 短径	規模(cm) 深さ	形態	埋土 掘形	埋土 柱痕	出土遺物	遺物番号
SP-1	56+	9+	9	方形	A	1	師		26	66+	19+	11	楕円形	B	2		
2	54+	24+	17	楕円形	A	−			27	26+	24+	16	楕円形	B	−		
3	50+	35+	24	方形	A	1	師・須・塩		28	27	23	31	円形	B	2	塩	
4	61	39	17	方形	A	1	師・須・弥		29	32	23	31	楕円形	B	−		
5	35	32	34	方形	B	2	師・塩		30	37	36	22	円形	B	2	師・須	
6	40	33	19	方形	B	2	師・弥・塩		31	32+	21+	14	楕円形	B	2	師・塩	
7	61	54	16	方形	A	1	師・須・黒・弥	2，3	32	29	25	19	円形	B	2	師・弥・塩	
8	65+	33+	28	楕円形	A	1	師・須・黒	14	33	44	34	17	方形	B	−	師	
9	36	22	28	方形	C	2	須		34	35	24	32	楕円形	B	−		
10	72	39	15	方形	A	1	師・須・黒・塩		35	36	25	18	楕円形	B	−		
11	22	20	14	円形	B	2	塩		36	33	24	36	楕円形	B	−	師・須	
12	22	19	11	円形	B	2			37	29	28	34	円形	B	−	師・塩	
13	60+	45+	9	方形	B	2	師		38	22	20	16	円形	A	1	弥	
14	74+	39+	21	楕円形	B	2	師・須		39	38+	17+	17	楕円形	C	2	師	13
15	28	20	22	楕円形	B	2	師・塩		40	41+	23+	21	楕円形	B	2		
16	42	32	37	方形	A	1	師・塩		41	48	40	15	円形	B	2	師	
17	34+	32	29	楕円形	B	2	師・塩		42	32+	14+	23	円形	B	2	師・弥・塩	
18	70	46	27	楕円形	B	2	師・須・弥	9	43	35	30	16	楕円形	B	2	師・須・塩・弥	16
19	40	37	31	円形	A	2	師・須	15	44	48+	38+	20	楕円形	B	2	師・須・塩	
20	71	44	36	方形	A	2	師・須・弥・塩		45	33	27	13	楕円形	A	2	師・塩	
21	83+	40+	30	方形	A	2	師・須・弥・塩	10	46	50+	34+	13	楕円形	B	−		
22	51	21	23	方形	B	2	師・弥・塩		47	26+	24+	16	楕円形	B	2		
23	38	34	25	円形	B	2	師・弥		48	97	78	42	円形	D	−	師・須・弥・墨	6，17
24	38	30	11	楕円形	B	2			49	72	70	30	円形	D	−	師・須・塩・サ	1
25	36	34	32	円形	B	2	師		50	46	33	19	楕円形	B	−		

凡例:1)「規模」欄で＋は全形が不明でそれ以上の規模をもつことを表わす。「柱痕」で−は柱痕跡が検出できなかったもの。
2)「埋土」欄の記号は次のとおり。「掘形」;A:第6層にオリーブ黒色(5Y3/1)シルトがブロック状に混入、B:第6層に褐灰色(10YR4/1)シルトがブロック状に混入、C:第6層に灰オリーブ色(5Y5/3)シルトがブロック状に混入、D:暗緑灰色(5G4/1)粗砂混粘土「柱痕」;1.オリーブ黒色(5Y3/1)シルト質粘土、2.褐灰色(10YR4/1)粘土。
3)「出土遺物」欄の略号は次のとおり。師＝土師器、須＝須恵器、塩＝製塩土器、弥＝弥生土器、黒＝黒色土器、墨＝墨書土器、サ＝サヌカイト片。
4)「遺物番号」欄の番号は第35図の番号と対応している。

3．出土遺物

今回の調査では、遺物包含層の遺存状態が悪く、検出した遺構もピットがほとんどであったため、極細片の出土でかつ量も少ない。そのため図示しうる資料を網羅的に第5図に収めた。なお、ピット内出土の遺物は第1表にその番号を示しているので、参照されたい。

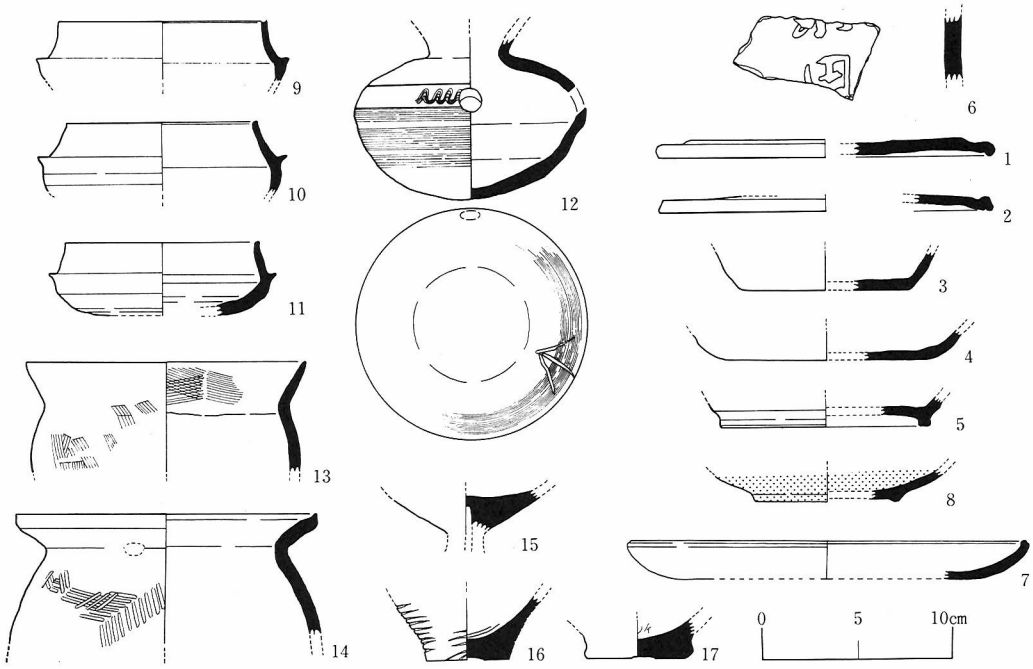
奈良～平安時代の土器

須恵器（1～6）　杯蓋（1・2）は端部がつまみ出しによる稜のつくものである。杯（3～5）は平担な底部に斜め上方にまっすぐ伸びる口縁部から成り、高台のつくもの（5）とつかないもの（3・4）とがある。5の高台は体部との境に垂直に短く貼付されている。第3層内出土。4はSD4より出土。6は墨書のある壺の胴部片である。「小田」と読める。

土師器・黒色土器（7・8）　皿（7）は、内外面ともナデ調整で口縁端部を内側に肥厚させ、外端部に段がつく。器高2.0cm、口径は推定値で20.0cmを測る。平城宮の土器型式編年でⅦ期に併行する資料と思われる。第4層内出土。黒色土器椀（8）は第3層内出土。

古墳時代の土器

須恵器（9～12）　図示した杯(9～11)、瑳(12)のほかに甕の胴部片もピット内から出土している。杯のうち比較的残りの良い(11)は底部付近にていねいな逆時計回りのヘラケズリが施されている。瑳(12)は口頸部を欠損するが、体部は扁球形を呈し、円孔を穿つ。肩部にヘラ描き沈線を1条めぐらし、その直下に櫛描波状文を施す。体部下半はカキメ調整(8本/cm)。底部中央と円孔を結



第35図　出土遺物実測図

ぶ線から時計回りで116°の位置に「⋀」のヘラ記号がある。杯(11)・瑯(12)ともSD９内より出土。

土師器（13～15）　甕（13）は体部外面にタテハケ（８本/cm）、口縁部内面にヨコハケ（８本/cm）を施す。(14）は体部外面に「くの字状」のタタキメ（右上がり）が施されている。青木勘時氏のタタキメ分類(注)によれば、Ｂ類に相当する。口縁端部は上方につまみ出すために段をなす。橙色（5YR7/6)を呈し、胎土中には長石、石英、くさり礫が認められるものの、角閃石は認められない。他地域（大和産か？）からの搬入品であろう。

弥生土器（16・17）　甕の底部片がピット内から出土している。

(注）青木勘時「特異な叩き目に関する覚え書き」(『東大阪市文化財協会ニュース』2-2、1986年。)

Ⅳ．まとめ

第６次調査は129m²の限られた範囲の中であったが、古墳時代後期と奈良～平安時代のピット・溝と、弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器の遺物を検出した。以下箇条書きに今回の調査成果をまとめておく。

１．検出した遺構面は、第６次調査の南側であったことから、当該期の集落は南方に延びるものと思われる。また後期の弥生土器が発見されたことから、周辺に集落の存在が予想される。

２．僅少な出土遺物の中に、庄内期の特異なタタキメを持つ甕（14）が確認されたことは注目される。河内では初めての出土例である。今後の調査が進展することを期待したい。

謝辞。調査、整理では次ぎの方々の御協力を得た。記して感謝いたします。渡辺忠雄、中切孝彦、堀田博隆（調査）渡辺政子、八木亮、八代佳子（整理)、濱野俊一（神戸市教委）

西の口遺跡第２次発掘調査概報

Ⅰ．調査に至る経過

西の口遺跡は、市立縄手南中学校を中心に広がる縄文時代から中世期に亘る複合遺跡である。本遺跡が発見させたのは昭和59年で、試掘調査によってその存在が確認されたものである。その経過については、『西の口遺跡第１次発掘調査概要―市立縄手中学校分教場建設工事に伴う第１次調査』<㈶東大阪市文化財協会、1987年>に拠られたい。

第１次調査の結果、弥生時代末～古墳時代初頭の壺棺墓３基・井戸状遺構２ケ所・溝６条・土壙１基・ピット３個、古墳時代後期初頭の掘立柱建物５棟・土壙３基・溝10条・自然流路１本・ピット群１ケ所、平安時代の土壙３基・井戸２基とそれに付随するピット群、中世期の畝状遺構と溝などが検出された。出土遺物としては、当該期の土器（弥生土器・土師器・須恵器・製塩土器）のほか、縄文時代晩期後半の突帯文土器、石鏃（縄文～弥生時代）・銅鐸型石製品（弥生時代）・滑石製有孔円板・紡錘車・管玉（古墳時代）などの石器や石製品、鉄鏃（古墳時代）が発見された。

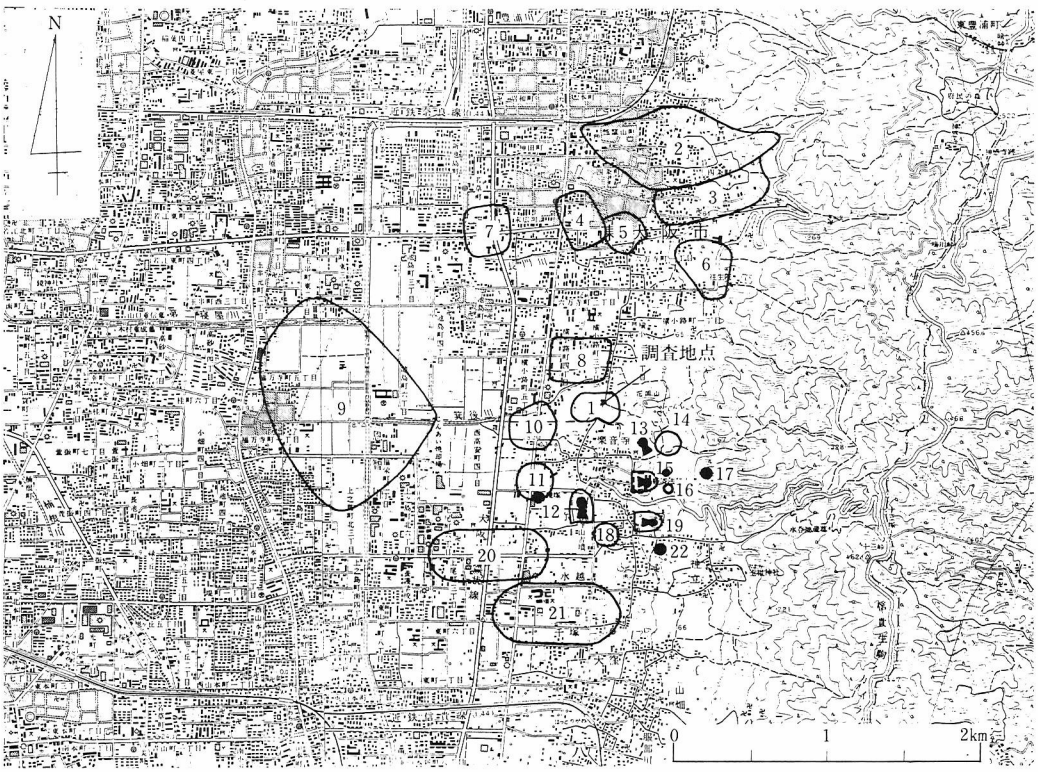
今回報告する第２次調査の調査地は、第３図にあるとおり、第１次調査地の東７ｍの地点に当たる。昭和62年３月、第１次調査が終了した市立縄手南中学校予定地では建設工事が急ピッチで進められていた。たまたま文化財課職員が現場を通り掛かったところ、校舎の脇で下水管の埋設工事が行われており、掘削土が露出していた。そこには弥生時代後期末の土器片が大量に含まれていたため、工事関係者に事情を説明し、校舎の東側の工事を一時中断するとともに、埋蔵文化財の取り扱いについて協議に入った。その結果下水管埋設部については、市教育委員会文化財課の担当で立会調査を行うことにし、下水管の東に建設予定の水泳プールについては、埋蔵文化財に影響が生じる部分(41×3m)を当協会が委託を受ける形で発掘調査を実施することになった。調査の期間は中学校の開校行事の関係で、昭和62年４月２日から４日までの３日間であった。関係者各位に厚くお礼申し上げる次第です。

第36図　調査風景

II. 位置と環境

西の口遺跡は、東大阪市横小路町２～４丁目に所在する。生駒山地西麓部では、谷あいを流れる小河川の堆積作用によって、発達した扇状地の形成が見られる。本遺跡もその小河川の一つ、箕後川左岸の扇状地上、標高20ｍ前後に立地している。

本遺跡は、東大阪市東地区の最南端に位置するため、八尾市域を一部含みながら、遺跡の歴史的環境をみてみよう。遺跡の周辺には、縄手遺跡、馬場川遺跡が縄文時代後期以降営まれはじめる。馬場川遺跡は箕後川を挟んで北側に位置しており、本遺跡の縄文土器を考える際重要である。弥生時代後期後半の標式遺跡である上六万寺遺跡や北鳥池遺跡は本遺跡の北1.2kmの地点に所在する。古墳時代の前期から中期にかけては、八尾市域で一群の古墳が形成される。西の山古墳・花岡山古墳・向山古墳（以上前期）、心合寺山古墳・中谷山古墳・愛宕塚古墳・鏡塚古墳（以上中期）がそれで、楽音寺・大竹古墳群と呼ばれている。位置関係では、本遺跡の東、後背部に西の山古墳が所在する。後期群集墳は、山畑古墳群、花草山古墳群など西麓部に多く位置している。往生院などの寺院や史跡も多い地域である。

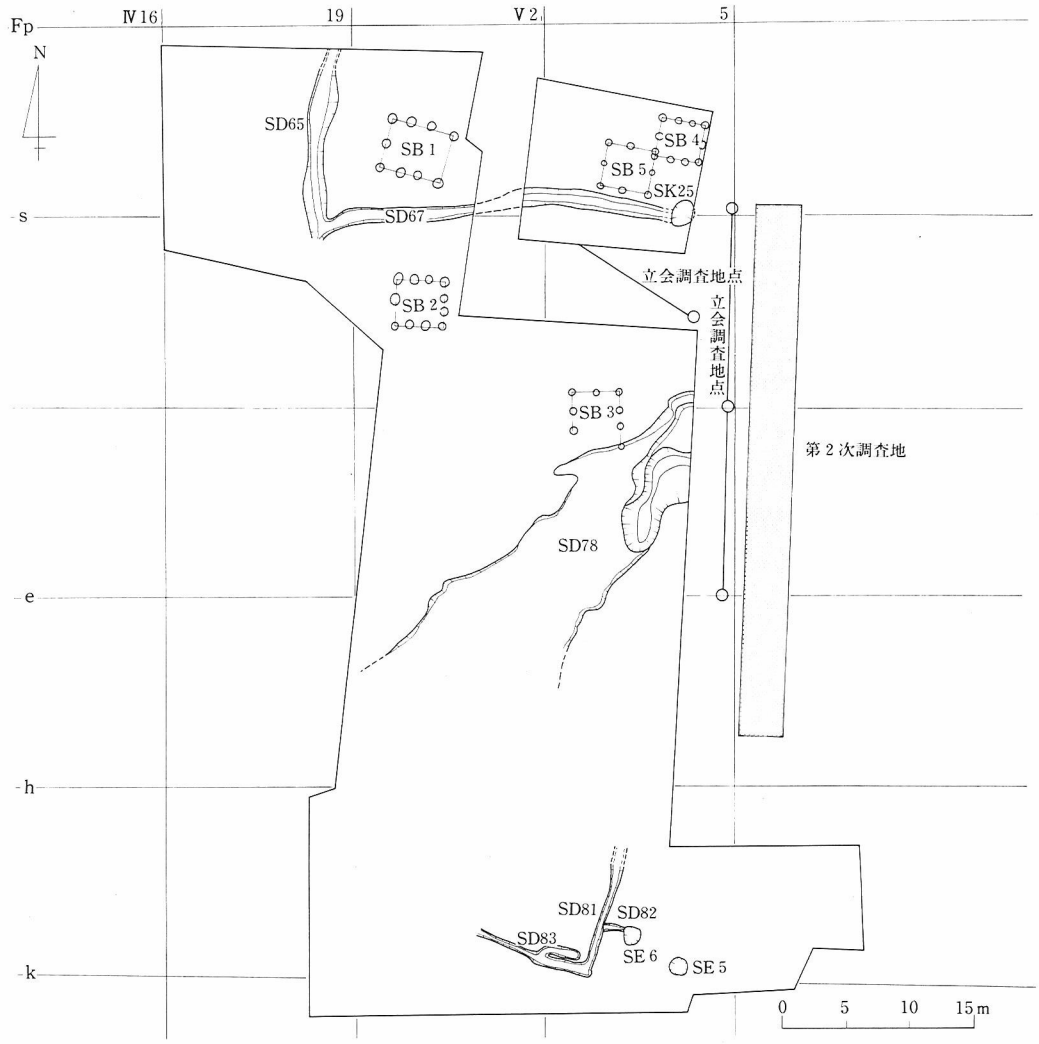


1. 西の口遺跡
2. 山畑古墳群
3. 花草山古墳群
4. 縄手遺跡
5. 上六万寺遺跡
6. 往生院金堂跡
7. 北鳥池遺跡
8. 馬場川遺跡
9. 池島・福万寺遺跡
10. 楽音寺遺跡
11. 大竹西遺跡
12. 鏡塚古墳
13. 西の山古墳
14. 大光寺山遺跡
15. 花岡山古墳
16. 花岡山遺跡
17. 中谷山古墳
18. 大竹遺跡
19. 向山古墳
20. 太田川遺跡
21. 水越遺跡
22. 愛宕塚古墳

第37図　遺跡周辺図

Ⅲ．調査の概要

今回の調査地は、先に記したように、第１次調査地のすぐ東にあたる。また学校建設以外の開発工事は当該地では行われておらず、一定程度、土層の堆積が予想される状況にあった。調査期間も限られていることから、まずG.L.から40cmを機械（0.25m³バックホー）で掘削し、その後、人力で遺物包含層の掘削と遺構面精査を行う予定であった。ところが、後述するように、遺物包含層は予想以上に攪乱されており、第１次調査で確認した古墳時代と弥生時代の２枚の包含層はほとんど消失した状態であった。そこで機械掘削終了後直ちに遺構面を精査し、できるだけ多くの遺構を確認するよう努めるとともに、遺構内堆積土の掘り下げについては慎重に行ったところである。なお今回の報告では、第２次調査に先立って実施された下水管埋設部の立会調査（市教委文化財課担当）で出土した土器についても併せて報告するものである。



第38図　第１次調査検出遺構と第２次調査地

1．層位

ここでは第１次調査の層位を基本層序として第２次調査の層位を明らかにしておきたい。

第０層　攪乱層。平均層厚40cm。

第１層・第２層　未確認。

第３層　オリーブ褐色シルト質粗粒砂～細粒砂。SD78周辺で検出。江戸時代の染付碗細片をを含む。層厚10～18cm。

第４層　未確認。

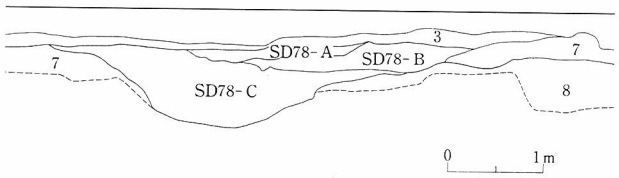
第５層　暗褐色粘土質シルト。調査地北端のみ残存。古墳時代後期の遺物包含層。層厚34cm。

第６層　黒褐色シルト質細粒砂。調査地南側に分布。弥生時代後期末から庄内期の遺物包含層。層厚10～21cm。

第７層　黒褐色シルト。遺構のベース面を形成。地山層。この層上面のレベルは北と南が高く、中央部が低い。

第８層　暗黄褐色シルト。地山層。段丘上に被さる層である。

以上の土層の色質は肉眼観察によった。



A．オリーブ褐色粗粒砂～細粒砂　B．灰色中粒砂
C．黒褐色砂混粘土

第39図　SD78断面図

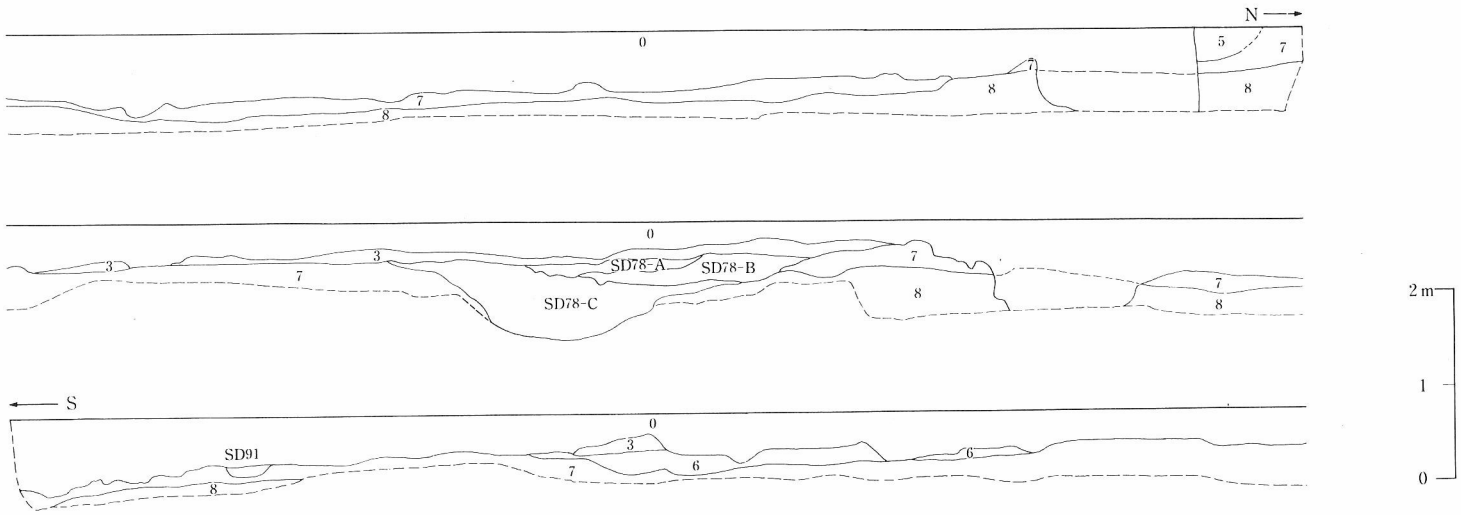
2．遺構

第２次調査で検出した遺構は、溝３条、土壙１基、ピット２個である。遺構内から土器が出土したSD78、SK30以外は、厳密に言えば古墳時代か弥生時代のいずれに属するものかわからないが、同一面上で検出したこと、第１次調査でSD78より南側では古墳時代の遺構を検出していないこと、などから弥生時代後期末から庄内期の遺構と推定される。なお遺構番号は第１次調査からの通し番号とした。

SD78　幅4.4m、深さ0.82mを測る。東から西へ流れていたものと思われる。溝内は上から、A．オリーブ褐色粗粒砂～細粒砂、B．灰色中粒砂、C．黒褐色砂混粘土の３層に分れていた。第１次調査の成果を斟酌すれば、このうちA層とB層は、弥生時代後期末に掘削されたSD78が凹地として残っていたところに奈良時代頃堆積した層と考えられる。A層、B層共にほとんど遺物は含まれておらず、わずかにA層から弥生土器の高杯片（６）が出土したのみであった。一方、C層からは弥生時代後期末の一括土器が出土した。庄内期の土器は僅少である。

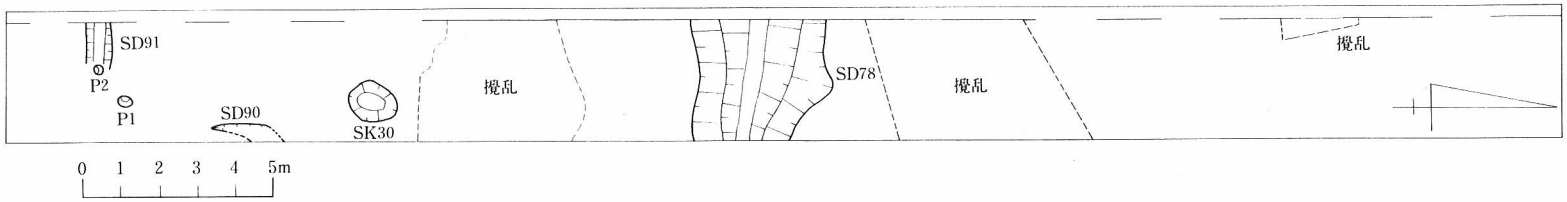
SK30　長径1.4m、短径1.1m、深さ0.19mを測り、楕円形を呈する。土壙の断面は浅い皿形である。埋土はSD78のC層と同じ。後期末の弥生土器の甕片が１点出土した。

その他の遺構　SD90は幅20cm、深さ６cmの規模である。SD91は幅50cm、深さ12cmの規模で、西流していた。堆積土はSD78のC層と同じく黒褐色砂混粘土。ピット状の遺構を２ケ所確認した。P１は径30×39cm、深さ13cm、P２は径27×30cm、深さ11cmを測る。



0．撹乱層
3．オリーブ褐色シルト質粗粒砂～細粒砂
5．暗褐色粘土質シルト
6．黒褐色シルト質細粒砂
7．黒褐色シルト
8．暗黄色シルト

第40図　土層断面図



第41図　遺構配置図

３．出土遺物

第２次調査では、遺物包含層が工事による攪乱を受けてほとんど消失していた。攪乱層内から須恵器杯（50）、白磁碗（51）が出土したほかは、すべて弥生土器がSD78から出土した。これは弥生時代後期末における一括性の高い土器群といえる。この節では立会調査出土土器を含めて器種毎に説明を加えることにしたい。なお立会調査出土遺物は包含層から出土したものであり、古墳時代前期以降の資料が混在している。説明文中、他地域産と断らないかぎり、生駒西麓の胎土である。

壺（１～５）

出土量は多くないが、タイプの異なるものが出土している。１は細頸壺の口頸部である。口縁部は内弯し、端部は丸みをもって終わる。外面にはヘラミガキ（４本/cm）を密に施し、内面はナデ調整。粘土紐の継ぎ目には指頭圧痕が明瞭に認められる。他地域産。

２は二重口縁壺の頸部である。頸部端に接合痕を残すため、二重口縁壺と判断した。内外面ともかなり摩滅している。内面にヘラ状のナデがわずかに認められる。他地域産である。

３は二重口縁壺の口縁部である。口縁部に円形浮文を貼り付けている。橙色を呈し、他地域からの搬入品である。

４はミニチュアの直口壺、５は広口壺の口縁部である。

高杯（６～13）

２タイプに分類できる。水平方向にのびる杯部から大きく外反する口縁部をもつ高杯ａ（６・７）と、椀形の杯部をもつ高杯ｂ（８）に分けられる。高杯ａ（６）は口縁部を波状文で加飾する。７に比べて口縁部が浅い。

７はａ類に属する。口縁部外面に細かなヘラミガキ（５本/cm）を施すが、内面および脚部には認められず、ナデが施される。杯部の腰に段をもち、杯底部に明瞭な接合痕を残す。

８はｂ類である。小型の高杯で脚部外面に粗いヘラミガキを施す。

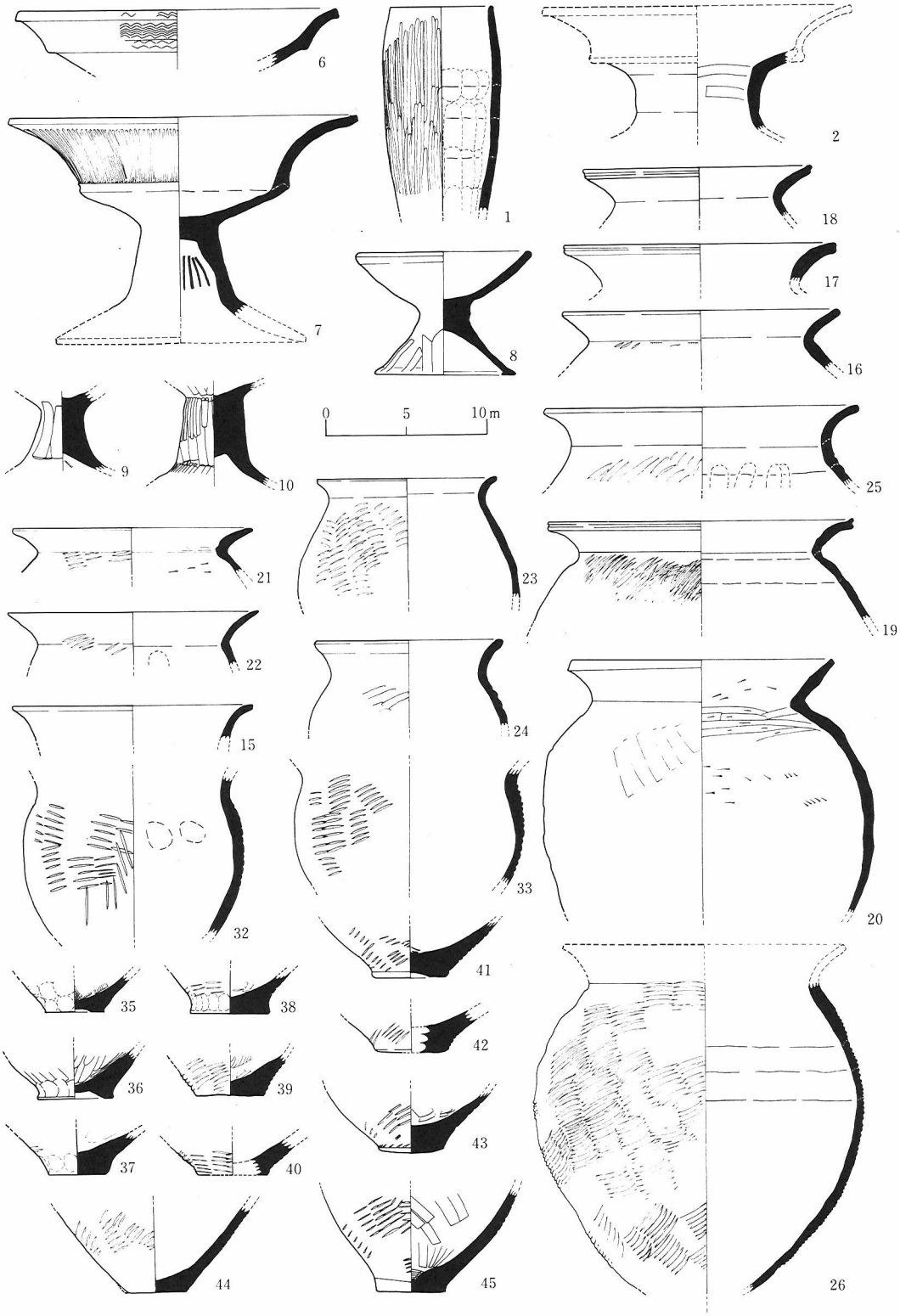
脚部のみの資料が９～13である。すべて生駒西麓産である。外面にミガキ調整するもの、ハケメ調整のもの、ナデ調整のものがある。

器台（14）

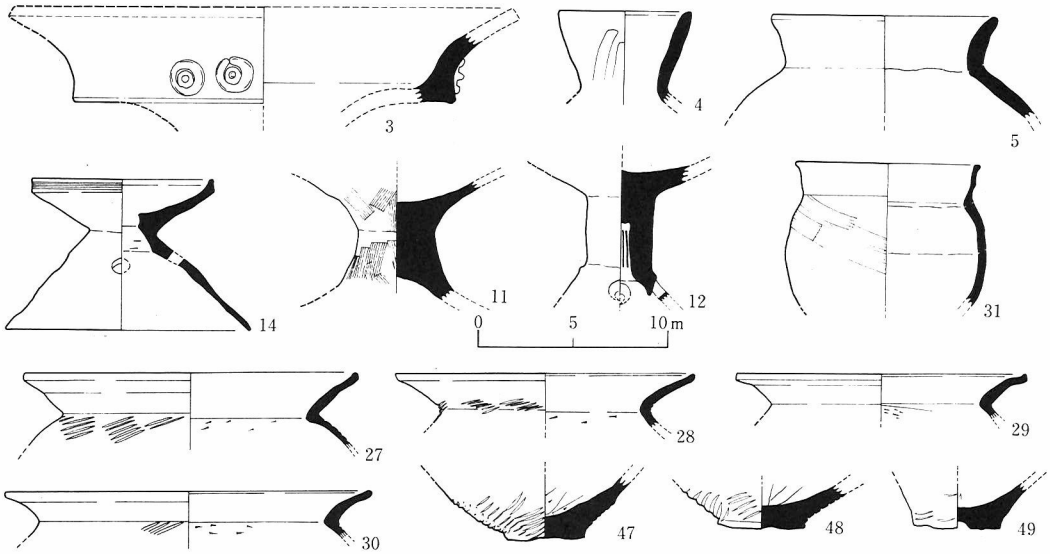
14は小型の器台である。受部の端部は立ち上がりをみせ、脚部は直線的に広がる。脚部に４ケ所の円孔を穿つ。

甕（15～49）

大きく４タイプに分類できた。「く」の字形に外反する口縁部をもつもののうち、端部に面をもつものをａ（19・20）、丸く終わるものをｂ（25）とした。SD78出土土器中には、甕ｂのうち内面をケズリ調整するものは21のみであった。甕ｃ（27～30）は「く」の字形に鋭く外反する口縁部を持つもので、口縁端部を上方につまみ上げている。立会調査で出土した。甕ｄ(31)は球形の体部に短く外反する口縁部がつくもので、６世紀代の資料であろう。今回甕底部としたなかには、甕下半と同形態の鉢が含まれていると思われる。



第42図　SD78内出土土器実測図



第43図　立会調査出土土器実測図

甕aに属するものは、16～20を数える。これらは、体部外面の成形・調整法によって、(1)タタキメを施すもの、(2)タタキメを施した後、ていねいにナデで消去するものに分けられる。(1)はさらにイ．口縁端部をナデることで面をつくり出しているもの、ロ．口縁端部が面をなし、端部外面に1条の沈線が付けられているものに細分できる。したがってa1―イ…15・16、a1―ロ…17～19、a2…20になる。19は、頸部の屈曲度が大きい。口縁端部にていねいなナデが施されるため、上方に拡張しており、明瞭に面をなす。体部外面のタタキメは3本/cmと密ではないが、タタキメ痕そのものは2～3㎜で細かい。口縁部内外面にはていねいなヨコ方向のナデ、体部内面には緻密なナナメ方向のナデが施されている。色調は明褐色（7.5YR5/6）を呈し、胎土は密で、1㎜大の長石、石英、雲母、くさり礫を少量含む。他地域産である。焼成は良好。20はタタキメのない甕である。器表面は指頭圧痕のため凹凸が激しい。口縁部から体部にかけてヘラ状工具によるナデが施されており、タタキメを消去する。口縁部内面はケズリ調整ののちナデ、頸部内面は逆時計回りのケズリ調整、体部内面はケズリ調整ののちナデを施す。角閃石を含み、生駒西麓産の土器である。焼成は普通。

甕bに属するのは、21～25である。大きく2種に分けられる。(1)21・22は口縁部の器壁が厚く、頸部の屈曲度が大きい。それに対して、(2)23～25はやや器壁が厚めで、頸部から口縁部へなだらかに外弯している。21は頸部内面にケズリ調整を施す。口縁部内面にわずかにハケメ調整の痕跡が認められる。22はにぶい黄褐色を呈しているが、胎土中に角閃石を少量含んでいる。23は胴部中位から下半にかけてふくらみをもつと思われる体部に、ごく短く外弯する口縁部をもつものである。24は23と共通して口縁部を強くナデ調整するために、端部が丸みをもつ。25は口縁部と頸部との接合面を明瞭に残しており、指頭圧痕がそのまま残存している。頸部外面のタタキメは粗いが、口縁部内外面のナデ調整は強いために口縁部が大きく外弯する。

26は口縁部を欠損しているため、ａ類、ｂ類いずれに該当するか不明であるが、頸部以下は残存しており、ほぼ全形を知り得る資料である。形態は、胴部下半にあまりふくらみをもたず、胴部上半に最大径をもつもので、突出気味の平底が付くと思われる。頸部から胴部中位までの外面にはヨコ方向のタタキメ（３本/cm、幅２mm）が施されている。胴部下半には同じタタキ原体による成形が施されており、分割成形技法による粘土の継ぎ目も認められないところから、製作当初から１個体分の連続成形が行われたものとみられる。内面は摩滅がはなはだしいが、ナデ調整が施されている。色調は明褐色（7.5YR5/8）を呈する。胎土は１～２mm大の長石を中量に含み、１mm大の雲母を少量、１mm大の角閃石を微量に含む。焼成は良好である。

27～30は甕ｃに属する。甕ｃは所謂庄内甕の範疇に入るものである。いずれも口縁部内外面ともにナデ調整を行い、「く」の字形に強く外反するために、頸部内面に鋭い稜をもつ。また口縁端部を上方につまみ上げ、受け口状を呈するとともに面をなす。先端が丸く終わるものは今回出土していない。体部外面に施されるタタキメはａ類、ｂ類とくらべて中細である。その中で29は口縁部中央外面にヘラ状の圧痕がある、そのためそこで屈曲して端部まで水平にのびる。27～30とも胎土中に長石、雲母とともに角閃石が少量認められる。

31は球形の体部に短く外反する口縁部がつく甕ｄである。口縁部外面にナデ調整、体部外面にハケメ調整が認められるが、摩滅のため顕著ではない。長石、雲母を多量に含む胎土で、他地域産と思われる。

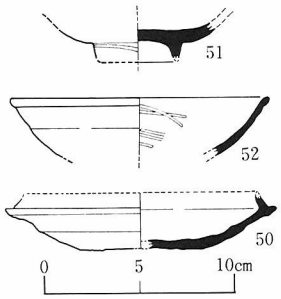
32～34は甕の体部片である。形態および外面に施されるタタキメの粗細の点から、32・33はａ類またはｂ類に、34はｃ類に接続すると考えられる。

35～49は甕の底部片である。明確な平底のものと矮小化された平底のものがある。35と36は底部周縁付近にはタタキメが施されていない。また44をみると、明らかに粘土紐１本が剥離した痕跡が認められる。これは35・36・41のようにドーナッツ状上げ底を製作する際、底部になる輪台に粘土紐を貼付する技法を用いたためであると思われる。

その他の土器（50～52）

第２次調査の攪乱層内で６世紀後半の須恵器杯(50)、中世期の白磁碗底部(51）が出土している。また立会調査の包含層から瓦器椀(52)が確認されている。

50は短く内傾する口縁部をもつ須恵器の杯である。受部は水平にのびる。体部に強いヨコナデが施されたため、稜線は鋭く突出している。52は和泉型の瓦器椀の口縁部片である。口縁部先端は丸く、その下に浅い沈線がめぐる。13世紀代に属すると思われる。本遺跡の存続時期を考える資料として重要である。



第44図　古墳時代以降の土器実測図

Ⅳ．まとめ

昭和60年度に実施された第１次調査では、弥生時代後期後半の北鳥池下層式[1]に接続する型式の甕(「Ｖ様式系甕[2]」、今回ｂ類としたもの)に庄内式土器の甕(「庄内甕」、ｃ類)がSD78、SE５の遺構内から伴って出土した。ただし、Ｖ様式系甕と庄内甕の比率は遺構により異なっており、SD78では多数のＶ様式系甕のなかに庄内甕が少量伴う状態であるのに対し、SE５はまさにその逆であった。このことから遺構の時期差を想定し、「SD78は他の遺構より先行する可能性が考えられる」とした。今回実施した第２次調査で出土した甕は、中細のタタキメが施されたｃ類の体部片が１点確認された以外はすべてａ類またはｂ類に限られていた。また壺や高杯の形態も弥生時代後期末の型式内に包括されること、出土地点がSD78の東側延長部であることを考え合わせると、第１次調査の成果と矛盾せず、むしろ想定を補強する資料になると思われる。

一方、参考資料ながら立会調査出土土器群は極めて興味深いデータを呈示している。口縁端部を受け口状に上方へつまみ上げた庄内甕(ｃ類)と、杯底部に貫通孔をもつ小型器台など庄内期の前半(上田町Ⅱ式)の要素をもつ土器群に、矮小化しながらも平底を保持する底部が包含層内で伴出していることである。このことはSD78の流路付近にＶ様式系甕と庄内甕が共伴する遺構の存在の可能性を暗示している。

西の口遺跡の周辺には、Ｖ様式系甕と庄内甕が伴出する遺跡が分布している。東大阪市域では、馬場川遺跡・池島遺跡、八尾市域[3]では、楽音寺遺跡・水越遺跡が遺構内で伴出している。包含層内から出ている遺跡を含めると、北鳥池遺跡・鬼塚遺跡(東大阪市)、大竹遺跡・太田川遺跡（八尾市）を数えることができる。これらの遺跡は西の口遺跡を中心として、約1.5kmの円内に収まっている(第２図参照のこと)。集落間の交流を考えるうえで興味深く思われる。

今回の第２次調査で検出した遺構は、出土遺物と埋土から概ね弥生時代後期末に属するものと考えられる。従って弥生時代の集落は調査地の東方へ広がるものと推定される。本遺跡の調査の進展によって、より多くの歴史的事実が明らかにされることを願ってやまない。

(1)北鳥池下層式土器については、芋本隆裕「北鳥池遺跡出土土器の再整理」(『東大阪市遺跡保護調査会年報1979年度』、1980年）を参照のこと。

(2)「Ｖ様式系甕」「庄内甕」の定義については、嶋村友子「河内における庄内式の甕型土器」(『古代』第82号、1986年）に準拠した。

(3)八尾市域の伴出例については、米田敏幸氏（八尾市教育委員会）にご教示いただいた。厚くお礼申し上げます。

［参考文献］『八尾市文化財紀要２』『同左　３』八尾市教育委員会文化財室、1986・88年。

<謝辞>本概報の作成にあたり、米田敏幸氏、森下（旧姓嶋村）友子氏（香川県埋蔵文化財センター）には、庄内式土器研究会を通じてご指導ご教示いただいています。記して厚くお礼申し上げます。発掘調査は、八木亮、萩原鉄也が補助した。遺物整理・概報作成では、渡辺政子(製図)、八木亮、松井直美、牧上亜佐子(以上実測)、中嶋清香(復元・版下作成)、大棒邦子(接合)が補助した。調査・整理にご協力いただいた多くの方々に深く感謝いたします。

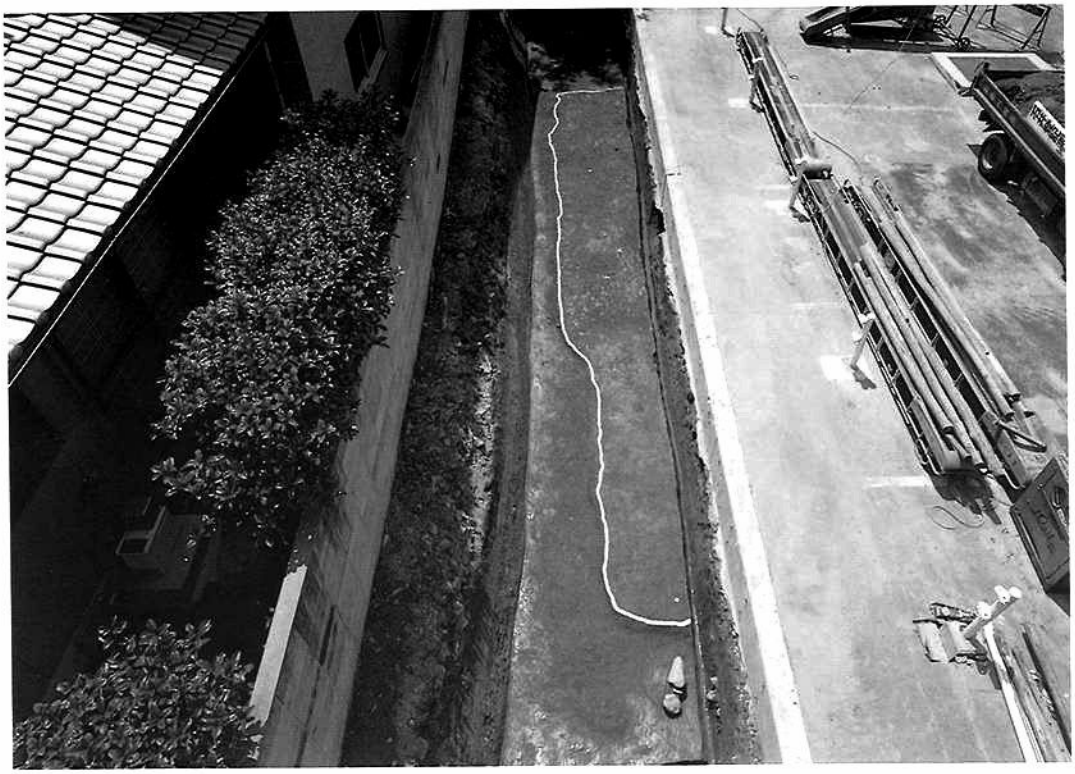
図　　版

図版1　西ノ辻遺跡　遺構

1．東壁断面

2．溝1、落ち込み1

図版2　西ノ辻遺跡　遺構



1．中世遺構全景

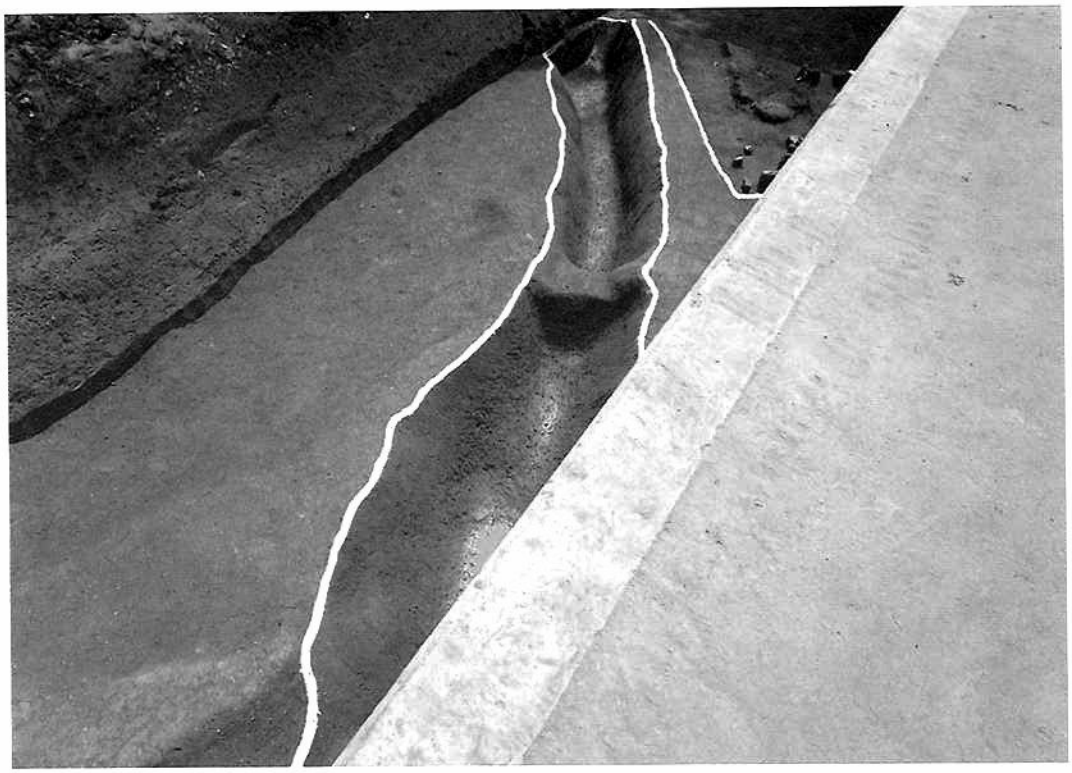
2．弥生時代遺構全景

図版3　西ノ辻遺跡　遺構

1．溝2、3

2．溝2

図版4　西ノ辻遺跡　遺構



1．溝3

2．溝3内陸橋

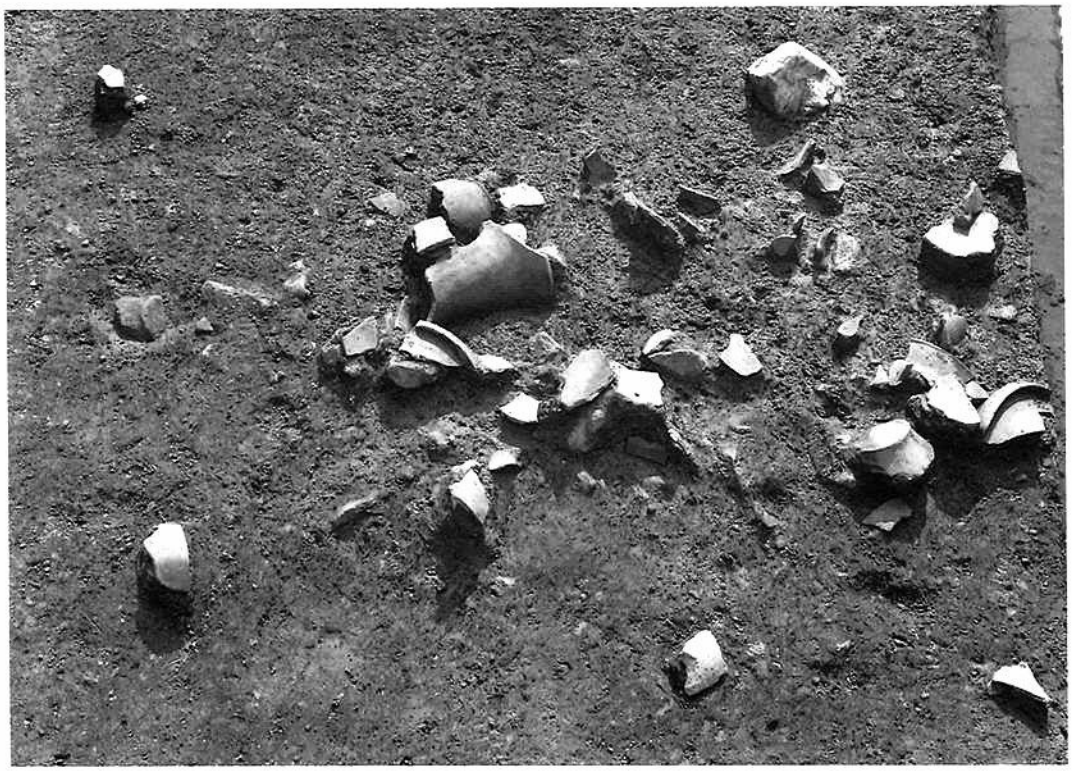
図版5　西ノ辻遺跡　遺構

1．木棺墓

2．木棺墓

図版6　西ノ辻遺跡　遺構

1．溝2内遺物出土状況



2．溝2内遺物出土状況

4

5

56

12

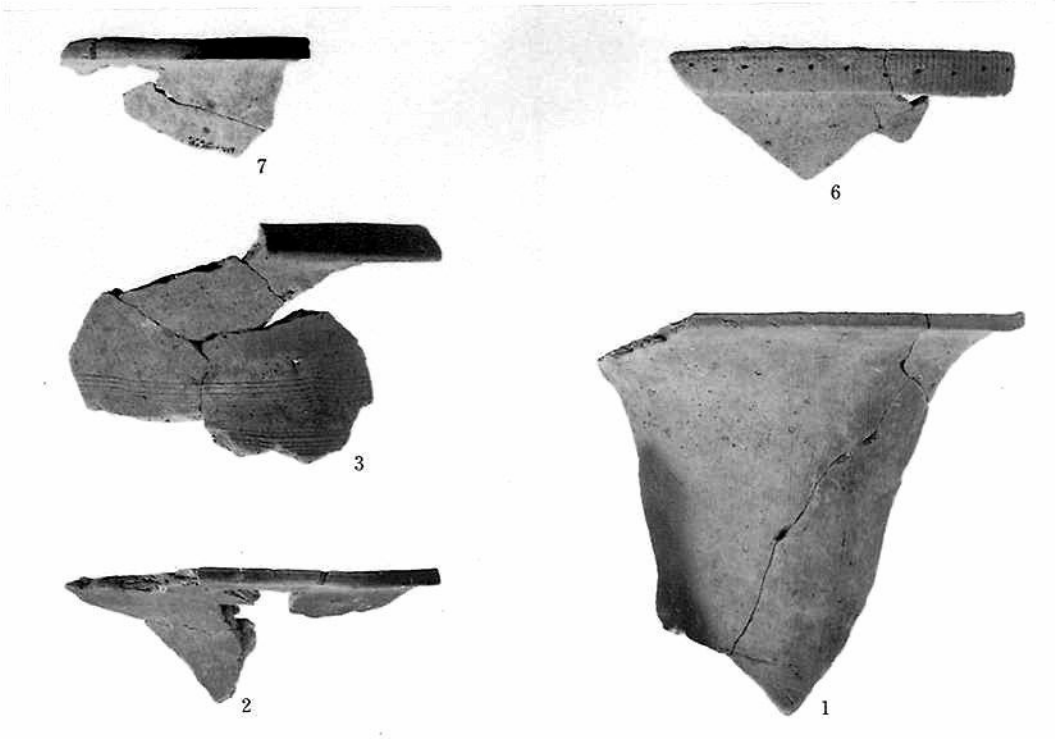
57

59

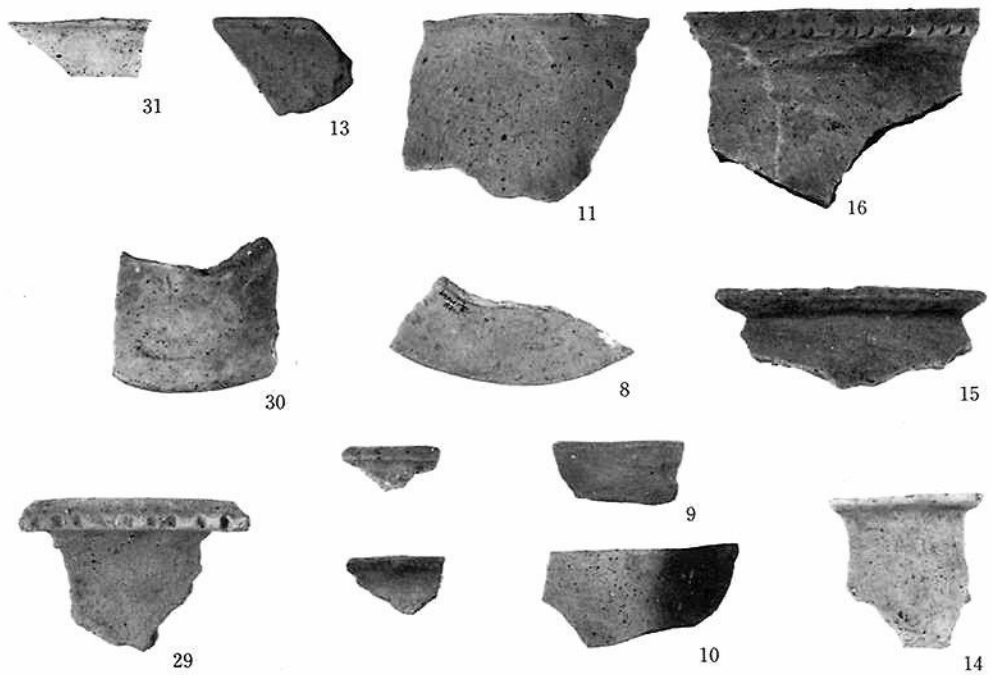
60

61

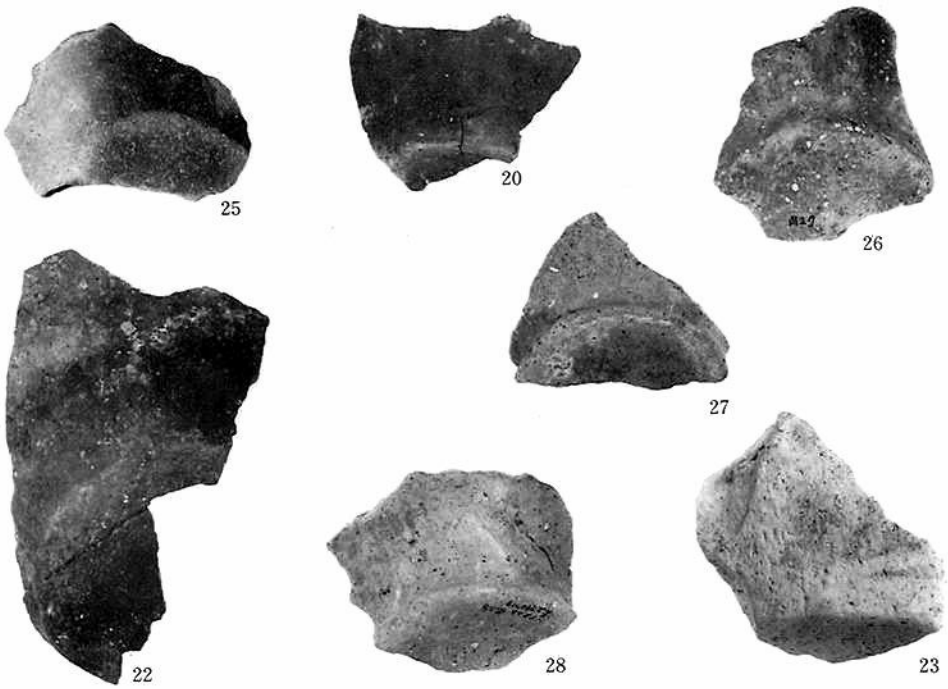
溝２、包含層出土遺物 弥生土器、蛸壺、石庖丁、土錘、銭貨



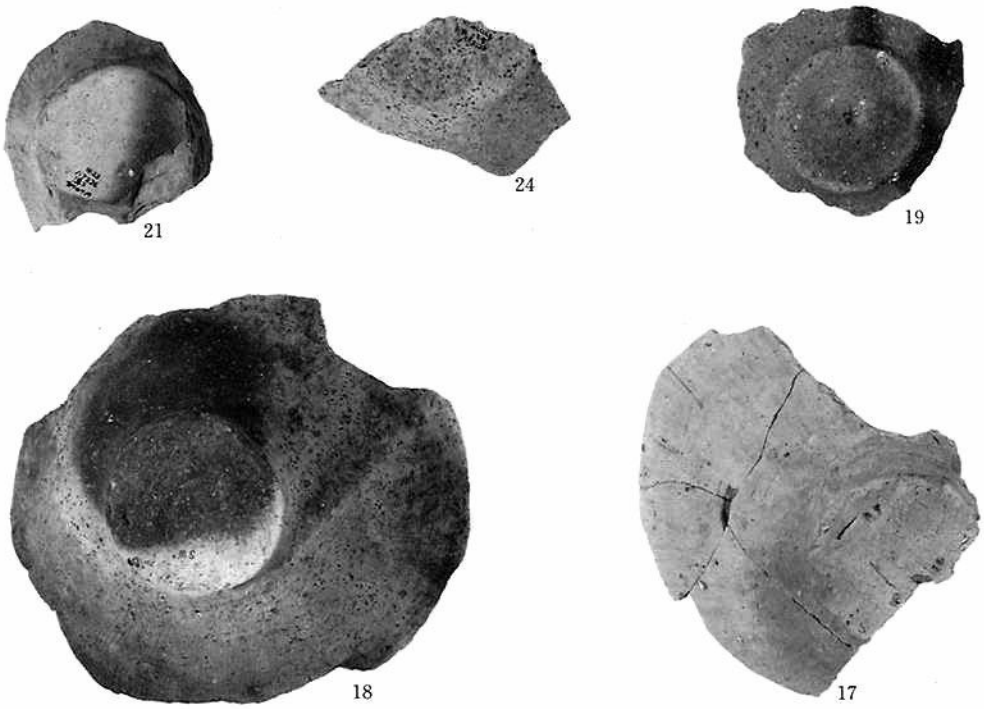
1．溝2出土土器 弥生土器



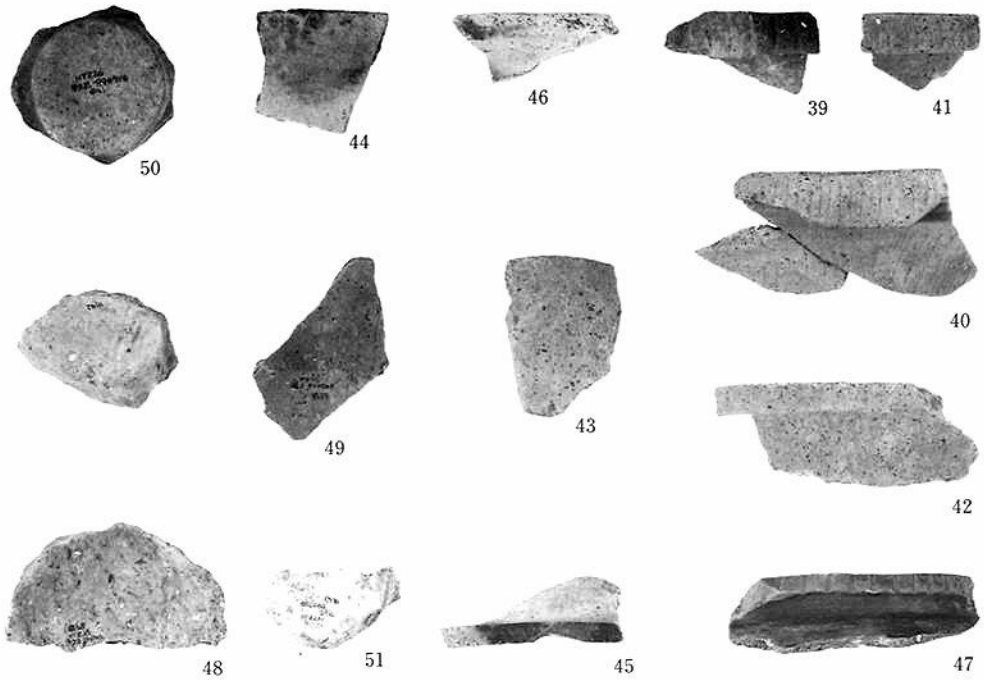
2．溝2・3、木棺墓出土土器 弥生土器



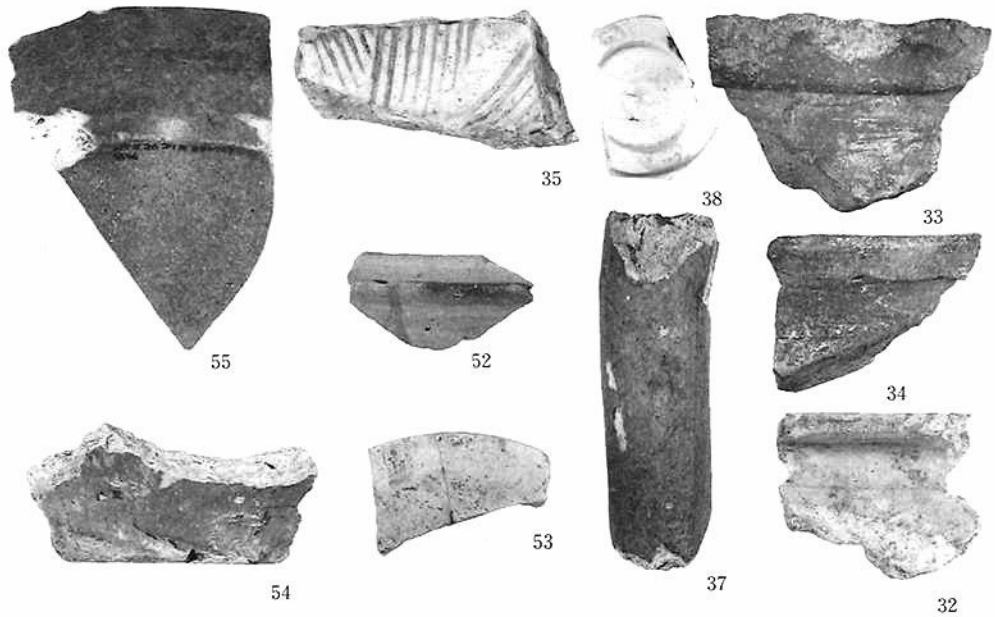
1．溝2出土土器 弥生土器



2．溝2出土土器 弥生土器

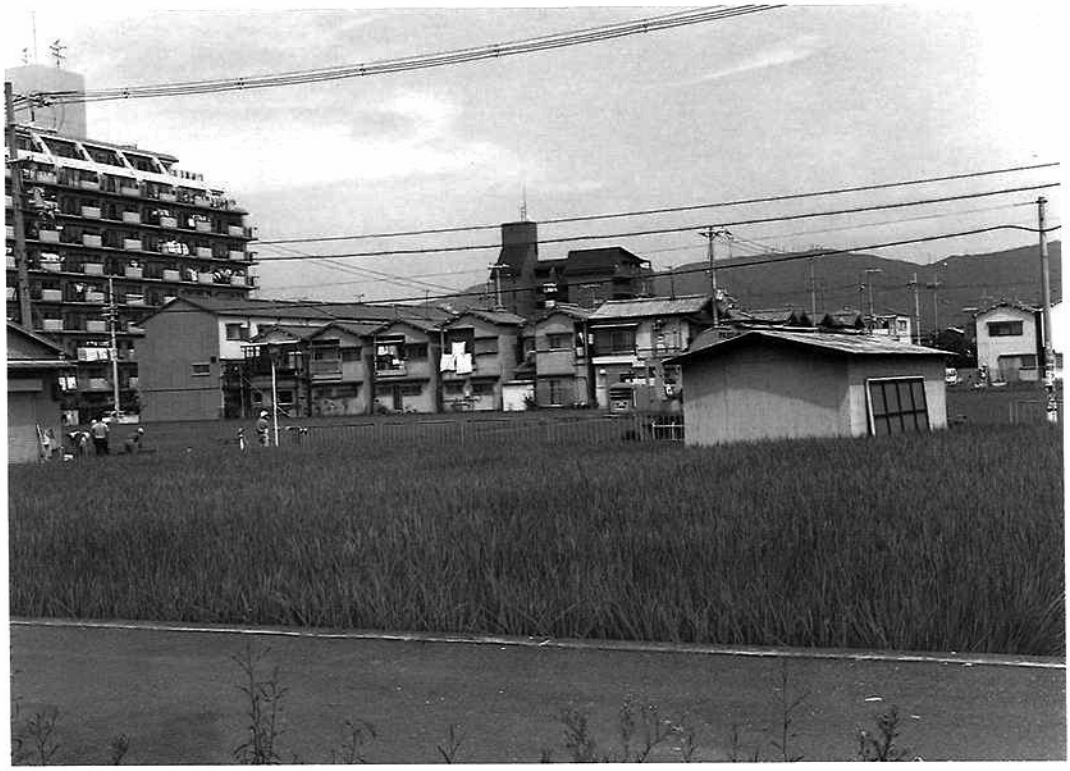


1．包含層出土土器 弥生土器



2．落ち込み1、溝1、包含層出土土器 須恵器、陶器、輸入磁器、土師器、瓦器

図版11　瓜生堂遺跡　遺構

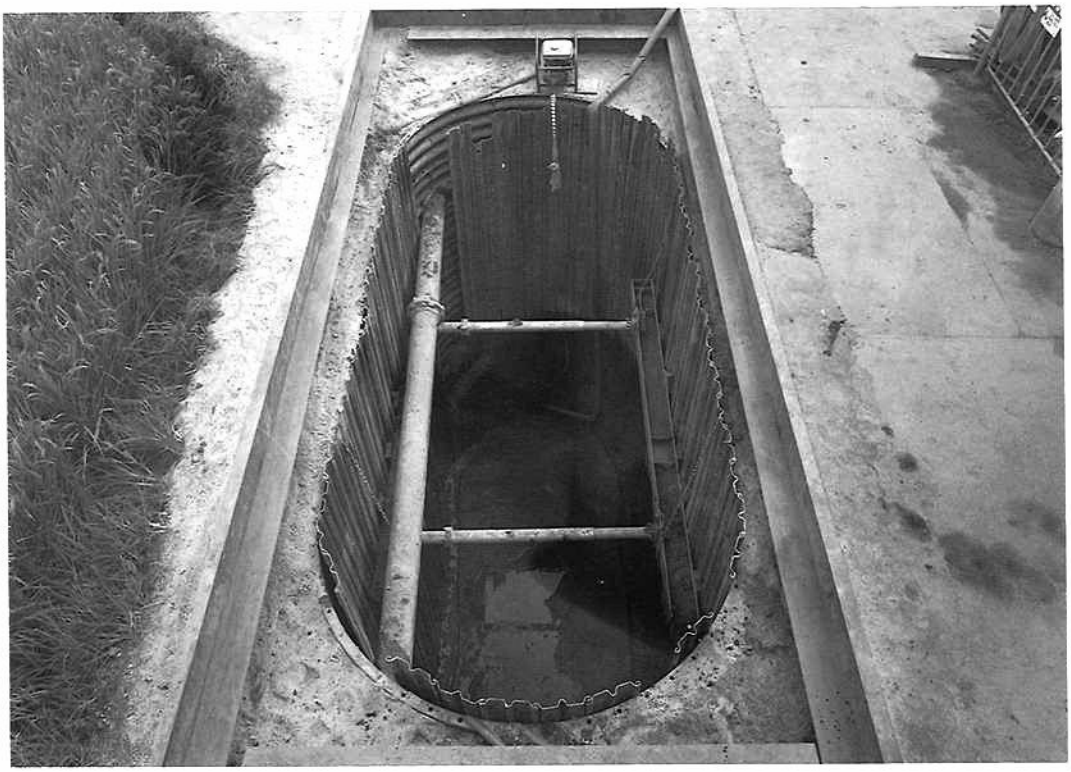


1．37次調査地点（西より）

2．A地区ライナープレート設置風景

図版12　瓜生堂遺跡　遺構

1．A地区作業風景



2．A地区完掘状況（北より）

1．B地区南北断面

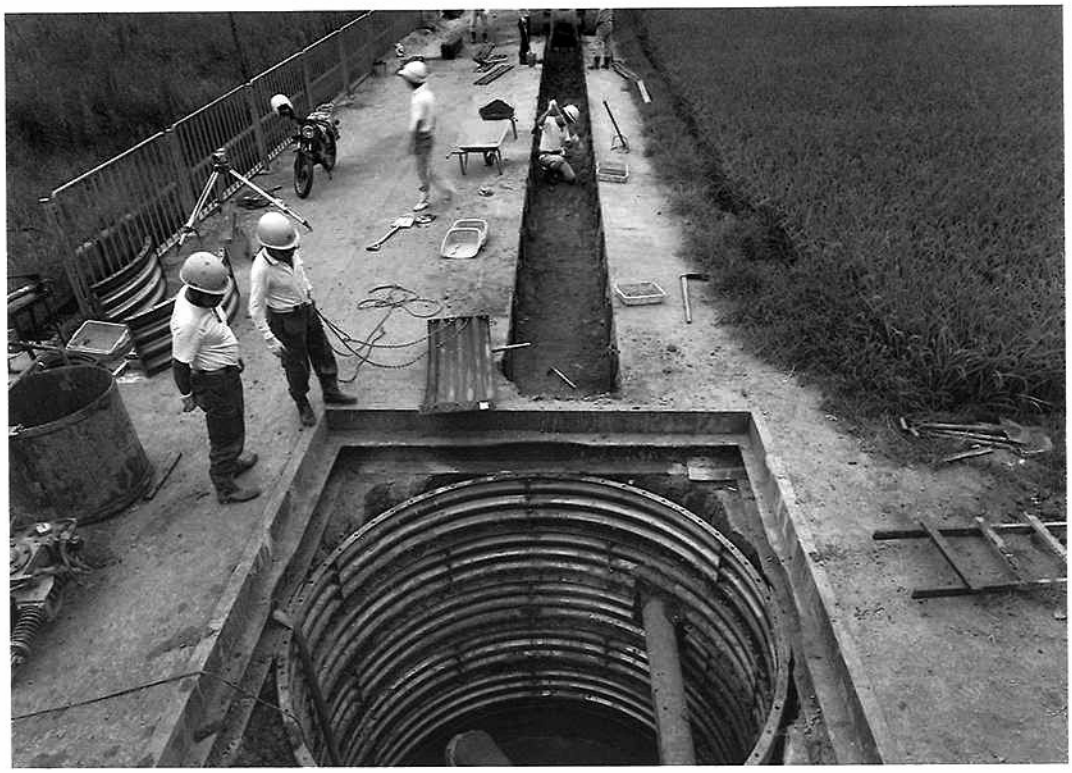
2．B地区完掘状況

図版14　巨摩廃寺遺跡　遺構

1．第５次調査地点（南より）

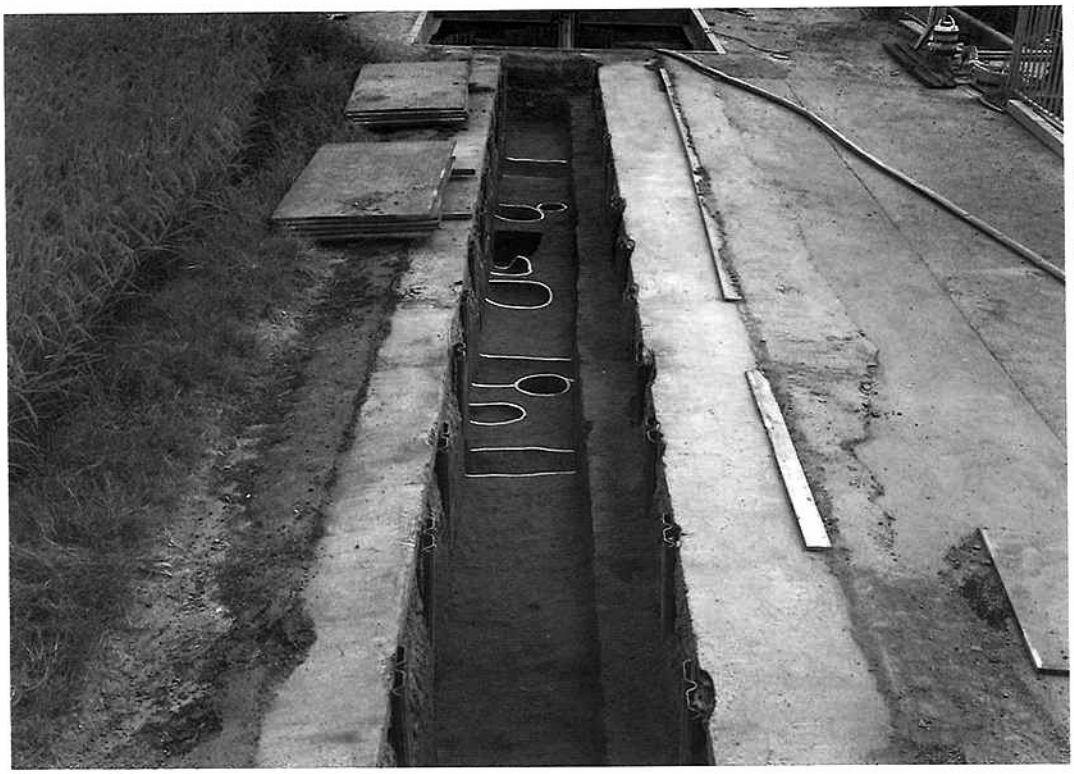
2．Ａ地区遺構検出状況

図版15　巨摩廃寺遺跡　遺構



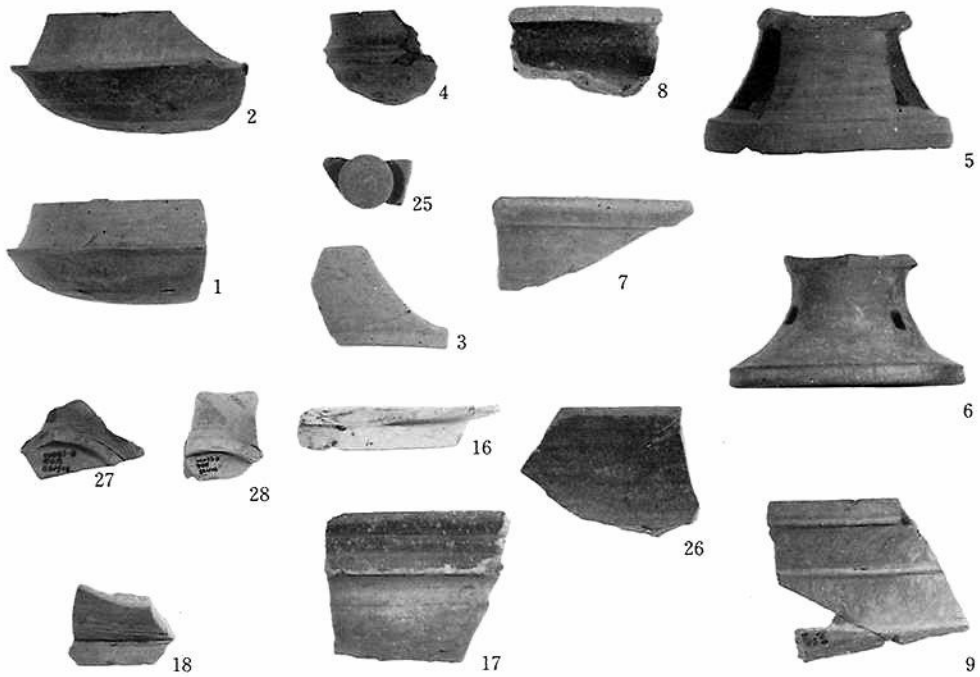
1．B地区作業風景

2．B地区南北断面

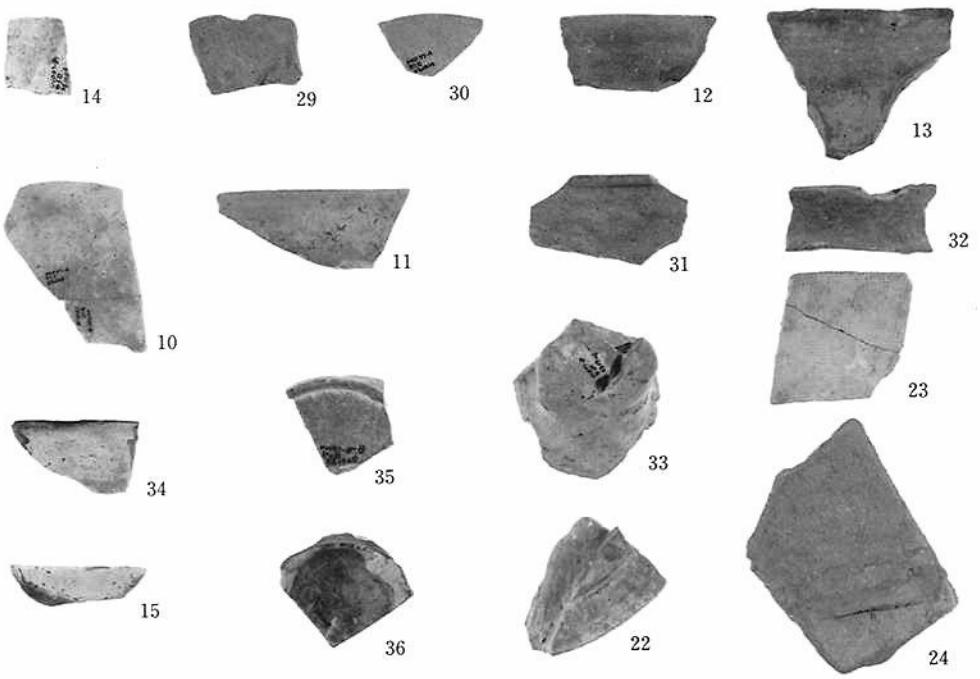


1．B地区遺構検出状況（北より）

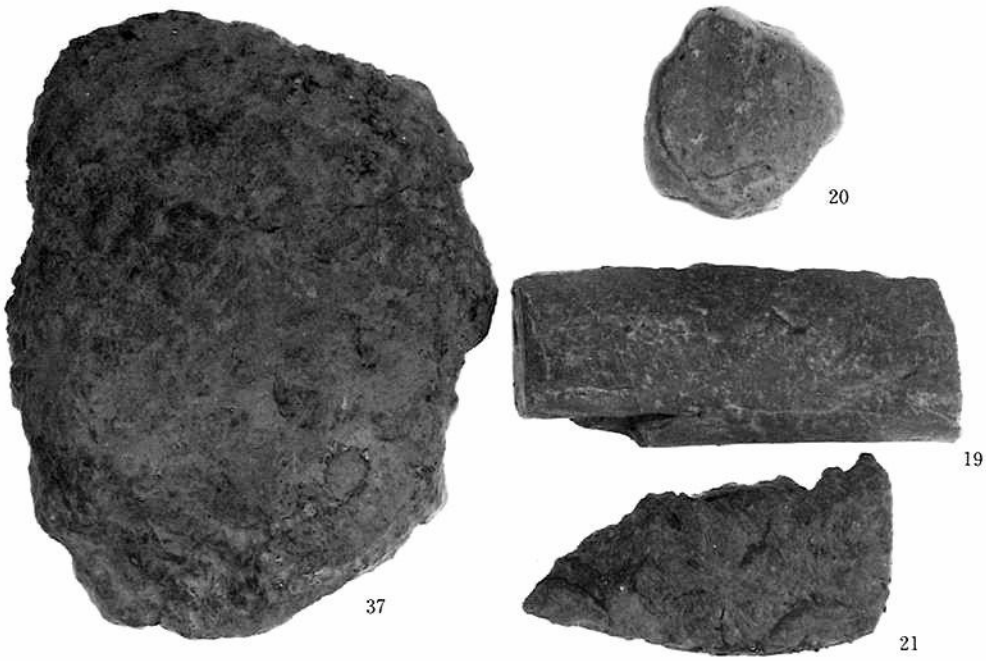
2．B地区井戸2立ち割り状況（北より）



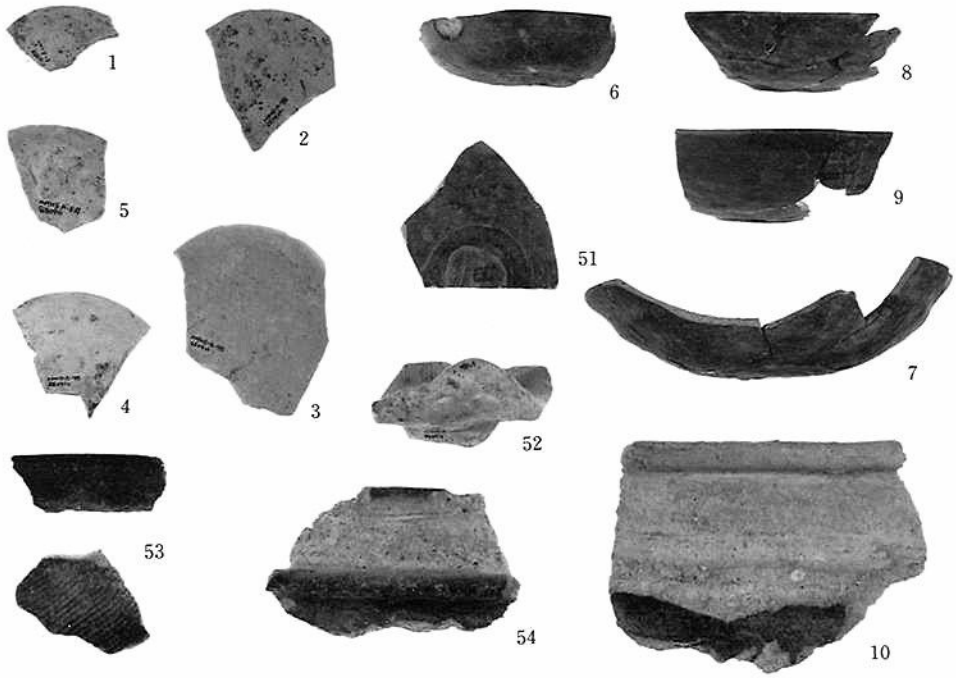
1．A・B地区出土遺物



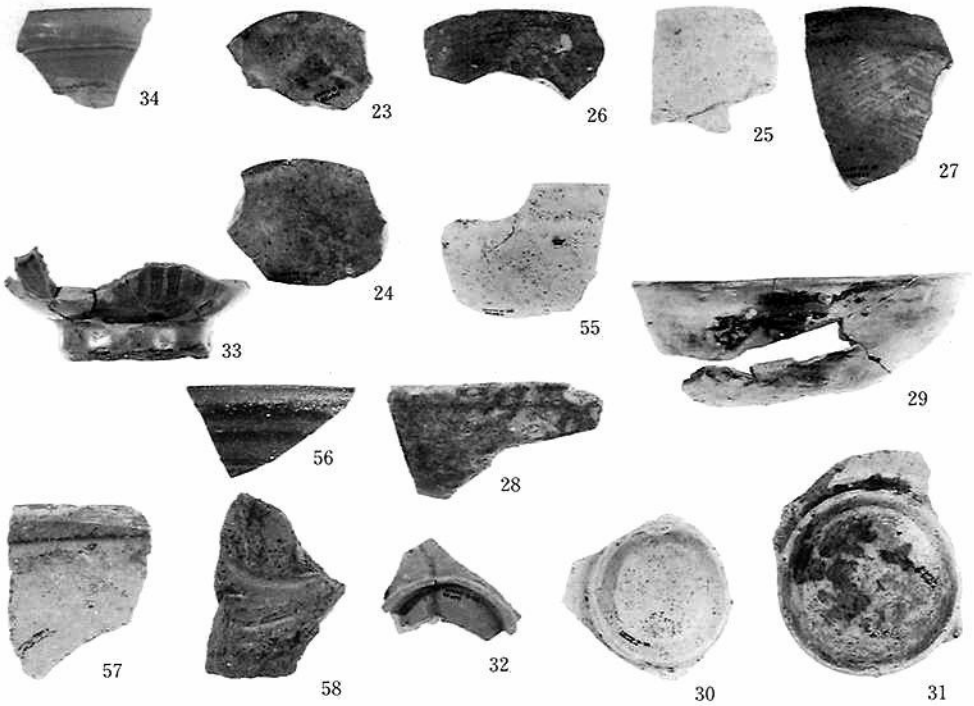
2．A・B地区出土遺物



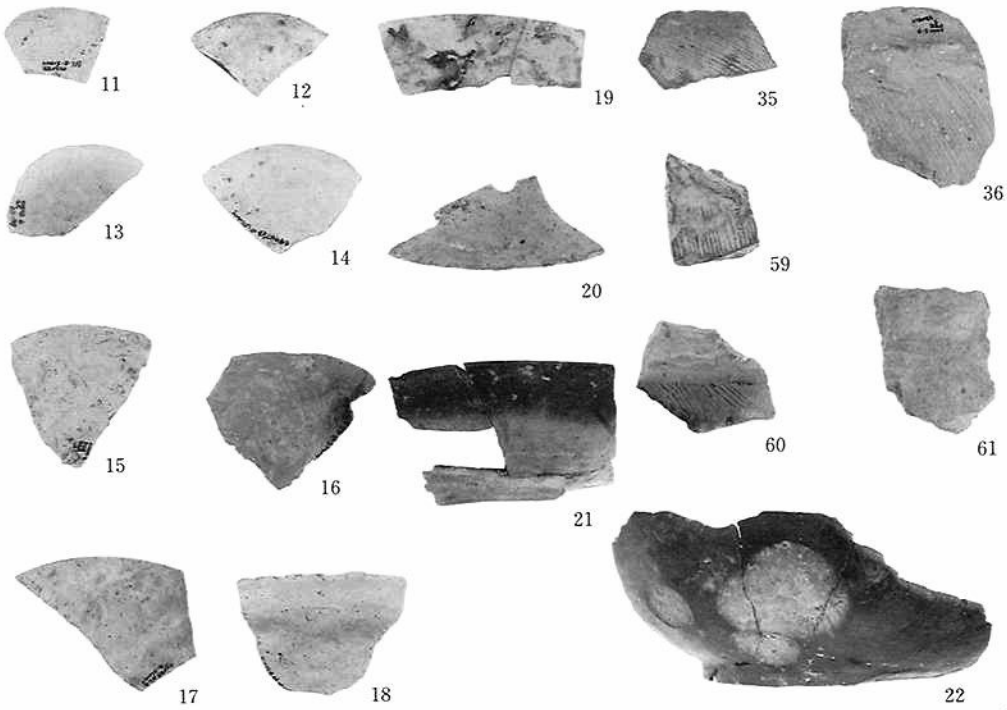
1．瓜生堂遺跡Ｂ地区出土遺物



2．巨摩廃寺遺跡Ａ地区出土遺物

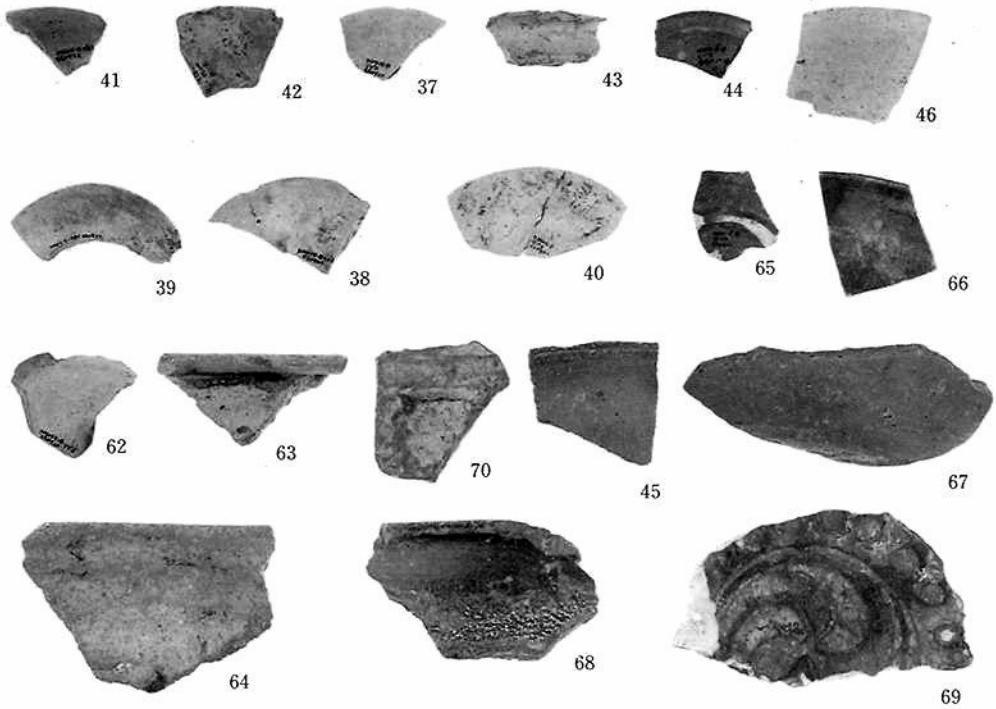


1．B地区出土遺物



2．B地区出土遺物

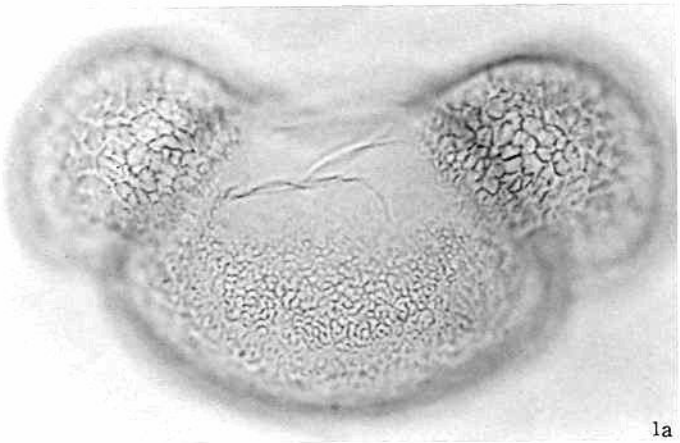
図版20　巨摩廃寺遺跡　遺構内出土遺物

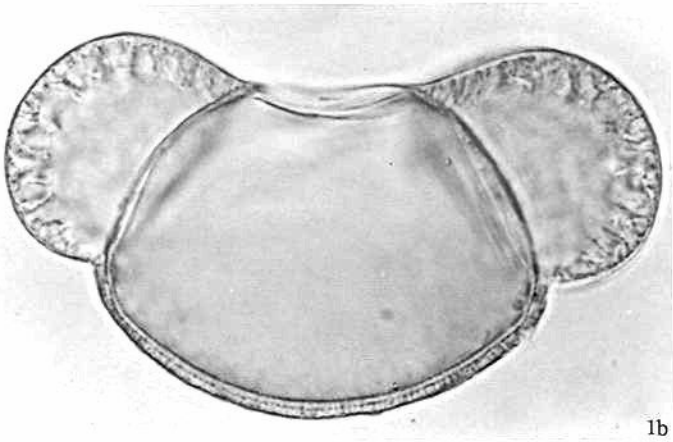


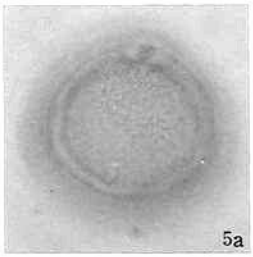
1．遺構内出土遺物

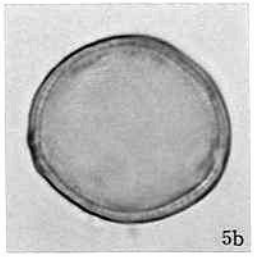
2．井戸2井戸枠（47～50）

図版21　瓜生堂遺跡　A地区花粉化石





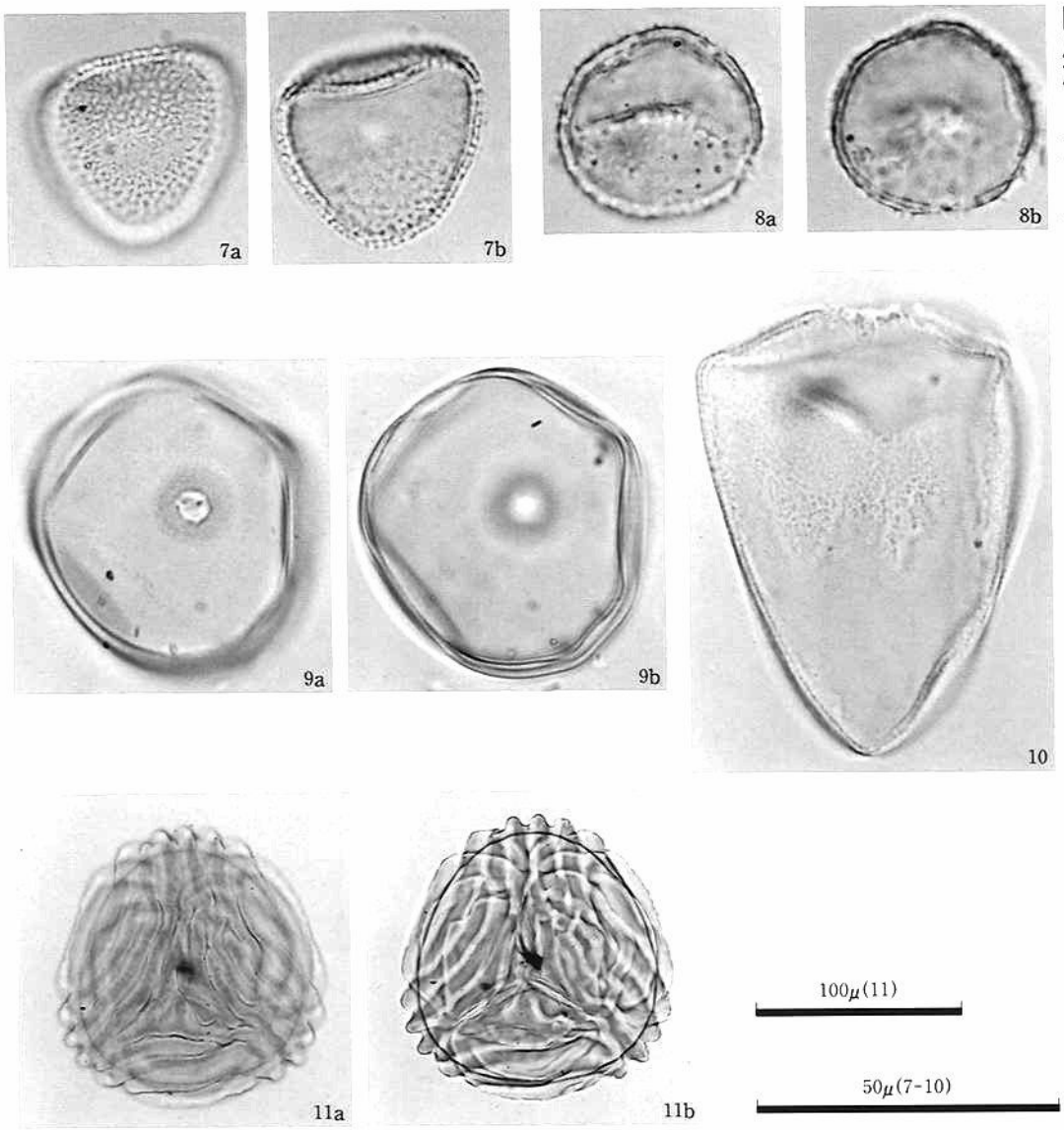




50μ

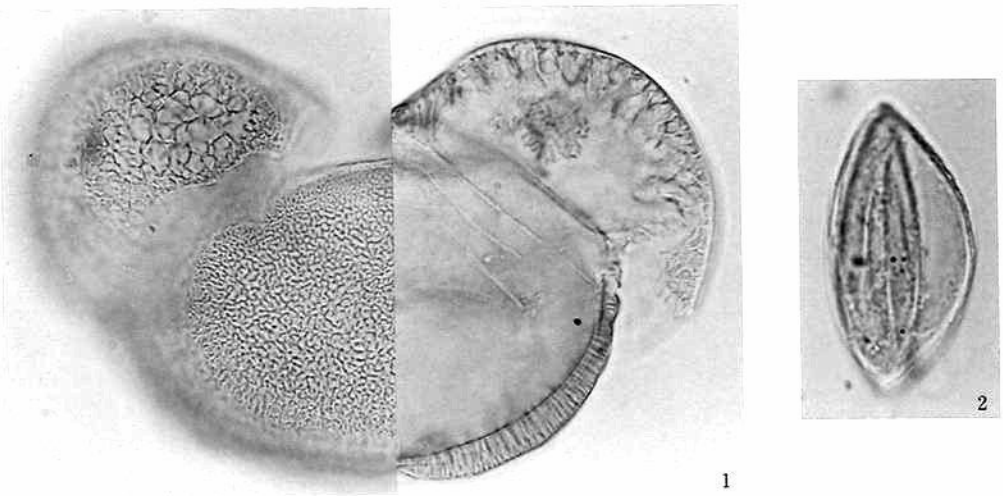
1a・b　マツ属（試料２）
2a・b　コウヤマキ属（試料６）
3a・b　コナラ亜属（試料６）
4a・b　アカガシ亜属（試料６）
5a・b　エノキ属-ムクノキ属（試料６）
6a・b　トチノキ属（試料６）

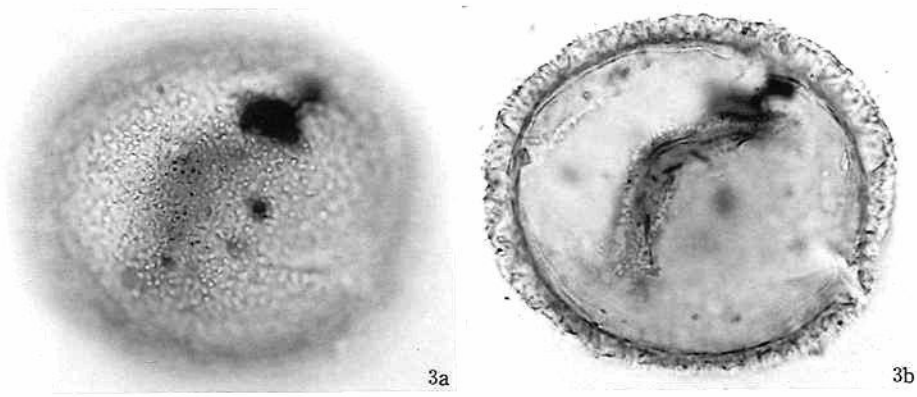
図版22　瓜生堂遺跡　A地区花粉化石

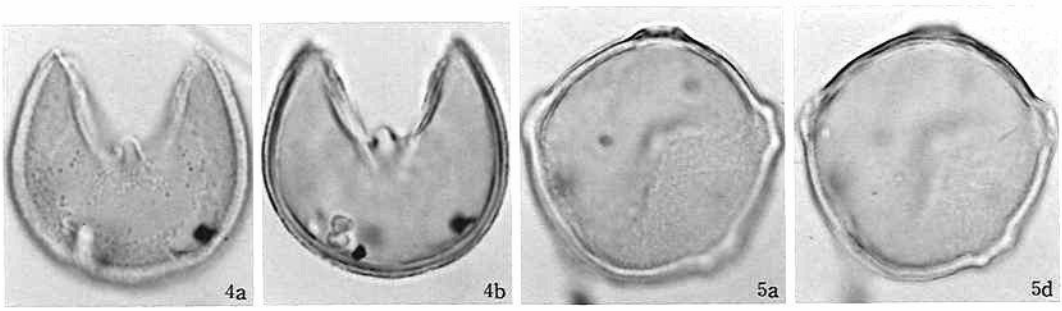


7a・b　ガマ属（試料２）
8a・b　オモダカ属（試料２）
9a・b　イネ科（試料２）
10　カヤツリグサ科（試料２）
11a・b　ミズワラビ属

図版23　巨磨廃寺遺跡　A地区花粉化石



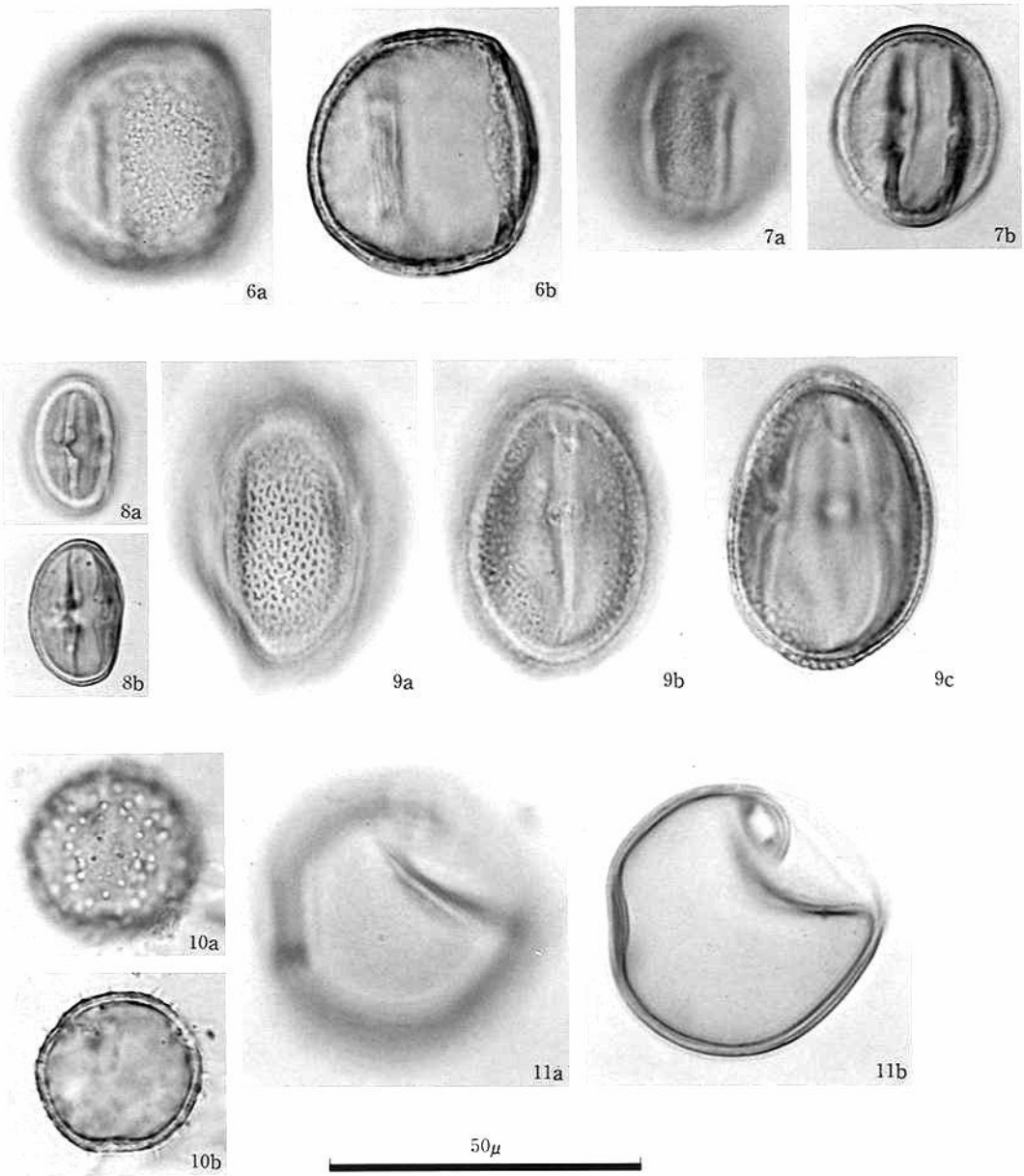




50μ(1, 3)　　50μ(2, 4-5)

1　モミ属（試料６）
2　イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科（試料６）
3a・b　ツガ属（試料６）
4a・b　スギ属（試料６）
5a・b　クマシデ属-アサダ属（試料６）

図版24　巨摩廃寺遺跡　A地区花粉化石



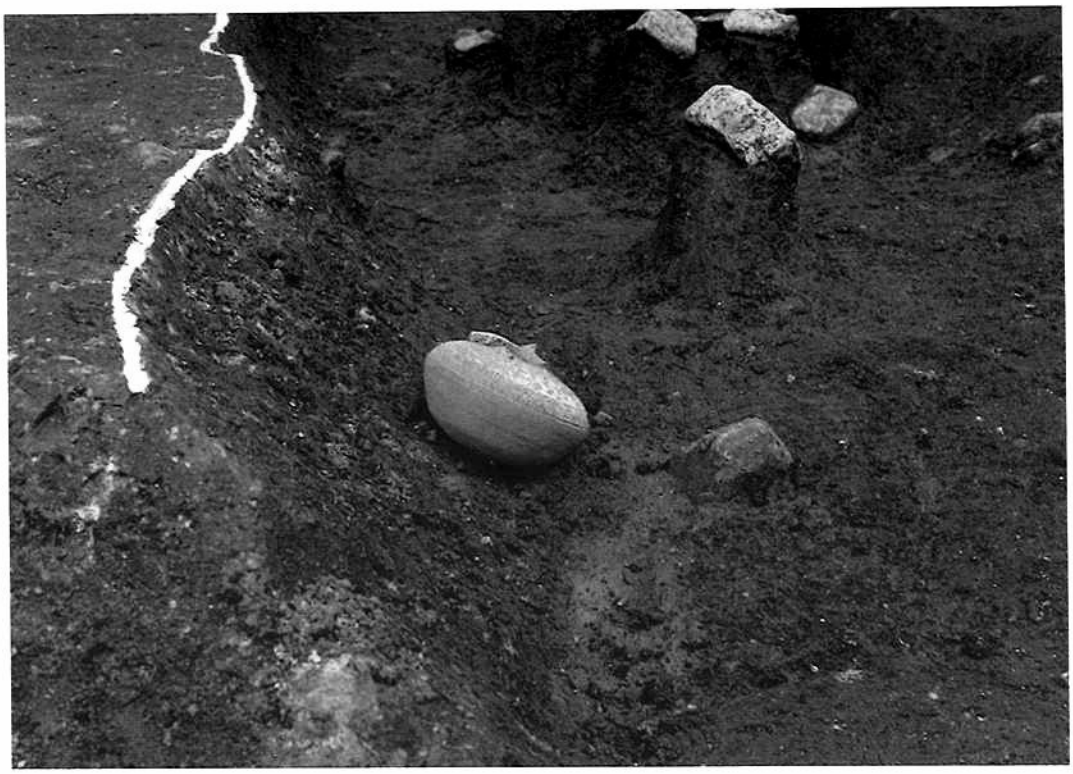
6a・b　コナラ亜属（試料６）
7a・b　アカガシ亜属（試料６）
8a・b　クリ属-シイノキ属（試料６）
9a・b・c　ノブドウ属（試料６）
10a・b　オモダカ属（試料６）
11a・b　イネ科（試料６）

1．調査前の状況

2．中世期の遺構検出状況

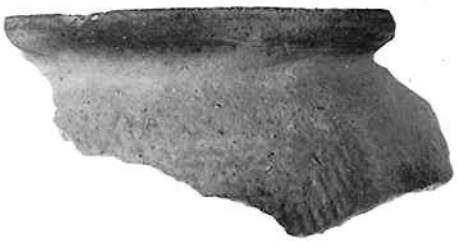
1．柱穴群掘削前の状況

2．柱穴群検出状況



1．SD9内瓸出土状況

6

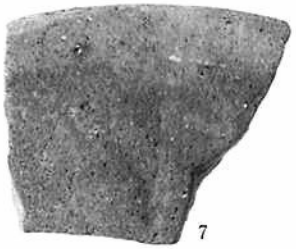


14

12

16

2．須恵器 瓸・壺(胴部)、土師器 甕(くの字状のタタキメ)、弥生土器 甕


7

8

13

17

15

1．黒色土器椀、土師器杯・高杯・甕

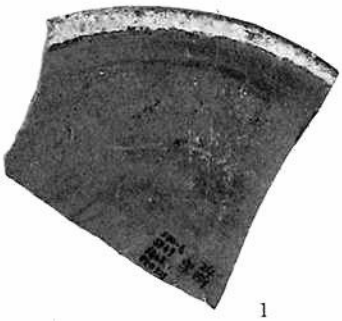
9

10

11

4

3

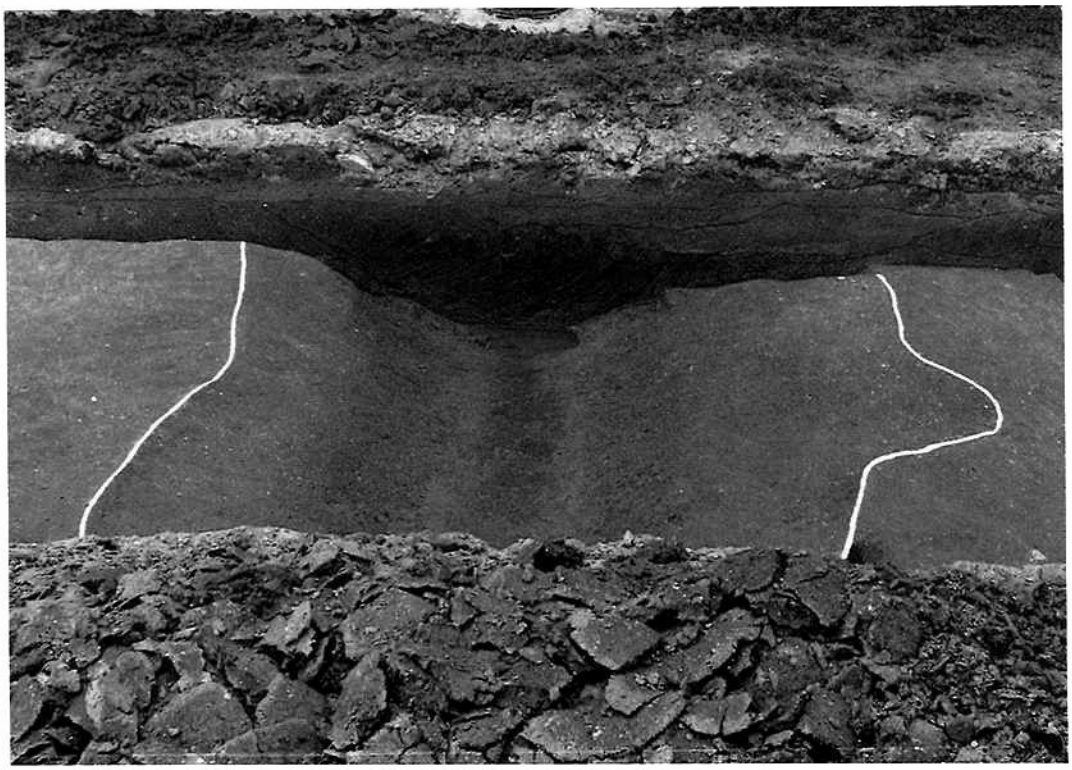

1

5

2

2．須恵器杯蓋・杯

1．SD78 掘削前の状況（東より）

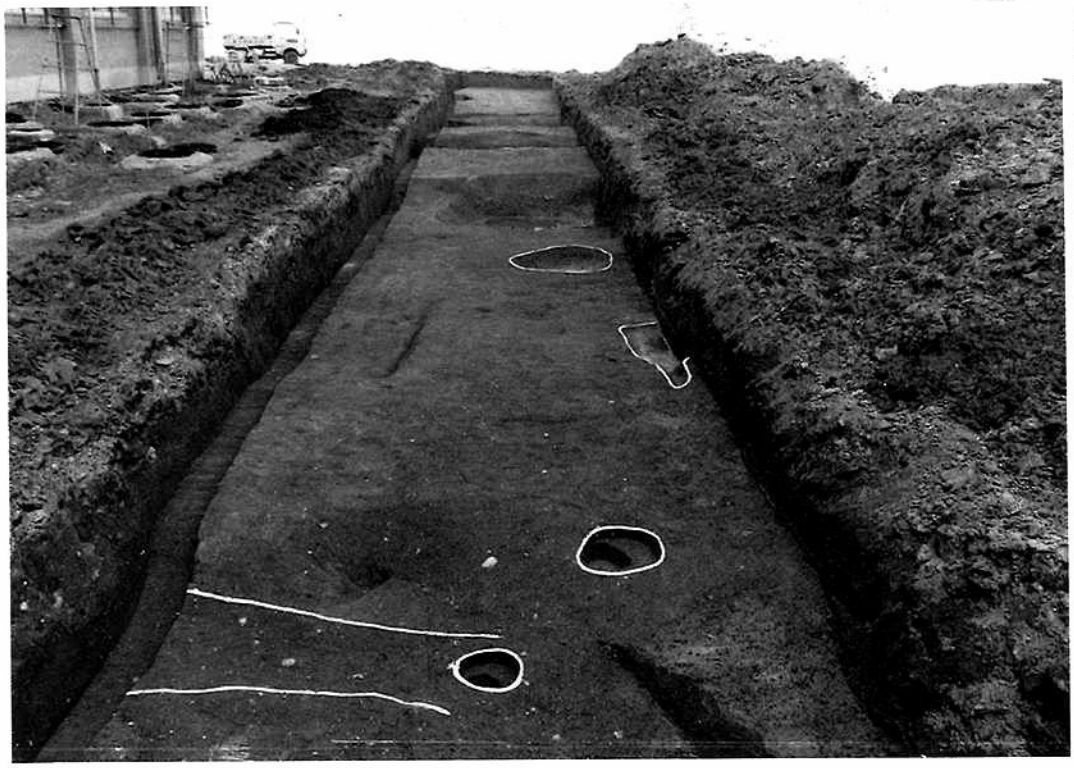


2．SD78 検出状況（東より）

図版30　西の口遺跡　遺構

1．SD 78内遺物出土状況

2．SD78内弥生土器甕出土状況



1．弥生時代遺構全景（南より）

2．SD78周辺土層断面

図版32　西の口遺跡　遺物

14

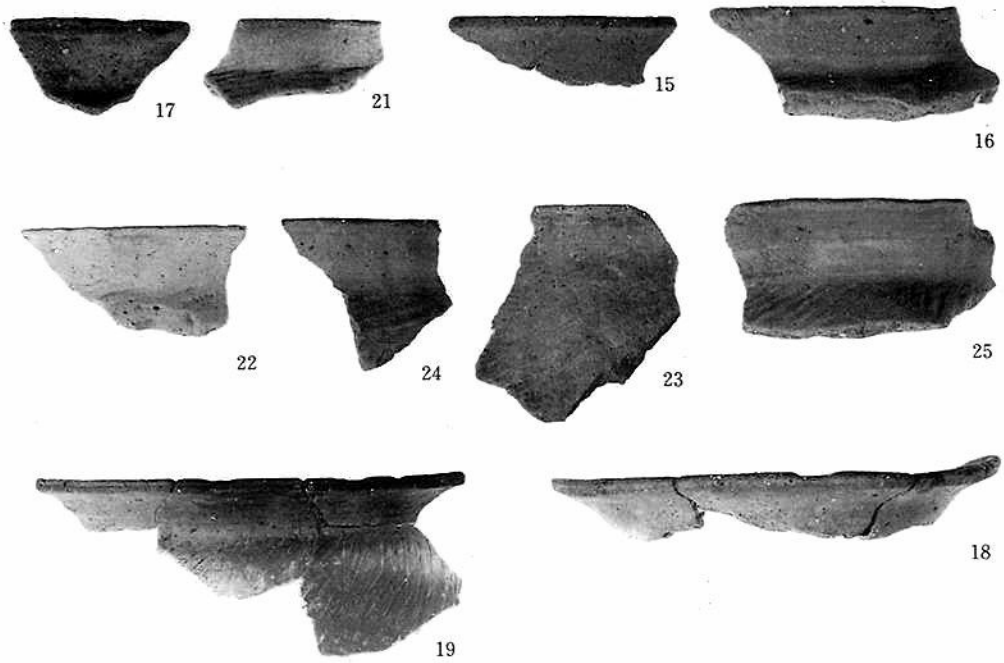
20

7

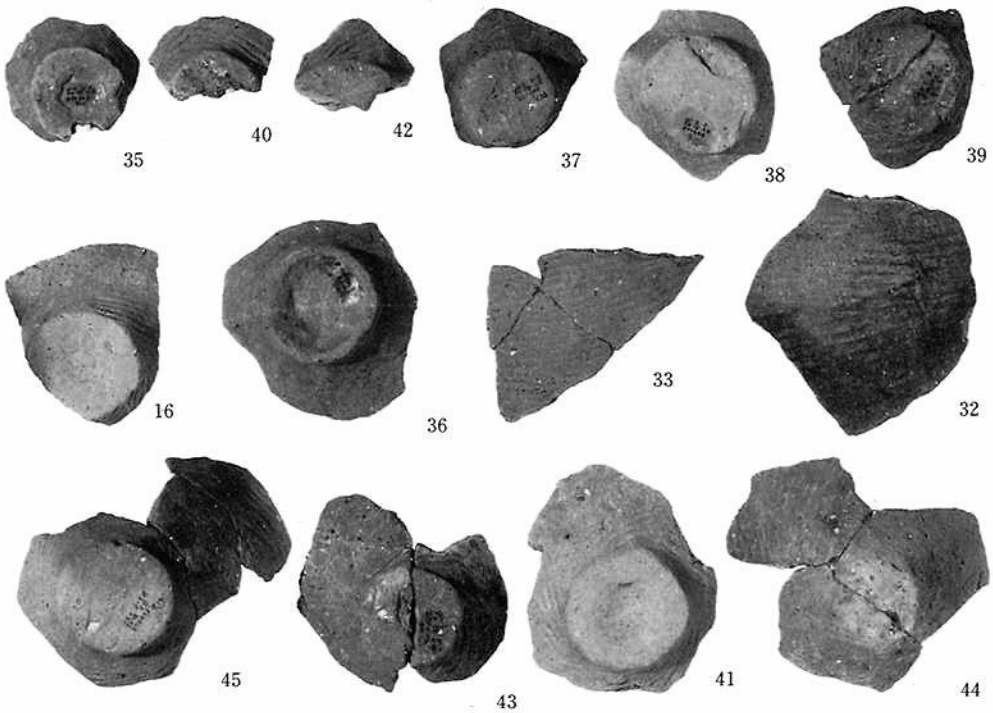
8

26

1．弥生土器 高杯・器台・甕

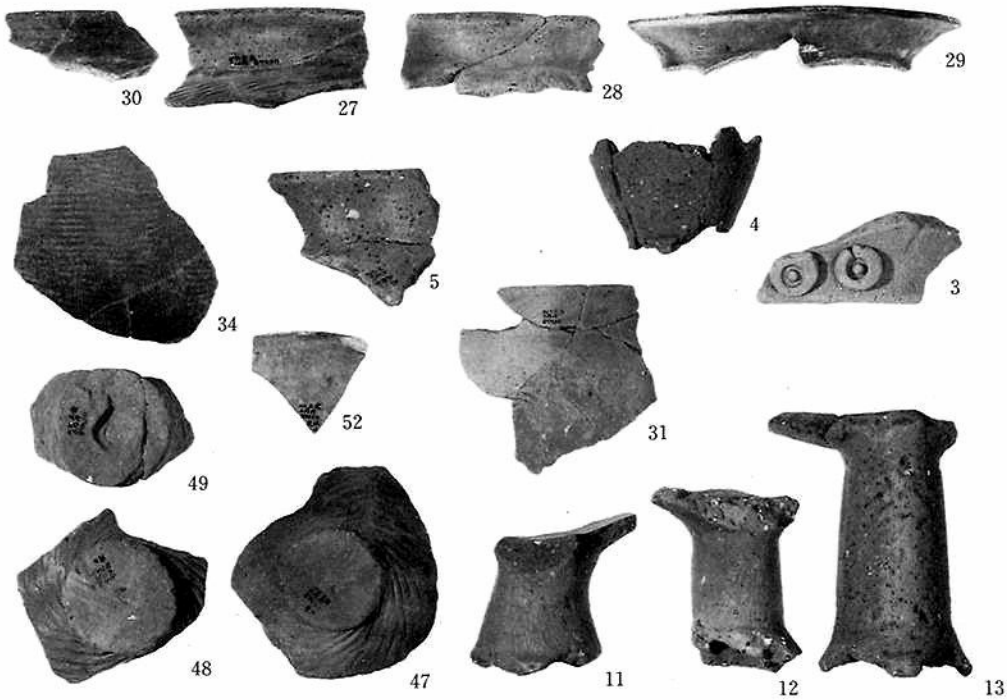


1．SD78内出土弥生土器甕口縁部



2．SD78内出土弥生土器甕底部

1．弥生土器(SD78内)壺・高杯、須恵器杯、白磁碗



2．立会調査出土土器

(財) 東大阪市文化財協会概報集

1990年３月31日

発　行　　財団法人 東大阪市文化財協会

印　刷　　ド ウ ミ 印 刷 広 研 社